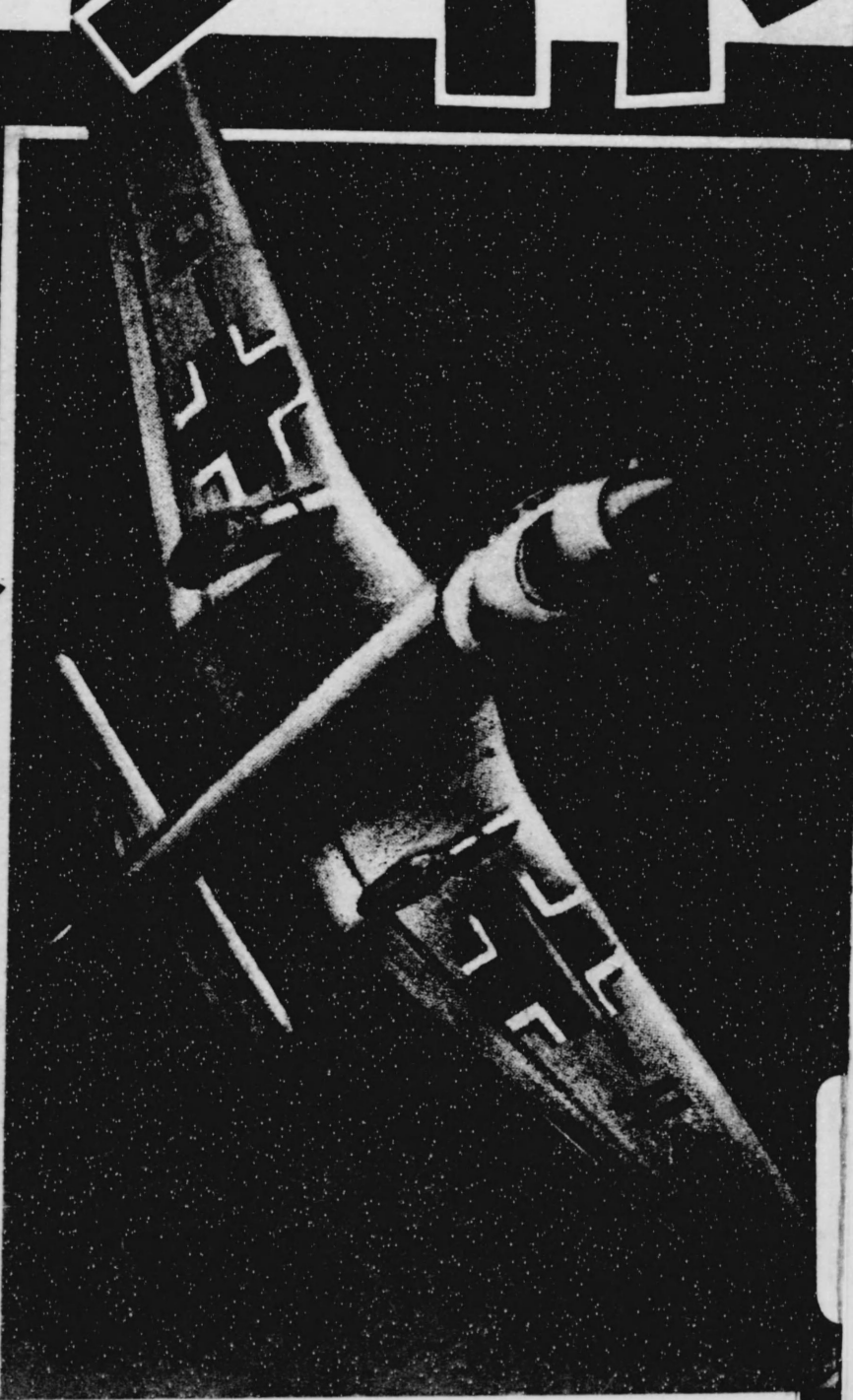
788
204

世界的戦略とは



有馬新次 著

ドイツ的戰略とは

―戰爭と謀略・宣傳―

昭和十五年
第四部

この書をあらたに生まれんとする情報局並にわが父母に捧ぐ

X204

序文

近代の戰爭に於て、謀略・宣傳が戰略上いかに重要なる役割を果しつゝあるかは、今更贅言を要しないであらう。特に今次大戰に於けるドイツ軍の作戰——ヒットラー戰法——は、從來の舊觀念に依る戰鬪形式を根本的に打ち破り、ここに一種の新なる戰鬪形態——即ち、從來かつてなき高度の組織化された政治的科學的陰謀戰を展開した。卷頭の論文は、この意味に於けるドイツ的戰略の解剖にあり、その他の論說は、宣傳との關係に於て、新聞、寫眞、青年問題等に亘る、時局に極めて關係深い問題のみを本書に收錄したつもりである。

私はこの數年間を自分の貧しい知識と思索と努力との一切を傾けて、謀略宣傳戰の研究に沒頭して來たのであるが、自分の菲才と時間の不足は、私の念願とする成果の百分の一にも達し得なかつた。

本書を一讀されゝば解る如くに、私の研究は殆んど、國家總力戰に協力せんとする熱意に燃ゆる、一ジャーナリストとして、自己の分擔する戰野に於ける、その活動を深め、且つ高めるためになされた、はかない努力の現れであり、從つて、廣義の思想宣傳戰に關しないものは一つもない筈である。

しかし、この歷史的變革期にあつて、私の思索と研究は、急速なる時代の推移と共に、不斷に變轉

進化して、既になしたる自己の所見を、次の論文が反駁してゐるといふが如き矛盾撞着は、本書の前後を通じ、隨所に發見されるかも知れない。けれども、それは私の意志と理念が、總力戰への協力＝新體制確立のための方向に始終一貫動きつゝある、といふことを、いさゝかも否定するものではないと信ずる。

否！　私は國家總力戰の最も勇敢なる一戰士として、何人よりも先驅し、その力强き希望と熱意に燃えて、あるひは研究し、あるひは絶叫し、更に幾度か實踐的に鬪ひ來りたるものである。本書は、最も明白にそれを示してくれるであらう。

今私の抱きつゝある國家に對する最大の希望と念願は、あらゆる分野に亘る廣汎なる宣傳政策の確立であり、從つて、確固たる宣傳省の創設である。

この私の年來の主張も、新體制の出現と共に、次第に近づきつゝあるかの如くであるが、私は宣傳省の設立といふ、所期の目的達成まで、決して供手傍觀してはゐない。だが、私は宣傳・謀略戰に於ける我國の現狀に大いに不滿を抱く一人として、飽くまでこれに協力し、宣傳謀略戰に於ける、最後の勝利を導くために鬪ひ進むであらう。

本書の中には、先輩の著者や英・獨の原書より引用し、飜譯した箇所も隨分多いが、煩雜を避ける

ために、敢て引例の著作の紹介をせず、附錄に參考書を示すに止めて置いたが、私に多くの資料と示唆と指導とを與えて下さつた斯學の先輩に、玆に深甚なる感謝の意を表して置きたい。若し、本書の內容に何等か國家に益することあらば、それは寧ろ私を啓發して下さつた、多くの先輩諸氏の功績といふべきである。

本書に收められた諸論文は、すべて昭和十四年十二月より約十ケ月に亘る間に、繁忙の裡に、寸暇を偷んで書き綴つたものだけに、粗雜なる點、重複せる部分も相當多いであらうが、私自身にとつては極めて貴重な鬪爭の記錄でもある。

二、三の研究的な論文の他は、いさゝか私の獨創的な見解にもとづくものであるが、それだけに獨善的自慰的ならざるやを恐れるものである。

先輩各位の御懇切なる御示敎と御鞭撻を、又何人よりの忌憚ない御批評をも喜んで御待ちしてゐる次第である。

皇紀二千六百年
日獨伊三國同盟を記念して

水野正次

目次

一序文

第一篇　宣傳・謀略に關する評論……一

（一）戰爭に於ける謀略宣傳の重要性……三

（二）大戰に現れたドイツの宣傳戰……四〇

（三）戰時下の廣告と宣傳……五一

（四）ドイツの廣告統制法……六四

（五）宣傳寫眞の軍事的役割……七〇

第二篇　「宣傳と新聞」に關する評論……八三

（一）總力戰下の新聞の役割……八五

（二）輿論と社說……一〇四

（三）統制經濟と新聞經營……一二四

（四）國家宣傳と新聞統制……一三三

（五）ディトリッヒの新聞論……一四六

第三篇　「獨逸・國防・青年」問題に關する評論……一六七

（一）ドイツを語る寫眞帖…（寫眞）……一六九

（二）歐洲大戰とヒットラー・ユーゲント……一七九

（三）國防スポーツの現狀……一九一

（四）オリンピア映畫とドイツ・スポーツ政策……一九七

（五）落下傘部隊の研究……二〇四

（六）英本土襲擊と落下傘部隊……二二五

第四篇　寫眞宣傳に關する評論……二三三

（一）戰爭は新しき寫眞を生む…（寫眞）……二三五

（二）青年報道寫眞研究會に捧ぐる文……二三七

（三）國策双曲線（カメラで衝く時局の批判と抗議）……二四九

（四）報道寫眞新聞論……二五七

（五）寫眞批評家に對する批評……二七一

（六）寫眞家よ武裝せよ……二八二

附錄「資料寫眞」五十數葉

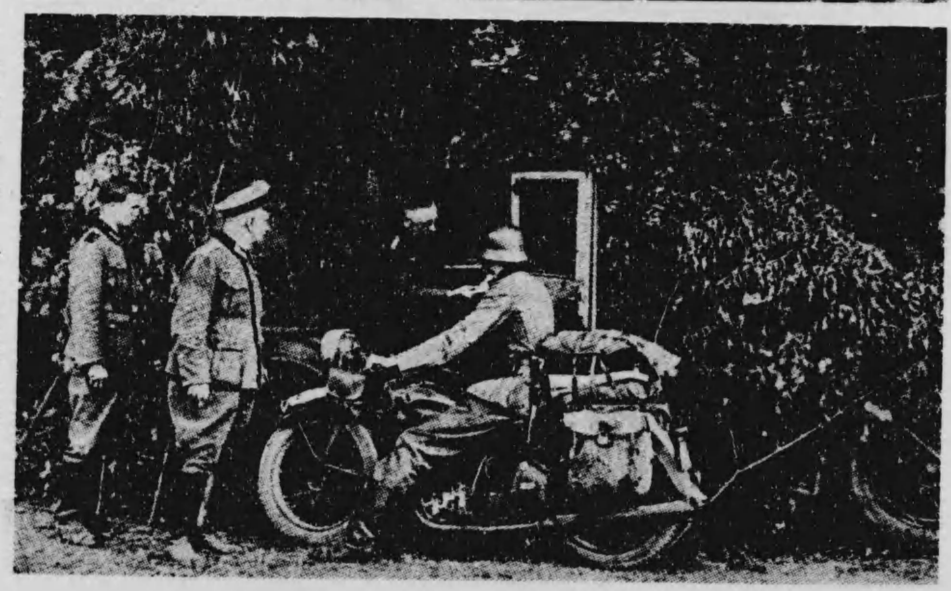
「宣傳研究」の參考書一覽

ゲツベルス宣傳大臣

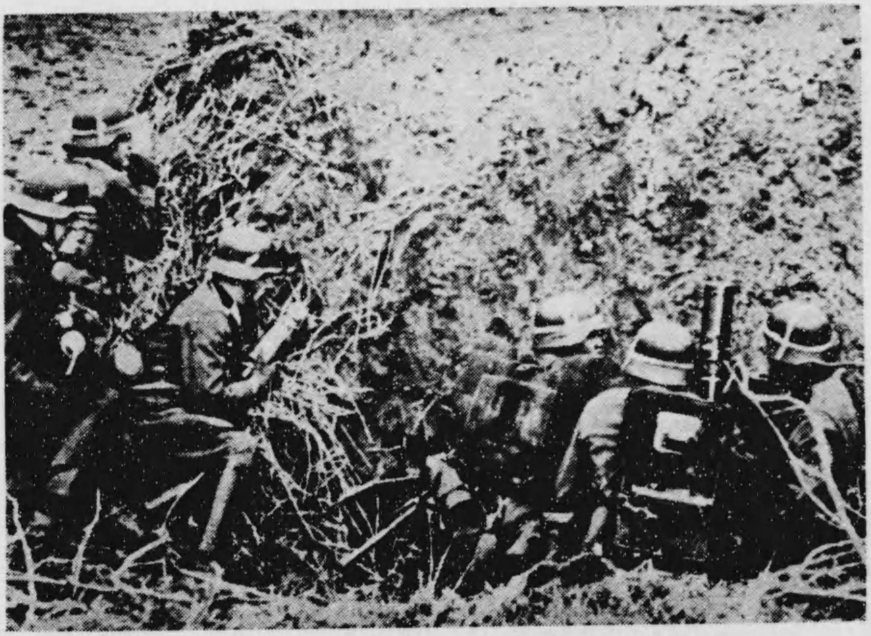
ドイツ軍司令部の無線有線通信隊の通信兵は前線の戰鬪を見てゐる。（三八頁參照）

ドイツ軍は司令官も自動車で前線に出動する。無線電話の備裝を前方に向ふ。大激戰

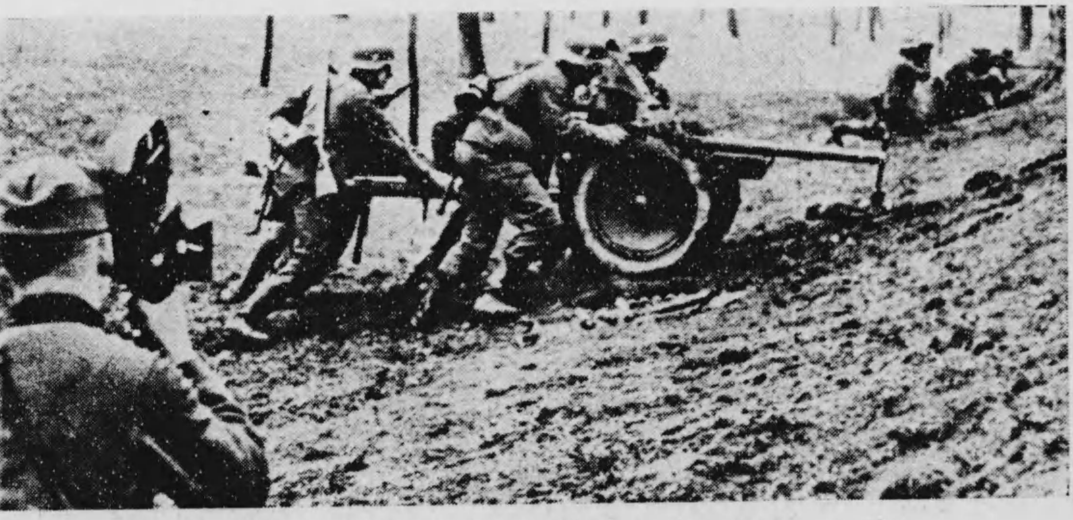
軍司令部の自動車は戰爭の頭であり、心臟である。命令と連絡はすべて無電に依つて迅速になされる。（三八頁參照）



カムフラージされた司令部の無電自動車



マイクを通じて戰況を送る無電隊　　じめじめしたタ壕の
中で敵彈の響き を伴奏とするアンツナンスが續いて行く。



ニユースは寫眞こうして撮されさるる

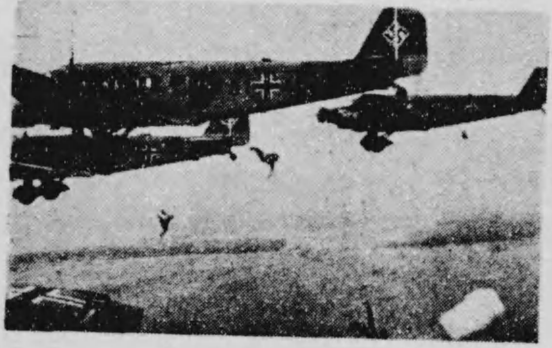
き行へ山小の方前左のあは君」**官令司るす令指にンマラメカ**
（照參頁三八二頁二四）「る來出影撮が闘戰全らなこそあへ給

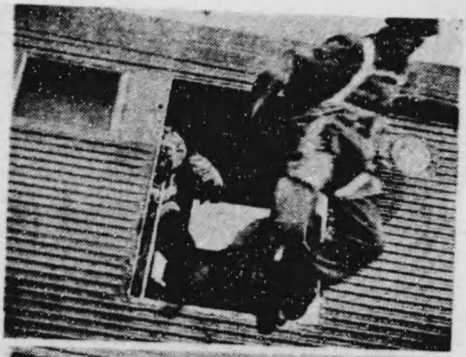
甲裝はンマラメカ」**長隊擊突るへ與を令指に部道報の人四**
を動行と隊彈樫手は師技電無び及員道報眞寫、と隊車動自
「！進前に共と隊擊突は者記信通、しに共

Holland und Belgien

Aus den dahinsausenden Maschinen fällt Mann auf Mann. In dichter Formation fliegen die Maschinen über der Abspringstelle. Schnell hintereinander springen die Jäger, damit die Gruppe möglichst geschlossen der Beute zustrebt

Mit dem Kopf voran in die Tiefe. Die Maschinen sind besonders für den Abspringer eingerichtet (Bilder rechts). Der Rumpf hat eine breite Türöffnung. An den Handgriffen stößt sich der Mann ab, um möglichst rasch aus dem Bereich des Leitwerks der Maschine zu kommen. Die ersten Sekunden des Absprungs sind ein freier Fall. Erst dann öffnet sich der Fallschirm



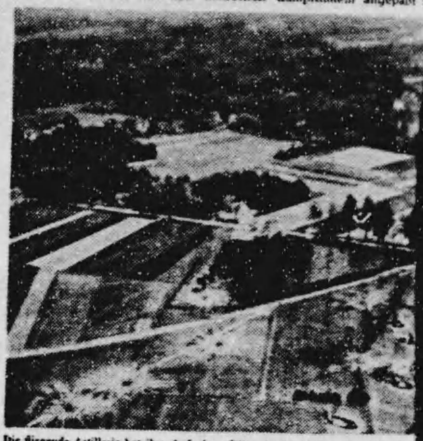


タンモたし調強を躍活の隊部傘下落るけ於に線戰部西
（紙表の「ルナクジ」）眞寫ユヂー

！す迫肉にスンラフてくか　捲席を蘭白で間日八十
部傘下落　例一の眞寫組たし用使を品作の影撮・K・P
フ畫映は分部大）す示を躍活の隊部化械機上地び及隊
雜フラジ用傳宣時戰）（うらあてし節マコのらかムルイ
（照參下以頁四〇二）（りよ「ルナクジ」誌

Ja 18 Tagen

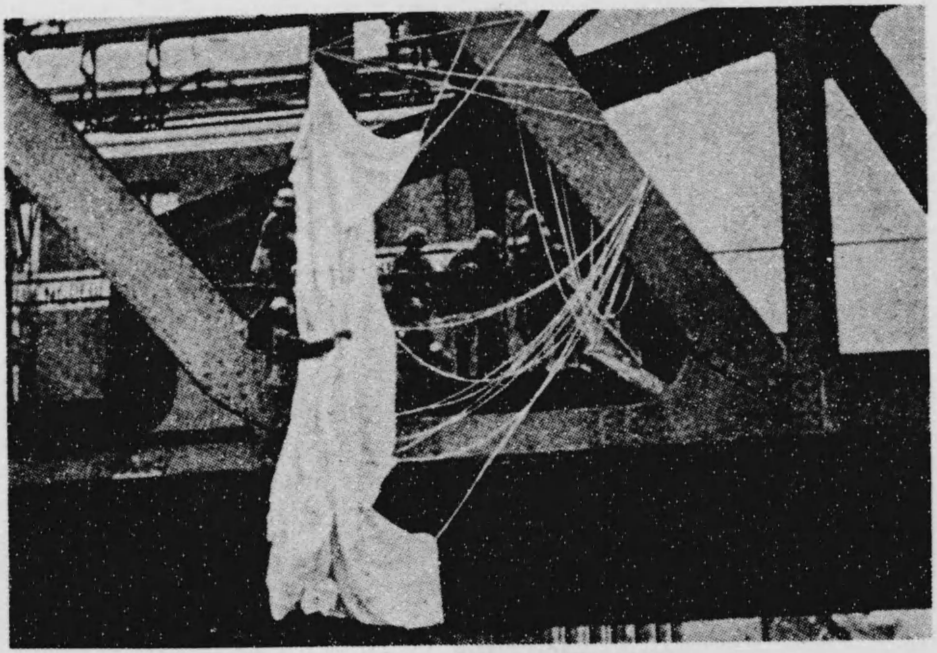
Am 10. Mai beginnt auf breitester Front der deutsche Vormarsch u
die holländische, belgische und luxemburgische Grenze, um
Feind zuvorzukommen. In wenigen Tagen ist mit der Erstürmung
Forts Eben Emael die erste entscheidende Bresche geschlagen.
fünf Tagen kapituliert Holland. Auf eine Breite von 100 Kilome
folgt der Durchbruch durch die Maginotlinie. Die deutschen Pan
divisionen durchqueren im Geschwindstoß Frankreich bis Abbevi
Boulogne und Calais und schwenken nach Osten ein. Im Nord
wird die Scheldestellung überrannt. Am 18. Tag kapituliert
belgische Armee. Wie in Polen entscheiden neuartige Wa
und eine Taktik, die den modernen Kampfmitteln angepaßt



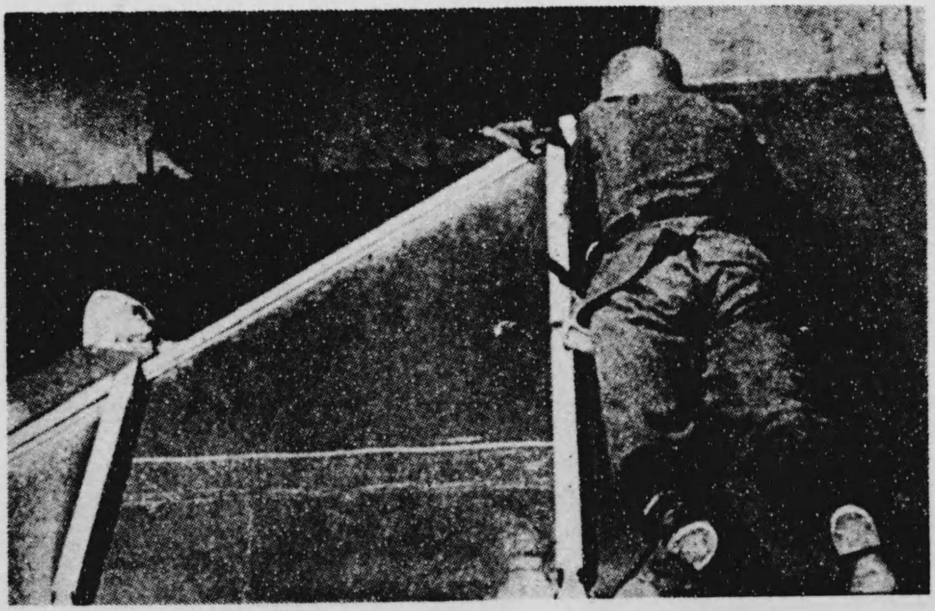
Die fliegende Artillerie hat ihre Aufgabe erfüllt: Am 10. Mai vernichtet der deut
Luftwaffe systematisch 72 holländische, belgische und französische Flugplätze, vernichtet
hundert feindliche Maschinen auf den Boden (Bild oben) und sichert sich vom ersten Tag an
Luftüberlegenheit. Diese Luftüberlegenheit ist Voraussetzung für die folgenden Angriffe der L
auf die rückwärtigen Verbindungen des Gegners und für erfolgreiche Aufklärungsflüge

Blitzartig folgt der Einsatz der Fallschirmjäger. Sie besetzen wichtige Flugplätze
ermöglichen hier den Einsatz der Luftlandetruppen, verhindern an entscheidenden Stellen
Vernichtung von Brücken und Eisenbahnknotenpunkten auf den deutschen Vormarschwe
binden und verweisen feindliche Kräfte im Rücken der Front

COPYRIGHT 1940 BY DEUTSCHER VERLAG BER



隊部トーユシラパ軍獨たし下降に上の黍のムダルテツロ



隊部トーユシラパるす始開を闘戰てに上屋ち忽

第一篇　宣傳・謀略に關する評論

一、戰爭に於ける謀略宣傳の重要性

——ドイツ的戰略とは何か？——

（一）はしがき

私が玆に研究の對象とせんとする主題「戰爭に於ける謀略・宣傳の重要性」＝「ドイツ的戰略とは何か？」＝について、論述を進めるに先立ち、私は本論の讀者の前に、豫め二つの點を、特に明白にお斷りしておかねばならない。

その一つは、歐洲大戰は現に繼續されつつあり、世界的宣傳戰の渦中に蒐集されたる謀略と宣傳に關する資料は、資料そのものが極めて宣傳的要素を多分に含んでおり、その眞相を確め得ない事であり、他の一つは謀略宣傳の技術や創案や觀察が、決して正確なる科學の部門に屬するものではなく、むしろ本能の問題であり、獨自の才能の問題であつて、私の觀察と研究が同じ一つの資料に對して、必ずしも他の觀察者、または研究家と一致するものでないといふことである。

後者の點に關しては、ドイツ宣傳省大臣ゲッベルスが「プロパガンダの技術は決して學び得られるものではなく、才能の問題である。故に、決して一種の熟練や手仕事にはなり得ない。プロパガンデ

イストは人生のあらゆる領域に於て、出來るだけ廣汎な知識を所有しなければならない」と妙味ある名言を述べてゐる。

この教へて教へられず、學んで學び得られぬプロパガンダであればこそ、この種の問題に關心を有するものにとつて、無限の興味が湧くのであり、また盡きせぬ不思議な魅力ですらあり得る。

（二）全體主義政治と戰略との關係

しかし、私が資料の不備と不確實なるにも拘らず、ことさらに今次大戰におけるドイツ軍の謀略・宣傳戰術を研究の對象としたる所以は、本格的なる全體主義戰爭なるものが展開され、從つて、宣傳分野においても、また始めて全體主義的宣傳戰術とも云ふべき獨自の宣傳戰術が、戰爭の舞臺に登場したのも、今次大戰に於て、始めて見られた現象であるからだ。

クラウゼウィッツは「戰爭は他の手段を以てする政治の繼續なり」といつたが、たしかに戰爭は政治の手段であつて、この手段の行使は、主として政治理論に依據し、それに左右されるから、私は政治と戰略との關係の究明から本論を始めねばならない。

民主主義又は自由主義は、政治的、從つて又戰略的に、全體主義戰術を發達せしむるに不適當であ

る。しかも、政治的に全體主義でない限り、その國は極めて不利な條件の下に戰はねばならぬ。

もしも日本が支那事變の開始せる以前に、全體主義機構を編成してゐたならば、現在よりも遙に有利な戰局が展開されてゐるであらうことは想像するに困難ではない。

最近我國に於ても戰時下に適應する新政治體制—即ち、全體主義的政治機構の再編成が要求されつつあるは、この困難にして不利なる條件を克服し、日支事變の解決—所謂東亞共榮圈の確立—をなし遂げんがためである。

ここに全體主義政治機構について、一言說明なしたる後に、全體主義戰爭の上に重要なる役割を占めつつある、私の所謂全體主義的謀略・宣傳戰術論を進めることにしよう。

自由主義＝個人主義＝民主主義は「自由」とデモクラシーの美名に隱れ、一定の個人に大衆を搾取せんとする組織であり、從つて、その自由とは、一定個人の搾取の自由を保證するの制度でもある。

全體主義は、これに反して、すべての個人を共通の福祉に從屬せしめることを目的としておる。即ち、公益は私益に先んじて尊重されねばならず、全體（國家）の繁榮の下にのみ、國民共通の繁榮が許されるのである。個人主義＝自由主義＝民主主義は、自由・平等・博愛の名のもとに却つて法律の

無秩序を招來したが、全體主義は、統制下における組織化を齎らして、これに成功した。しかも、最も肝心なことは、民主主義・自由主義の政府が、討議によつて緩慢に行動するのに反し、全體主義政府は行動によつて迅速に、その目的を達成する。

全體主義は、一種の政治的生存闘爭のための組織であるが、ソ聯の全體主義とは違ひ、マルクス主義者が考へるが如く人間はその經濟的要求によつてのみ動かされるものとは信ぜず、寧ろ人間は食物なしでは生きられぬとは云へ、經濟的存在以上の、何かより高い希望—例へば民族の發展—の理想を抱かずして生活することは出來ない、といふ信念を持つており、自由主義が古き農業的體制文化に依存せんとするに反し、後者は現代の科學的時代に、飽くまで科學的方法によつて生きんとする。從つて全體主義は高度に組織されたる近代科學の所産でもある。

ヒットラーが、ドイツの青少年に「土に親しむ」ことを要求したのは、青少年を、都市文化の頽廢的空氣の中から救ひ、荒廢した農村を更生させ、更に祖國愛—「血と土」の再認識をさせ、また一面協同勞働奉仕に依つて犧牲的勤勞の精神を復活するためであつて、決して舊農業的體制への復歸ではない。

全體主義について完全なる論述を試みんとするならば、恐らく、そのためにのみ一冊の著述を必要

とするであらう。故に、私は本論を進めつつ全體主義そのものをも、明らかにするであらう。

（三） 近代戰の特質とは何か？

十九世紀の當初より第一次大戰を經て、今次歐洲大戰までの戰鬪形態の變遷を、凡そ四つの異つた時期に大別することが出來るであらう。

第一は、近代的兵器を以てする一聯の中世紀的馬上試合（明治初年に於ける各戰役並に日清戰爭まで）にあるのであるが、兵器の進歩は地上に露出してゐた兵士をして單なるロボットたることを拒ましめ、これはやがて塹壕戰に轉化する。

第二は、砲と彈丸との狂亂的爭奪であり、途方もない生命と金錢を犧牲に供して、全戰場を破壞し盡し、前進を不可能ならしめた。（日露戰爭）

第三は、飢餓によつて降服せしめんがためにした中歐諸國に對する計畫的包圍と、無制限潛水艦戰によるその報復である。（第一次世界大戰）

第四は今次大戰に於て最初に具體化されたところの、敵の戰鬪體に對する攻擊よりも寧ろ、兵士の士氣と、それを支へる國民の意志に對する攻擊にある。

この第四の戰鬪方法こそ、私の最も强調せんとするところのものであり、又本論研究の目的は、敵國士氣の破壞と交戰國民の戰鬪意志に對する攻擊といふ新戰術の檢討にある。

敵國の士氣を腐敗せしめ、その國民の戰鬪意志を破壞するといふ武器は傳統的武器ではない。從つて、それは全體主義的に組織せられざる低級な手工業が生產する武器ではなくして、その新らしい兵器とは航空機、戰車、ガス及び潛水艦、更に謀略・宣傳といふ有力な兵器であり、しかも、これは全體主義的政治機構の上に組織されたる所謂高度國防國家にして、初めて生產し得る底のものである。

この新戰術の新しい目標は、兵士の戰鬪力の究極的基礎である敵國民の神經力の破壞を狙ふのである。かくて、士氣の破壞、第一に一般國民の、次には軍隊の士氣の破壞が、新戰術論—即ち全體主義戰爭論—の樞軸となるに到つたのである。

文明とは自然への征服の歷史なりといはれたが、近代の戰爭、特に今次大戰の如きを以つて、戰爭なるものを定義づけんと欲するならば、戰爭とは人間の意志力を以てする機械の征服である、といひ得るであらう。味方の保有し或は敵國の使用する近代的兵器を完全に征服し得る技術と意志力を所持してゐて、始めて勝利の榮冠を獲得出來るのである。

この戰線より銃後に至る、敵國の士氣の破壞といふ新戰術は、航空機と宣傳（ラヂオ）並に謀略戰

といふが如き兵器力の性質の變化に依つてのみ、はじめて成し遂げ得るものである。

（四） 戰爭の運命を決定するものは精神力である

世界の軍事評論家や、軍事消息通の豫想を美事に裏切つた、今次歐洲大戰のドイツ側作戰は、四月におけるノルウエーの攻略といひ、五月十日以後の蘭・白の進擊といひ、全く疾風迅雷的で、全世界は目にもとまらぬ神速果敢なドイツ軍の猛進に、ドギモを拔かれた有樣で、あるものはこれを超不可思議な新兵器の出現によるといひ、またあるものは七十余トンの超重戰車と、これに裝備された大火焰砲の威力にあるといひ、更にまた急降下爆擊と落下傘部隊の神出鬼沒の活躍によるともいはれてゐるが、少くとも今日までに判明せるドイツ軍の新戰術として、特に著るしく、また軍事專門家の一致せる點は、落下傘部隊をもふくむ航空隊と戰車隊と砲兵隊の三つの巧妙なる組み合せに依る所謂電擊的策戰の壓倒的勝利であり、他の一つは極度に發達した宣傳戰——特に後方攪亂工作を、この電擊的進擊の反面に最高度に利用して成功を收めたといはれてゐる。

また他の論客は、武力を伴はぬ經濟體制なるものは、總力的全體戰に於ては、むしろ第二義的な役割しか果し得ない、即ち黃金も、資源も、經濟體制も、對等の實力を持つた長期戰でない限り、高度

に武裝せる國家の電擊的武力の前には、殆んど無力に近いものであると、フランスの敗因を探究してかく結論を與へてゐる評論家もある。

これら一連の軍事評論家の見方は、確に一面の眞理が含まれており、その限りに於て正しい、それ故に必ずしも當つてゐないとは云へないが、決してドイツ軍勝利の眞髓を衝いてゐるものともいひ得ない。少くとも、それはドイツ側作戰の中樞を衝いてゐるとはいひ得ない。

以上の諸說に對して、私は獨逸陸軍參議（駐日ドイツ大使館付武官）マッキー大佐が「經濟マガジン」（八月臨時增刊號）誌上の座談會でされた、歐洲大戰參觀の體驗談の一節を引用すれば、その反駁として十分足りるであらう。

「フランスが技術的にドイツよりも劣つてゐたといふ事に私は考へられません。フランスの對戰車砲も、フランスの戰車も、非常に立派なもので、フランスの砲兵は非常に優れたものです。それにも拘らず、ドイツ戰車に對して齒が立たなかつたといふことは、フランスの各兵科の間に協力が完全になされなかつた結果であります。斯ういふやうな點が、フランスがドイツに齒が立たなかつた原因ではないかと考へます。」

また曰く「たゞドイツの今日の戰勝が新兵器だけによつて成されたものではなく、兵器を使用する

兵員の精神がこれを成し遂げたものである事はお答へ出來ると思ひます。戰爭の運命を決定するものは兵器ではなくして、精神であると言ふことです」ドイツ大勝の原因は、勿論複雜廣汎な領域に亘る問題であつて、これを一言にして斷定することは不可能なことであるが、それにも拘らず「優秀なる兵器に勝るドイツ軍の精神力と各兵科の共同一致の全體的策戰の勝利」は、最早や一點の疑ふ餘地のない根本的要因である。

しかも、この兵器と國民の精神力の强化と防禦力は、決して一朝にして築き上げられるものではない。

また、交戰國の攻擊力が——フランスとドイツとの武力の差違——は、マッキー大佐の云ふほどに何等の懸隔もなかつたとは云はれない。例へば、一九三七年におけるフランスの航空機製作の能力は月產三十八臺といふ殆んど信じられない狀能で、それに反し當時のドイツは月產一千臺を超過するといふ驚くべき數字を示してゐるのである。しかし、交戰兩國の攻擊力が、若しより近似的であればあるほど、益々活力に富む意志、即ち戰鬪的精神力が、驚異的な力となることは必然である。だが、この戰鬪的精神こそは、戰鬪的訓練の組織的强化によつてのみ生ずるのである。

だから、ヒットラーは、祖國の自衞が、最高の道德的義務なりと敎へ、一切を犧牲に供する精神と

訓練の強調に依つて、再び一九一四—一九年の破滅の反覆を防止したのであつた。

（五） フラー將軍の卓越せる豫言

世界の軍事評論家の、殆んど凡てが、ドイツの今次大戰に於ける壓倒的勝利を豫見し得ず、またその半を過ぎた大戰——ノルウエイ、オランダ、ベルギー、フランス——に於けるドイツ軍勝利の眞相を、把握し見極め得ないのにも拘らず、今次大戰の開始されるに先だち、ドイツ、イタリーの全體主義國側の決定的勝利を豫見するのみならず、全體主義戰爭に於いて登場するであらうところの新しい戰術をも的確に豫想した軍事評論家が、私の知る限りに於ては、世界にタツタ一人だけあつた。しかも、皮肉なことには、それは誰あらう、イギリス參謀將校フラー將軍である。

フラー將軍は「伊・エ戰爭の分折と將來戰」と題する一書に於て、全體主義戰爭の戰略を展開して餘りにも美事に、しかも的確に民主主義聯合國側の敗北、全體主義戰略に立つドイツ・イタリー側の大勝を豫斷してゐるのも皮肉である。フラー將軍に從へば『一九一四—一八年の大戰は長期の非決定的な會戰の連續であつたに反し、次の戰爭は、僅か數時間續くに過ぎない一回の突擊であるかも知れない』、といふのである。そして『かゝる戰爭に於ては、聯盟參加國が完全に全體主義戰爭を豫約し

即時行動の動員に備へる大空軍を保有しない限り、かの聯盟といふ、緩慢な制裁と集團保障にあたる不便な機構を存置する餘地がどこにあるか？　加盟國が右の準備を行ふことを同意するにしても、それはそれら諸國が全體主義戰術の基礎を全體主義政治の上に置かない限り、數年間に亘る論議を意味するのだが、それらの諸國の民衆に全體主義的精神が與へられぬ限りこのことがそれら諸國を安全にするであらうか。

例へば、獨佛間に突如戰爭が起つた場合、もしドイツが最初に攻擊を加へるとすれば、社會主義フランスに於てどんなことが起るだらうか？　フランスの攻擊力がどんなものであらうとも、同國が完全に恐慌に襲はれることは、殆んど疑問の餘地はないし、その恐慌は、同國の政治を、從つて必然的に又フランスの反擊力を完全に攪亂するであらう。然し、この豫想を逆にして、即ち、もしドイツが最初に攻擊されるとすれば、同國民はラヂオ宣傳によつて、一貫して軍隊的に統一された、國家的紀律の下に置かれてゐるために、十中八九までは、恐慌は避けられ、同國政府が行動に移り得る時間的餘裕が與へられるであらう。

こゝで、我々は何を見るか。二つの相容れない政治體制間の衝突のみならず、相異なる二つの軍事思想國の衝突を見るのである。民主主義諸國は、政治及び戰爭において後退しつゝあるに反し、ドイ

ツは前進しつつある。前者はそれまでの所、新武器を制限せんと試みつつあるのに反して、後者は最近數年間、日夜新武器の活用を準備しつつある。これらの兵器は、今や極めて強力となつてゐるし、また戰時その偉力が完全に展開されるためには、急襲が必要であるから、もしこの急襲が達成されるならば、勝敗の決は極めて迅速につき、集團保證だとか、經濟的、軍事的制裁の適用などは、實行不能に陷るであらう。かくて我々は、矛盾した情勢に到達するのである。即ち、全體主義戰術の採用が民主主義諸國に對して、その自衛上、强要されてゐる、といふことである。

ところが、民主主義諸國は、政治的に、從つて又戰略的に、全對主義戰術を發達せしめるに不適當である。何故なら、戰爭は政治の手段であつて、この手段の行使は主として政治理論に依據し、それに左右されるからである。もし民主主義國が全體主義戰術の採用を迫られてゐるのだとすれば、彼らが政治的に全體主義でない限り、極めて不利な條件で戰ふことになるであらうから、將來戰における民主主義國側の敗北は、殆んど全く確實であらう。

パリーの政治的脆弱性とロンドンの經濟的脆弱性とを記憶するならば、次の質問を心に問ふてみてもよいであらう。いかなる種類の戰爭を我々は準備しつつあるのか？　もし消耗戰たりして準備してゐるとすれば—それは戰略的に盲目な異物だが—戰へる見込みがあるのか？　もし、短期戰の準備を

してゐるとすれば、我々の組織を再編成をし集團保障に賴ることをやめた方がよいであらう。何故なら、我が國民の規律が戰爭の衝擊に堪へられない限り、第二次聯盟戰爭勃發後、數時間內に、集團保障は、苦もなく集團發狂に化するであらうからだ」

以上の、フラー將軍の論斷は、なんといふ卓越せる豫言であり、また辛棘極まる自己批判であらうか？ もし、この將軍がイギリスの政權を把握し、そして獨裁權が附與されてゐたとしたならば、そして、それが今日より四、五年以前に於て準備されてゐたとしたならば、聯合國側もかくも悲慘な敗北を喫することがなかつたかも知れない。

（六） 精神力破壞の奇襲戰術の重要性

第一次大戰に於て、直接戰鬪に影響を及ぼしたものは戰線に於ける兵卒に對する宣傳工作であつた。ドイツはこの問題に對する價値ある反省を、今次大戰に於てその實踐に於て證明したのである。確に戰爭の運命を決するものが、兵器よりも、寧ろ、將兵の士氣と國民の戰鬪的氣分により多く懸つてゐることは、既に私の繰返し述べたところであるが、まことに一國民の戰鬪的意志力の如何は？ 平時戰時を通じて、その國の興廢を左右する決定的な要因である。前記フラー將軍の全體主義戰術の

研究は、このことに於ても亦、クラウゼウイツツの戰爭論を、一歩前進せしめたる、卓越せる見解を吐露してゐる。

同將軍に依れば『現在の戰爭條件においては、國内の一般住民も攻擊から直接保護されることは出來ない。それ故、もし、一般住民の神經が攻擊によつて動搖せしめられるならば、彼等の意志は痲痺せしめられ、その結果彼等の戰鬪力が崩壞するであらう。それ故に、純軍事的見地からすれば、一般住民に對して攻擊を加へることは、論理的であり、時間が死活的要素たる場合には、たしかにそれは論理的である。だから、戰爭は、クー・デターの形をとらねばならない。動員ではなく、陰謀の形を政治的雷鳴を前觸れとする空言ではなく、青天に霹靂といふ形をとらねばならぬのである。

現代の戰爭は、科學を基礎としてゐるのであるから、たゞに戰鬪部隊が、益々科學的にならなければならないのみならず、老若男女の一人一人が、敵にたいして戰鬪を挑む一大キヤタパルトに形成され得るやうに、全國民にたいして、科學的方法が適用されねばならない。

かゝる戰鬪においては、奇襲が不可缺のものであることが、直ちに了解されるであらう。だが、最も强力な奇襲形態は、時間の上の急襲又は打擊を與へるスピードではなくして、兵器又は戰術の新奇さによる奇襲であるといふことはまだ認められるに至つてゐない』

だから、この新しい戰爭樣式と舊來の戰爭樣式との相違は、目的の相違といふよりも、手段の相違である。即ち、舊戰爭樣式においては、その目的は摩損であり、敵國の餓えたる民衆の叛亂によつて精神的効果を收めるまで、敵の資源を消耗せしめることにあつた。

だから、イギリスは、今次大戰に於ても、ドイツの經濟的封鎖の戰術を執拗に繰返して、それに失敗した。だが、新戰爭樣式においては、飢餓の苦悶が減ぜられたに反比例して、精神的崩壞が、敵の一般國民の神經にたいする直接的攻擊によつて達成されるのであるから、ドイツはフラ！將軍のいふ奇襲戰術ともいふべきものを採用した。ジヤーナリズムはこれを電擊戰と名づけたが、この電擊戰は敵を傷つけ、徐々に人事不省に陷らしめることの代りに、むしろ、敵國民の意志を、一擊のもとに痲醉せしめ、粉碎せしめる方策をとつたのである。

故に、戰爭の新手法—今次大戰に於て見られるが如き—は、恐怖思想に基礎を置いて構成されたものであつて、全滅又は破壞の思想に基づくものではない。

その目的は脆弱なる敵の恐怖本能を眠覺めさせることによつて、戰鬪意志を逐ひ拂ふにある。從つて、その狙ひ所は、意志に對して意志を押しつけようとするのではない。だから、チエンバレンが「英佛兩政府は信賴出來るドイツ政府とならば和平交渉に應じよう。但し、ヒットラーはその中に入

らない」といふが如き他愛もない離間政策は、全國民の規律ある統制の組織を有し、しかも全體主義によるヨーロッパ新秩序の再建といふ確固たる理想をもつてゐるドイツ側にとつて、何等の痛痒をも與へることは出來ない。

それよりも、むしろ「今やドイツの最後通牒を突きつけ得る時期は過ぎた。余らは爆彈一箇に對して、五百個をもつて報ひよう。余は英佛と敢て戰ふ意志はない。しかし、戰爭を强ひられるならば、六年掛からうと七年掛らうと、降伏といふ言葉は、余の口から出まい」と、喝破する方が、單なる聲明戰としても、遙により効果的であらう。

しかして、この奇襲・謀略の新戰術の狙ひ所は、恐怖を確實に敵國民と兵士の上に捲き起すことにある。從つて、新戰爭手段の背後に横はる策戰は、敵を狂亂に陷らしめるといふことである。即ち、相手國の兵士と國民、戰線と銃後に、戰鬪意志を完全に喪失せしめる徹底的なる衝擊を與へることである。いはゞ戰線より銃後に至る精神戰線を徹底的に破壞するにある。

（六） ドイツ的戰略の樞軸としての謀略宣傳

奇襲・謀略による相手國の士氣と、國民戰鬪意志に對する徹底的衝擊といふ新戰術を、ドイツ軍が

今次大戰に於て、いかに活用したかを、暫く研究してみよう。

全體主義戰爭の最も完全なる効果とその主要なる戰術目標が、一般國民の意志に打擊に加へることにあるといふことは、全體主義戰術の基礎が空軍とラヂオ宣傳の上に立つてゐることを以ても、もはや明白である。

高度に文明の發達せる國（フランス、イギリス、ドイツ）にあつては、その目標とする一般國民の意志（即ち人間）が、容易に空襲し得る都市に集中されてゐる。首府の存在する都市は、その國民の意志の集中的表現でもある。それ故に空軍に依る都市の空襲は、益々必要の度を高める。

しかも、ここに最も注意を喚起したいのは、私をして云はしむるならば、逆説のやうではあるが、空襲の目的は、敵國の人畜を殺傷し、家庭の破壞をするにあるのではなくして、その秩序を混亂せしめ、その意力を殺ぐことにあるのだ。言ひ換へれば、敵の人心に、恐怖と混亂と、戰鬪意力を喪失せしめる手段として、殺傷と破壞をなすのである。

事實、空襲に依つて起る一般國民の恐怖は、その國民が無訓練であり人心の統一を缺いてゐる場合には、一層實際の被害よりも、遙に比較にならないほど大きいものである。强烈無比なるドイツ軍の爆擊と、砲擊は全く精神を錯亂せしめる。ワルソー、ロッテルダム、ダンケルクに於て、急性の市民

の氣狂ひが、街の中を、軍隊の止めるのも聞かずに、右往左往してゐた。又軍隊の方も第一線に居つた者は、この猛烈な爆擊と砲擊に遭ひ、精神喪失狀態になつて、家の中に逃込んで來る始末で全く收捨すべからざる混亂狀態となつた。空襲の狙ひ所は、實にかゝる精神的衝擊の被害を與へることにあるのだ。

ドイツ空軍が、戰車砲兵、その他の機械化兵器との、緊密なる共同作戰を以て、常に電光一閃のスピードを以て、一瞬にして敵をたゝきつけんとするのは、戰意の乏しい相手國（ノルウエイ、ベルギー、オランダ、フランス）に恐慌と混亂を捲き起させるためで、戰車及び砲兵に依る同時攻擊は、空襲及び謀略宣傳に依る、精神的混亂を一層擴大强化せんとする、一種の掩護射擊に過ぎない、と見ることも出來るではないか。

ドイツ軍の作戰の妙諦が、かゝる精神攻擊のテロリズムにあることは、いまだ眞僞のほども明白ではないが、恐らく、事實と思はれる今次大戰に於ける種々の新戰術——例へば、爆擊機や爆彈に强烈なる音響を發する仕掛をつけ、心理的な恐怖と狂亂を狙つたこと、幽靈落下傘を投下して後方攪亂を策したこと、無音爆彈や、遲發（時計仕掛）爆彈を投下せしこと、第五列部隊、並に、落下傘部隊に依る、謀略戰術を極度に活用せしこと、その結果、殺傷される兵員よりも豫想外に捕虜が多く、ポー

ランド戰で七十萬、ベルギー、オランダで投降した聯合軍百二十萬、フランス戰に於て百五十萬といふ樣に、凡そ想像も及ばない多數の捕虜を得たる事實は、私のこの推斷が必ずしも不當ならざるよい證明ではあるまいか。

だが、ここで謀略と宣傳に對する定義を一應明白にして置くべき必要を感ずるのであるが、私が謀略といふのは諜報機關との連絡と組織的關係に於てなす政治工作を謀略といひ、組織的に、計畫的に相手の心理に、自己にとつて有利なる精神的衝擊(ショック)を與えることを宣傳と稱してゐるのである。

しかし、こゝに考へなければならないことは、ドイツ軍の謀略戰の勝利が、ドイツ諜報網と、その活動戰術の勝利をも意味するといふことである。

ドイツ諜報機關の巧妙なる作戰の成功は、ベルギー、スイス、オランダの英佛側の特務機關の買收である。この買收によつて、英佛特務機關は、彼等の本部に齎らしたところのドイツ側作戰計畫と稱せられたるものは、ヒットラー總統は、對英攻擊を行はない間は、對佛進擊を開始することなし、一九四〇年中にはヒットラーは、西部戰線を攻擊せず、また、バルカン方面に全力集中しつつあり、といふ極めて出鱈目な報告であつたといはれてゐる。

ドイツのオランダに於ける、フランス特務機關の買收と、その活躍は、フランス國內に、いかに反映したか、謀略はいかなる成果を獲得したか、朝日新聞特派員鈴木文史朗氏の「賴り過ぎた奇蹟」と題する「フランスの倒れるまで」の同氏の滯佛所感は、この間の消息を如實に物語つてゐる。

『何れにせよ、今年の四月から五月上旬に入つても、フランスには國民總動員といふ形に比例する白熱的な戰爭意識は缺けてゐるやうに見えた。それは、昨年九月戰爭開始と同時に、ドイツの飛行機は大擧してパリを空襲して來ると思ひ、一時は周章もし決心もしたが、それもなく……反對に、ドイツは決してフランスを攻めないといふ念の入つた宣傳を、宣傳だ宣傳だといひながらいつか信じ始めてゐた形もある。これが一般普通人許りでなく、軍や政府の首腦者の心の隅にも巢食ひ出してゐなかつた、とはいひきれまい。

だから、ドイツ軍がスカンヂナヴイヤへ進入したのを見ても、成程彼らが反復して叫んで來たやうに目指す敵はイギリス一國で、ノルウエーの南端からイギリス攻擊を始めるのだらうとも思つた。つまり、大段平を引つこ拔いた男が、自分の門口を通り過ぎて向ふの方へ素飛んで行つた——まあ良かつた、といふ一安心があつた。パリでは、オペラをはじめ劇場その他は平常通り續けられてゐた。』

また、當時のフランスの狀態を、次の如く述べてゐる特派員もある。

英佛同盟さへあれば、獨伊の如き貧乏國の樞軸何かあらんと、いふ印象をフランス國民に與へてゐた政府の宣傳も、「今度の戰爭は樂だ、長期持久戰になるのだから、やがてドイツは戰はずして、內側から崩れる」といひ、フランス人は今度の戰爭では立つ必要はない、マジノ線にへばりついて番をしてゐる。其うちイギリスの再軍備も成り、やがてアメリカも味方に加はるだらうと信じ、萬事他力本願であつた政府も、いたつて呑氣なら國民も呑氣であつた、何事もイギリス委せ、ポーランド問題でイギリスがたつと、フランスもそれに倣つて宣戰した、ポーランド戰爭は瞬く間に濟んでしまつたが、その後は戰爭をしてゐないのか判らない、妙な戰爭だとみんないつてゐた、兵隊はマジノの蔭に無聊に、銃後の國民も戰爭のあるのを忘れたかのやうであつた。

人民戰線時代の赤化思想は、牢乎として拔く能はず、これではならぬと政府は「ドイツはなか〳〵參らぬ、樂な戰爭ではない」といひ直して、奮起させようとしたがおそかつた、戰爭反對の聲が方々で起り始めた、「われ〳〵はなんだつてこんな束縛された生活をつゞける必要があるのか、ドイツは攻めて來ないのではないか、戰爭のないのに不自由するのは馬鹿々々しい」その答として、「フランスはイギリスのダシに使はれてゐるのだ」といふ考へが一般に行はれ出した、敵愾心とか、戰鬪精神といふものは全然みられなかつた、そこを狙つてドイツは、英佛離間の宣傳を行ひ、それが確かに效

果があつた、ドイツ飛行機は爆彈は投げずに「チャーチルは最後のフランス兵一人にいたるまで、戰はさうとしてゐる」といふやうな反英ビラをしきりに撒いた。

また、イギリス兵はいくらもフランスに送られなかつた、シャンゼリゼーのカフエーで、イギリス兵が十二、三人かたまつてゐると、フランス人はかういつた、「見ろイギリス派遣軍が全部集つてゐるよ」それにイギリス兵はフランス兵の手當の十倍も貰ひ、夜は遲くまで外出を許されてゐる、例の商賣女などは、イギリス兵に占領されてゐた、この恨みは相當深刻だつたと思はれる。そこへまたドイツのラヂオがフランス語で放送してくる、例の「ジークフリード線へ洗濯物を乾しに行く」といふイギリス兵の歌をもぢつて、「ジークフリード線には、フランス兵を差向け、おれたちはあとに殘つてフランス女と遊ばうよ」といふ唄が流行だし、ドイツの英佛離間策は完全に成功した。ノルウエー戰爭の如き「あれはイギリスの受持だから」と、フランス人は他人事のやうにいひ、フランス兵はマジノ線の内で、インターナショナルの歌を高唱する始末であつた』。

今次大戰に於て、一躍新戰術の花形となつた落下傘部隊と、第五列部隊との緊密なる連絡を以てする後方攪亂戰術は、その最も優秀なるもので、ドイツ軍は、五月十日の午前二時、落下傘部隊がオラ

ンダ領に着陸せる頃を見計つて、オランダ放送局と同一波長を以て、同國々民に向つて「ドイツのデザント部隊がわがオランダ各地に降下したが、彼等は蘭軍と同樣な服裝をしてゐるから嚴重なる警戒を要す」との苦心の謀略放送を行つたといはれてゐるが、この謀略戰術は、ワルソー陷落に先立つて、ワルソー放送局と同一の波長で、ポーランド語を以て「ワルソー陷落」を放送し、後方攪亂の機略を用ひ成功したといふ試驗濟みのもので、落下傘部隊の主要なる任務が、戰車隊進擊の要地——マース河及びワール河の鐵橋を守るとかロッテルダム飛行場を占據する……といふ直接の軍事的目的にあると云ふよりも、遙に、多く後方攪亂といふ効果を狙つてゐることは、落下傘部隊と共に、謀略班が加つて落下した事實より見て想像に難からぬところである。

九月十三日に、AP通信員ロイド・レールバス氏は、當時ポーランド軍に從軍中であつたが、ポーランド南部の某所から國際電話でもつて、ニューヨーク市のAP本社に「獨空軍は波軍の後方攪亂を目的として、落下傘決死隊を組織し、ひそかに多數のスパイを落下傘で飛降させ、波軍の司令部所在地、同飛行隊基地、軍需工場地帶ならびに連絡線などを偵察させた」と、ドイツ軍落下傘によるスパイ戰鬪を報告してゐる。

落下傘部隊降下の新戰術は、オランダ軍及び國民に全くの混亂を與へ、夜明けと共にデザント隊に

對する警戒は極端に强まり、その結果は、自國民の軍隊を見ても獨軍の變裝した大部隊ではないかとの疑ひを抱き、同士討さへ隨所に演じ、流言は亂れ飛び、ドイツ軍がいまだ近づかない先に、避難民は雪崩を打つて西に東に殺到し來る、軍用道路は避難民のために杜絶する、經濟生活は波綻を來す等、拾收すべからざる混亂狀態となつてしまつた。

ドイツ軍のこの後方攪亂戰術——謀略・宣傳——が、いかに巧妙であり、また、いかに効果的であつたかを證明するために、フランス陸軍情報部のアンドレ・モーロア大尉の敗戰手記——即ち、オランダ、ベルギー戰線に參加したフランス軍參謀將校の確認する聯合軍敗北の眞因について書けるものを、ここに紹介しておくとしよう。

「村に爆彈が落ちると、何處の村にもドイツ人やベルギー人の第五列がゐて「時間のあるうちに避難せよ。この村は間もなく全村破壞されるに違ひない。飛行機の後から來るものはゲシュタポである。ポーランドがどんな酷い目にあつたかを、われわれはよく知つてゐるはずではないか！」

住民は第五列と知らずに、この言葉に耳を傾けて、村長、敎區牧師、町役人とともに村を立退くのであるが、それは驚くべき光景であつた。道路といふ道路は避難民で溢れてゐた。潰走といふことほど傳染し易いものはない。われらの機械化部隊はあのやうに美事な編隊で第一日を出發したものだが

間もなく避難民のために蹄きがとれなくなつたのである。一九一九年にアミアンの前線が破れた時でも、このやうな潰亂狀態は見られなかつた。なぜか？　それは綿密に繰り廣げられたに相違ない恐怖の言葉に、その土地に深い愛着をもつ人々までが、測り知れない危險から逃れようと欲したからである。前大戰には何の情報も知らされず自若としてゐた農夫達も、こんどはラヂオといふものが怖ろしいニュースを傳へる。その上、ドイツの飛行機は數において斷然われわれに優つてゐたから、この不幸なる人々は自分達に、なんの防備もないといふ印象を受けたからである。絶望的恐怖に囚はれた人々は、われ先きにと潰走した。……ドイツ軍の突破は直接的かつ完全であつた。どうしてこんなことになつたのか？　それは集團と恐怖との結果である。數千の火焔放射タンクとサイレン附の飛行機が、コラップ將軍の軍隊に襲ひかかつたのだ。豫期せぬ脅威にさらされて、勇敢なる彼らも陣地を守備する何の術も機會もなかつたのである。……セダンの慘劇の後、私の屬してゐた英軍參謀本部は敵の鋭鋒を避けようとしてアラスへ向つた。アラスの町は流言飛語でわきかへり〃ドイツ軍はすでにドウエに達した〃〃もうカムブレまで來た〃といつた風で、つひには軍首腦部まで、その虚報を信じ、分遣隊に海岸線へ退却するやうに命令した。海岸線に達したその分遣隊は勿論、まんまと敵の捕虜となつたのである。第五列の流言飛語が機械化兵團の進む地ならしをしたのだ。

ドイツのパラシュート兵が相當の役割をしたことは確かであるが、彼等に對する恐怖といふものが彼等の効果を十倍にもした。農夫や兵士達の眼には、すべての服裝が變裝としか見えない。制服の將校でも、いつ贋物になるかも知れない。公式の電話さへ疑ひをもつて聞かれるやうになつた。」

（以上の佛文喜多莊太氏譯）

アンドレ・モーロア大尉のこの手記によつて、ドイツ軍の謀略戰が實に驚くべき緻密な計畫のもとに、いかに有効適切に、その作戰中に織り込まれてゐたかを窺ひ知るに十分である、と同時に、私の觀察の必ずしも獨斷ならざることを立證してくれるであらう。

（因にモーロア大尉の手記は、本書の校正中に發見したもので、私の前述までの觀察と推論を餘りにもよく裏書してゐるので、校正中敢てこれを複足したものである。）

即ち、ドイツ的戰略の樞軸たるものは、急降下爆擊機、戰車部隊、砲兵隊等の破壞的偉力に依つて敵の抵抗力を痲痺せしめ、恐怖と戰慄を與へたその上に、落下傘部隊と第五列部隊並びにラヂオ宣傳等に依り、一般國民の神經戰線に對する直接的攻擊によつて、その戰意を喪失せしめ、混亂と恐慌の眞只中に叩き込むといふ一種の一大謀略戰であつた。

この點、ベルギーの一捕虜の語つたといふ談話に依つて、何よりも雄辯にその事實が裏書されてゐる

「自分達はこの要塞の守備についてゐた者で、指揮官ボヴィ少佐以下七百名であつた。戰鬪開始するや不幸にも敵爆彈のために司令塔を破壞され、ボヴィ司令官もその時重傷を負ふて、近くの病院に入るを餘儀なくせられた。人望殊に篤つた司令官を要塞の中から失つたことは、先づ我々の第一のいたでゞあつた。それに恐ろしい唸を生じて急降下爆擊機のねらひ落す爆彈の臭ひ、地下約十米まで不氣味に傳はつて來るすさまじい炸烈の震動、隣接の要塞のつぎ〳〵の陷落の知らせ、特にフロレン要塞司令長官が萬事窮して自殺し果てたことなど聞傳へて、食料や彈藥こそまだ〳〵餘裕もあつたが、我々もここでまご〳〵してゐては全滅してしまふのではないかといふ恐怖心、又如何に文化設備がとゝのつてゐるとはいへ、この地下三十五米（メートル）の明けても暮れても灰色の穴居生活は決して樂しいものではなく、これ等のあれやこれやが集つて要塞內の兵士等の心を動搖せしめ、かくあつ氣なく自分達を降伏に導いたのである。全くパニック狀態にあり、誰いふともなく降伏してしまつたのである」

（觀音寺三四郎氏「西部戰線從軍記」）　中央公論昭和十五年九月號

今月（昭和十五年八月）までのドイツ軍の戰略を檢討するならば、ヒットラーが、その心中に抱壞するところの意圖が、外交においても作戰においても、非常に强力な戰爭手段（軍隊）を建設し、これを準備し活用することに依つて、戰爭の刺激による恐怖、又は混亂を誘導しつゝ、自己の目的を達

することを常套手段としてゐることが解る。

この數年間に於ける、ラインランド、オーストリー、ズデーテン、チェッコ、メーメル等の失地回復——ナチスの謳歌する「無血の勝利」こそは、ドイツ間諜工作の勝利である。ヒットラーは、國際情勢が獨、墺合邦を承認しないを看取し、オーストリーにナチスの反亂を起させ、又幾多の政治工作を以て、その目的を達したのである。

かくて、ヒットラーとゲッベルスとは、前大戰まで宣傳・謀略が、單に軍民離間、中立國の參戰妨害、後方攪亂等——主力戰よりすれば、むしろ副次的な役割しか果してゐなかつたところのものを、戰爭目的の遂行を不能に陷れしめる力學的(ダイナミック)な、且つ有力な武器にまで高めることに成功せしめたのである。かくて、宣傳・謀略の戰術が、戰略の中心題目となつて浮び上り、單なる「紙の爆彈」としてではなく、最も戰慄すべき効果的なる「毒瓦斯」として登場するに至つた。故に宣傳・謀略こそ、近代戰に於ては高貴な代價を拂ふに値する最も有力なる武器といひ得るのである。

「當時ベルギー軍の中に既に獨逸軍に內通する者が、かなり居たさうだ。例へばベルギーのフラーメン人部隊（これは低部獨逸語を用ひるゲルマン族である）などの中に親獨的なベルギー軍がいざ砲擊開始の時など、砲口とそこへ運ばれた砲彈が全て一致しない別のものであつたり、アルベルト運河

の要塞など破壊しないで逃げ去つたり、獨逸軍の爆撃を誘導したり、又一般の街角に張り出された野菜のポスター廣告の裏を引きはがすと、市の詳細な地圖が書かれてあつて、落下傘部隊や先着部隊はすぐさまこれを利用して活躍したといふ事實もあるとのことだ。」（海吾寺三四郎氏「西部戰線從軍記」）

ノルウエー作戰においては、シカゴ・デイリー・ニュース特派員リーランド・ストウ氏が、「二十世紀最大の怪奇な陰謀」と呼ばれる、「第五部隊」による無音無聲の攻略が行はれた。即ち「諸威の首府オスローは、千五百名以下の人員で占領され、市内では一個の爆彈も落下せず、一發の銃聲も聞えず、何等の反抗も試みられず、二十四時間以内に堂々占據され……第五部隊キスリング氏の親獨派との連絡と上陸作戰の齟齬のため「ブリュツヘル」號が、オスカーボルグの要塞地で撃沈せしめられた不詳事件を、他にしては、ナルヴイツク、ベルゲン、トロントハイムの陷落も、オスローと同巧異曲の經過を示し、全諸威海港は、緻密なナチス第五部隊の工作と、諸威の内通者とに依り、十二時間の白日夢の中に、完全に獨逸軍の制壓する所となつたのであつた。」と、報道してゐる。

征服者は、かくの如く常に絶大なる冒險を賭さねばならぬが、巧妙なる謀略作戰は、冒險を冒險でなくせしめるところにあり、又宣傳・謀略戰の功果は、味方の軍隊と共に敵軍の損傷をも最小限度に止めるところにある。

以上に、列擧せる二、三の實例に依つても、今次大戰におけるドイツ軍の宣傳・謀略が、その戰略上に、いかに重要なる地位を占めてゐるかを理解するのは、讀者諸君にとつても最早困難なことではないであらう。

しかし、宣傳謀略を、武士道に反する卑怯なる振舞として、輕蔑するが如き、昔氣質の殘存する、わが國の軍人精神から、これを見るならば、ドイツ軍の大膽不敵のこの陰謀と戰略を、果して如何なる感慨を以て眺めるであらうか！　だが、戰爭は、飽くまで勝つことを目的とし、また勝利への目的はいかなる手段をも正當化するものである。

（七）結語……政戰兩略一致の問題と新體制

ドイツ的戰略の、樞軸をなせるものは、結局一種の組織的陰謀作戰である。そしてまた、各兵科との緊密なる共同作戰と、所謂電擊的なそのスピードにある。

しかし、電光石火的に決心をつけ、その結果を直ちに行動に移すといふことは、言ふに易いが、行ふに當つて、しかく簡單に行くものではないが、政治も軍事も經濟もヒットラー總統が、全部一身に統帥しており、そのために敵より早く、凡る決心をつけることが出來る、といふナチズム——全體主

義――ドイツに於て、始めて可能に屬することであつた。

尙ドイツ軍の大勝に於ける今一つの重要なる點は、ドイツは戰爭が始つて以來、前線といはず銃後といはず、全國民が何人のために戰つてゐるかといふ戰爭の目的を、明白に認識して、喜んで勝利のために犧牲になつて行つたことである。

ヒットラーが、開戰劈頭（一九三九年九月）に於て叫んだ如く「勝利か、しからずんば、死か」といふ信念に燃えて戰爭してゐた點にある。即ち、それはドイツ國家の目的が、全國民に徹底してゐた何よりの證據である。

國內に於ける政治的混亂は、遠く萬里の長城の例を引くまでもなく、第一次大戰のドイツの敗北に之を見るが如く、戰線に於ける勝利にも拘らず、その背後に於て國家が瓦解したといふ實例が、國內思想戰線の統一の必要といふことを、何よりも雄辯に語つてゐる。

だが、武力戰に攻防の兩面のあるが如く、この思想戰も亦攻防の兩面がある。敵を攪亂すると共に敵の侵攻を擊破する。これ即ち防衛である。

しかし、特に思想戰に於ては、常に敵國の思想を凌駕し、擊破し得る積極能力を確保するに非らざれば、防衛を完ふすることが出來ないのである。

だから、新體制にとつて、何よりも先に必要なことは、國を擧げて一體の心となる大信念、百年不屈の熱情を以て、唯一路を邁進する精神的國家的大目標が示され、これを國民の心の中から湧き上る動かすべからざる一つの理念として植えつけることでなければならない。

故に、政治機構の再編成とは、かゝる國家の最高目標が、すべての國民に徹底する組織の確立であり、從つて、從來の宣傳組織の再檢討＝再編成でもある。

だから、現在最も重要なる主題となりつつある「新體制をいかにすべきか？」といふ問題を「宣傳組織をいかに確立すべきか」といふ問題に、置き代へるならば、この問題は、更に具體的な問題としてその解決を容易ならしめるであらう。

私は新體制の根本問題を宣傳組織の確立なり、と云つたが、それは政府を雄辯家や政治ボスを以て組織することを意味するのでは勿論ない。むしろ謀略・宣傳のエキスパートを以て組織しなければならぬ。計畫をより專問的にするためには、計畫を實行から分離すること、換言すれば、思想計畫と仕事との分離である。

ドイツの今次大戰に於ける威大なる成果と、國力の增進興隆とを、その隱れたる科學的計畫化の面より見ずして、表面に現はれた行動——議論より實行——といふ半面よりしか見ないのは、盾の兩面

あるを知らざる淺薄なる考へに過ぎない。ドイツのあの威大なる空軍は、ドイツの完備せる國立航空研究所の中から生まれ、その研究と實驗をドイツ青少年と軍隊の隅々にまで普及したことにある。即ち、理論と研究の組織的實踐化にある。

また、謀略戰術の勝利といふも、前大戰に於ける宣傳敗北に大いに悟るところあつて、廣汎なる部門に亘る宣傳の各分野を、科學的に計畫化したる宣傳省を、一九三三年早くも設立し、その組織的機關に有能なる專門家(エキスパート)を配屬し、孜々營々として研鑽を積める努力の結晶でもあるのだ。

今次大戰に於ける、ドイツ側の戰略上、謀略宣傳がいかに重要なる地位を占めてゐるか、從つて、戰爭が軍隊や兵器のみでなく、かゝる政治的謀略と宣傳を、いかに必要としつゝあるかが解るのであるが、將來の戰爭に於ては層一層、ラヂオと飛行機が戰爭體形の上に根本的な影響を與へ、私のいふところの謀略的恐慌(パニック)と攪亂による戰術は、更に巧妙となり、また激化されるであらう。

この點に關しても、フラー將軍は、實に興味ある見解を述べてゐる。

「ラヂオは國民を精神的に結合せしめるし、飛行機は、一般國民の民意、即ち、ラヂオ宣傳で極度に神經の昂ぶらせられてゐる意志に、直接的打擊を與へるからである。奇妙に思はれるかも知れないがラヂオは、國民の精神を陶醉せしめることによつて、國民を戰爭に突入させ得るが、これに反し、

飛行機は、陶酔を狂亂と化することによつて、國民を戰爭から追ひ出すことができる。新聞が社會攪亂者であつた一九一四年においては、未だ檢閲が可能であつたが、ラヂオは檢閲を以て制限することは出來ない。もし、全受信機の差押が出來なければ、國民は敵の宣傳爆擊に曝されるであらう。」

私は他の論文に於て「總力戰下の新聞の役割」を述べたが、檢閲の關門を潜り得ない新聞紙は公然と敵國に浸入し、又公然と宣傳の役割を果すことは、地域的或は言語的に制約される。ラヂオに依る謀略に依るか、空からの「紙の爆彈」を散布するか、又は他の祕密な方法を以て敵國に輸入する以外に道はない。

だが「紙の爆彈」又は「精神的毒瓦斯」といはれる空からの宣傳物の投下も、ドイツの如く國民全部が、極めて嚴重なる命令に服し、規律を維持し、或ひはそれを拾ふものを銃殺を以て臨み得るが如き戰時下にあつては、時間と空間と檢閲を乘り超えるラヂオによる宣傳——國內的にも、對敵宣傳にも——が最も賢明な策といふべきであらう。

今次大戰に、ドイツの持つ新聞通信の武器は、D・N・B通信社一個であつた。假に伊のステフアニ、ソ聯のタスの聲援を得ても、通信組織は到底イギリスに匹敵すべくもなかつた。

しかも、世界宣傳戰に於て壓倒的勝利を博したのは、大放送設備を完備して、通信機關の缺陷を補

ひ、又その頭腦的運用に依つてラヂオによる謀略・宣傳戰術を採用したがためである。

ドイツは一九三四年に六百十萬、一九三五年五月には六百七十萬の聽取者があつたが、國內宣傳强化による人心統一の目的を以て、對波戰爭前にラヂオの普及を更に强化したので、現在は八百萬を突破してゐると傳へられてゐる。

ドイツは一九三五年のオリンピック放送施設にこと寄せて、一基百萬マークもする無電塔(アンテナ)を一擧に十一本も建てた。だが、それはオリンピックのためではなく、勿論今次大戰への準備であつた。果せるかな、この十一本の强力なる放送塔と國內通信設備の擴充によつて、イギリスを凌ぐ世界放送を開始し、その宣傳の威力は今や地球上の空間を壓する觀を呈してゐる。即ち、我國が八ケ國語にて僅々八時間に滿たぬ海外放送をなしてゐるのに反し、ドイツは大戰勃發後直ちに、六ケ國語を用ゐて一日延時間四十五時間餘の外國放送をなした。(イギリスは四ケ國語、フランスは十一ケ國語、イタリーが十六ケ國語で各々約二十時間)しかもドイツの外國放送を聽取しつゝある外國人は最低五六%より八〇%の多きに及ぶといわれてゐる。

ドイツは間諜謀略戰(第五列部隊)とラヂオ宣傳戰を交互に巧に利用して、ある時はオーストラリアの空を征覇し、また、ある時はオランダ、ベルギー、フランスの人心を攪亂した。そして前者には

無血併合の形なき武力となし、後者にはコルネビエーヌの森に、二十年前の屈辱を雪がしめる重要なる壓力たらしめた。

謀略・宣傳政策の具現は、單に情報宣傳の機構のみの完成ではなく、ドイツ宣傳戰の勝利は、同時にラヂオ其の他の最も近代的な通信設備完遂の勝利であるとも言ひ得る。

かくの如くドイツが、戰時にラヂオ宣傳を海外は勿論、國内に對してもいかに重要視してゐるかを窺ひ知り得るであらう。

ラヂオの宣傳と、通信機關の宣傳省に於ける特殊な研究と組織化は、今次大戰に活用され、最高度に運用された。ドイツは特殊な性能を有するラヂオ裝置によつて空、陸、海三軍一體の神技に近い政戰兩略一致の統師振を發揮したのである。

政戰兩略の一致といふも、かゝる有機的機關——無電連絡による統一——の寸分の隙もなき結合と組織の運用に依つてのみ可能なのである。

いづれにせよ、我が國の謀略宣傳に關する研究は、殆んど未開拓であり、その組織は未熟幼稚である。私は總力戰戰士の一人として、宣傳戰線の一翼强化のために、飽くまで鬪ひ拔く覺悟である。

（昭和十五年九月記）

本論は、イギリス參謀のフラー將軍著「全體主義戰爭論」に對する私の研究論文である、と同時に、この全體主義戰爭論を、今次大戰に適用しドイツ的戰略を理解せんとしたものであり、又この戰爭論を一歩前進せしめんとしたものである。篤學の士がフラー將軍のその著書と、比較研究されるならば格別の興味もあり、論者もまたそれを希望するところである。

二、大戰に現れたドイツの宣傳戰

——第五列部隊と謀略戰術——

（一） 白蘭進擊と謀略戰術の勝利

世界の軍事評論家や、軍事消息通の豫想を、美事に裏切つた、五月十日以來の蘭、白のドイツ軍の進擊は、全く疾風迅雷的で、全世界は、目にもとまらぬ神速果敢な猛進に、ドギモを拔かれた有樣であるものはこれは超不可思議な新兵器の出現によるといひ、またあるものは七十餘トンの超重戰車とこれに裝備された火焰砲の威力にあるといひ、更にまた急降下爆擊機と落下傘部隊の神出鬼沒なる活躍によるといひ、ともかく、ドイツ軍の始めて使用した新兵器と新戰術は軍事專問家の間に、絕好な研究課題を與えてゐるが、今日までに判明せるドイツ軍の新戰術として、特に著るしい、そして軍事專問家の一致する點は、落下傘部隊をもふくむ航空隊と、戰車隊と、砲兵隊との三つの巧妙なる組合せに依る所謂電擊的策戰の壓倒的勝利であり、他の一つは極度に發達した宣傳戰——特に後方攪亂工作——を、この電擊的進擊の反面に、最高度に利用して成功を收めたといはれてゐる。

事實、落下傘部隊の効果は、必ずしも降下地帶の占領とか、その戰鬪力のみにあるのでなくして、敵軍または敵國民の背後に於ける、ドイツ軍隊の着陸といふ、一つの精神的衝擊に依る後方攪亂工作として、實に大なる收獲といはねばならぬ。だから、ドイツ軍は、十日午前二時、落下傘部隊がオランダ領に着陸せる頃を見計つて、オランダ放送局と同一波長を以て、同國に向け「ドイツのデサント部隊が我國各地に降下した。彼等は蘭軍と同樣の服裝をしてゐるから嚴重に警戒を要す」との苦心の謀略放送を行つた、これを聞いた蘭軍とオランダ國民とは非常な衝擊を受け、夜明とともに一段と警戒を强め、その結果は自國民の軍隊を見ても、獨軍の變裝した大部隊でないか、との恐怖心を起し、遂ひには各地で同士討さへ演じ、ドイツ軍の近付かない裡に避難民は、雪崩を打つて西に東に殺到し來り、軍用道路は、避難民のために杜絕する。經濟生活は破綻を來す等拾收すべからざる混亂狀態となつてしまつたのである。

敗戰の場合は勿論、敵國民の精神的間隙に乘じて打ち込まれる「精神的毒瓦斯」といはれる宣傳の巧妙なる應用は、砲火に依る戰果以上に多大なる効果を收めるもので、近代戰には經濟的封鎖の爭鬪と共に、必ず交戰國間に見えざる宣傳の亂鬪が行はれる。

ドイツは、かつて第一次大戰に於いて、この種の謀略宣傳、特に敵國攪亂の宣傳手段を、當初「軍

人の精神を穢すもの」として利用せず、あの大敗を喫したのであるが、わが國軍人の間にもいまだ一部分にこの種武士道氣質が殘されて居り、又宣傳の力を過少評價する嫌ひがあり、從つて國民に宣傳に對する理解と訓練が足らず、國民は「紙の爆彈」と「精神的毒瓦斯」に無防備にさらされてゐる有樣であるが、若しも宣傳がその威力を完全に發揮する時、武力を以て世界に誇る一等國ですら尙ほ悲慘な敗北の淵に沈まねばならぬことを思えば、われわれはこの宣傳戰術の研究に對していつまでも等閑に附して置くわけには行かない。

ドイツ軍は第一次大戰後「ドイツの敗戰は聯合軍の攻擊に對抗する事が出來なかつたからではなくドイツに散在してゐる外來移住者と過激思想の持主が聯合軍の魅惑的宣傳の餌にたやすく誘惑されて戰線の背後で國家が瓦解したためである」と喝破した參謀ルーデンドルフ將軍の敎訓を、最も忠實に守つて、今次大戰に落下傘部隊と第五列部隊に依る後方攪亂、電波と報道戰の巧妙なる活用、宣傳謀略の新戰術の考案等に依つて美事會稽の恥をそゝいだのである。

（二） 大戰に活躍せる宣傳組織

ドイツ側は、大戰開幕以後の戰時宣傳に於て、表面的に一見英佛に對して、非常に立遲れを見せて

るゐかの様であつたが、平時如何にも無用の長物の如く見える宣傳省を、一九三三年早く設立して着々準備し研究しつゝあつた。ドイツ側に期待せること大なりし筆者の如きは、蘭白進擊に際して行つた、ドイツ軍の宣傳戰の妙技に、始めて會心の微笑を洩らした一人であるが、かくの如き勝利の榮冠こそ、ドイツ側の宣傳方策が、英佛のそれとは全然行方を異にして、第三國殊に米國の通信社を利用する方策をとらず、宣傳省を頭惱とする國家直接の組織による、獨自の宣傳方策を樹立したからである。

それはアメリカの通信社を使ふ不利を、ドイツ側自身が知つてゐたといふ理由ばかりでなく、もつと根本的な理由は、喰ふか喰はれるかの猛烈な宣傳戰に於ける現狀は、もはや第三國を通ずる樣な、又英佛のそれの如く同國のジヤーナリストを動員して、應急處置を講ずるといふ宣傳方策では間に合はない情勢にまで立ち至つてゐる事を認識したからである。そしてドイツが明日の否、今日の蘭白に於けるが如き宣傳戰に勝んがために英佛に一歩先んじた身構えをしたためであるといひ得よう。

報導中隊の編成

それかあらぬかドイツはポーランド戰線を、一つの試驗期として、大戰開幕と同時に宣傳省直轄の下に、報道陣を軍隊內の組織の中に編入し、各兵科に、これを配屬せしめ報道機關の一元化、國外通

信網の整備等、戰時態勢への宣傳組織の徹底をはかり、その機構を根本的に變革し、戰時宣傳政策を着々準備しつゝ立ち上つたのであるが、これが現實に酬ひられたのはポーランド戰線及び蘭白進擊に於てであり、報道中隊の活躍によつて、始めてなされた「ポーランド戰線」と題する記錄映畫も、既にわが國に入荷したとのことであるから、ドイツ側の合理的な組織の下に頭惱を動員した仕事が、日本に於ても見られることであらうし、ドイツ側の組織が、ものをいふのもこれからであらう。

ドイツの戰時パンフレツト

イギリスは昨年の暮日本語の「大戰と英國」なる寫眞帳を出版して、今次大戰に對する英國の主張や海空陸軍の威力、大戰に對する見事な動員振り等の寫眞を中心に日本文の說明を附して、その威力を示さんとした。

ドイツ側でも近日「戰ふ獨逸」なる、日本文の寫眞帳を出版する計畫がある、といはれてゐるが、戰時宣傳物に於ける寫眞の重要性は、今更說くまでもないが、問題は如何に事態を明確に說明し求訴し得る寫眞が戰時宣傳といふ目的のために、また如何に適確に編輯され得るかにかゝつてゐる。

その最も優れた一例として、最近ドイツ宣傳省は「東方に於ける獨逸の勝利」と題する英獨佛三ケ國語の說明を附せる寫眞を中心としたパンフレツトを出したのである。これはポーランド戰線に活躍

せる報道中隊によつて撮影されたものであると聞くが、これは他の寫眞雜誌やグラフの寫眞などと違つた堂々たる戰爭寫眞で戰線の推移をオフイシャルに正面から狙つて美事に成功してゐる。

この寫直の成功は決して單なる偶然事でなく、最前線の狙擊兵のかたわらで報道中隊員が、そのクライマックスの情景をキャツチしてカメラに收め、砲兵航空兵その他の兵科にもそれぞれカメラマンを配置して撮影し得る組織によつて、始めてなし得るといふ機構の美事な勝利といふべきで、宣傳省と報道中隊との連絡は前線各所に建てられた報道班アパートによつて、宣傳省よりの指令により命令一下、直に傳達され前線の收獲は時を移さず宣傳省に蒐集される。

さうした合理的な機構と準備によつて、あつめられた豐富な資料を宣傳省では訓練された宣傳のエキスパート達が待ち構えてゐて、敵國向き、中立向き、或は國內向きといふ風に優れた頭惱を以て處理され、最も適確な寸分も狂はない立派な編輯がなし遂げられてゐるのである。

ドイツ側の採つた新らしい宣傳方策と、長年準備された宣傳省の威力の成功こそ、今後展開されるであらう次ざ〳〵の戰鬪に於て、又內外の宣傳戰に、命中率の適確な「紙の爆彈」「精神的毒瓦斯」となつて、隨時隨所に出沒させ、敵陣を恐怖と混亂に陷し入れつゝ多大の戰果を、獲得するであらう。

（三）第五部隊はかくして準備されつゝある

ドイツ軍の宣傳組織の、かゝる成功は、ヒットラーの火の如き祖國愛と政治的慧眼とが、プロパガンダ（宣傳）を從來の如く卑俗なるものとせず、神聖な王座に据へ、宣傳組織の充實と研究とを怠らなかつたためである。

ヒットラーはその著「わが闘爭」の中で「大戰に於ける宣傳こそ、最も明確に、目的に對する手段たることを示すもので、宣傳なるものは、武器以上でもなければ、それ以下でもない。……もし宣傳するものゝ性質を眞に會得した人の手にかゝつたならば、宣傳は實に恐るべき武器である」と宣傳の偉力について述べてゐる。また宣傳省大臣ゲッベルスは「我々ナチス黨員は官職に奉仕するものでなく、國民に奉仕するものである。常に耳を國民の脈搏に傾け、その廣汎な大衆と生々しい接觸を保つのが我々の任務である。國家は公けの諸設備を管理するが、我々は國民を正しく且指導する任務がある。今は最も窮迫した場合、いはゞ應急手段として使用して來た宣傳を、我々の國民生活の切實な機能にまで初めて高めたのはナチスである。本當のプロパカンダを行ふとするものは、國民を精細に知悉し、又國民精神に深く根ざゝねばならない。プロパカンダの技術は決して學び得られるものではな

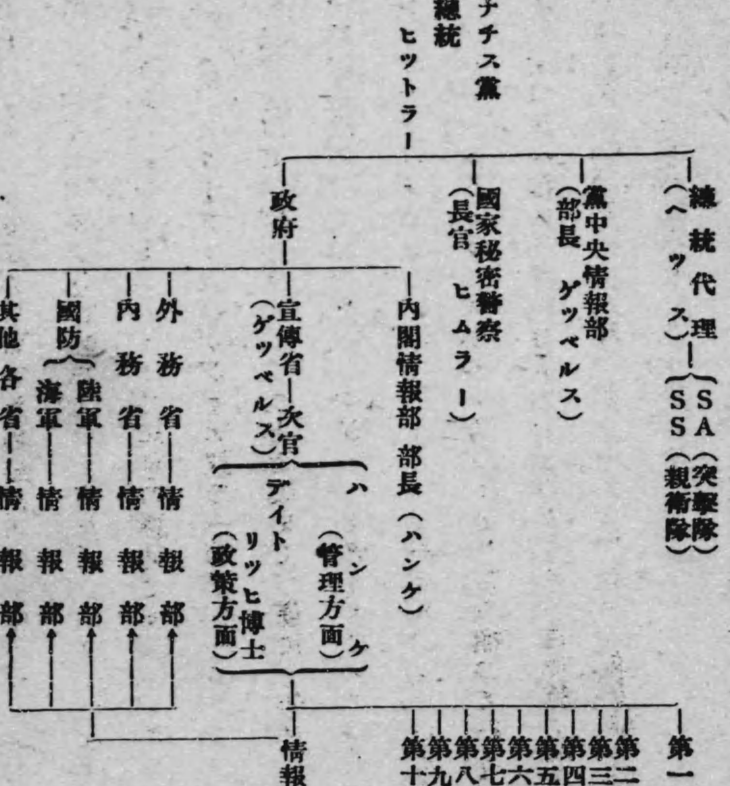
く、本能の問題である。故に決して一種の熟練や手仕事にはなり得ないプロパンガンデイストは人生のあらゆる領域に於て、出來るだけ廣汎な知識を所有しなければならない。プロパカンダに於ても常の場合の如くヒットラーが最大な模範を示して來た。故に將來も總統の旗手の衝擊部隊となり、宣傳に於ても知識の武器を提げ、ヒットラーの理想の勝利に導かうと考へる。」

以上は、ヒットラー及びゲツベルスの宣傳觀の一端であるが、ヒットラーは、一九三三年三月十三日の布告を以て、宣傳省を設立せしめ、今次大戰まで、僅に七年にして實効ある成果を擧げつゝあるが、その施設は、大臣ゲツベルス博士、次官にワルター・フンク、デイトリツヒを控え、大臣官房にハンケ、フオン・ヴエーデル、フオン・リーベン、デユル、ツエレル博士、シユレヒト、レツテルスキイ、フオン・ヴロツヘム等錚々たるエキスパートが打ち揃つてゐる。

そして、第一部はA財政B人事C法律の三部門に分れ、更に第二部宣傳、第三部ラヂオ、第四部新聞、第五部映畫、第六部劇場、第七部外國、第八部著作物、第九部造形藝術、第十部音樂と分れ、それ〴〵有能なる指導者に依つて統率されてゐる。

しかし、こゝでわれ〳〵は今回の白蘭侵入の落下傘部隊成功の裏に、第五部隊——ナチ政權に共鳴する海外居住者——の活躍が、重大な役割を演じたことに驚く前に、第五部隊即ち敵國にゐる味方と

スパイをドイツが平時に於て、いかによく訓練し統率してゐたかを研究してみる必要があらう。



ヒットラーは「在外ドイツ人は、ドイツの支配下にあるべきで又諜報の場合に見る如く、ドイツの

利益に奉仕する義務がある」と叫び、對外宣傳を極めて重要視して、ナチス黨の宣傳を、宣傳省の中樞機關の中に入れ、宣傳省と黨と渾然たる一體となつて活動せしめる樣な組織に編成した。

右の圖表に依つても解る通り、ドイツはかくの如く、共產黨インターナショナルに、優るとも劣らぬ組織を以て……內外一體の組織を通じて、ドイツ民族意識を中心としたるナチスの黨勢扶植の地下運動に狂奔してゐたわけで、第五列部隊も決してオランダに忽然と生れたものでない如く、又いづれの國に第五列部隊の隱然たる地下組織が、忽然と頭角を現はさぬとも斷言できないのである。

かくの如く、ドイツは海外宣傳に既に着々豫備工作を施しつゝあつたのであるが、前大戰の失敗にこりて、ヒットラーは國內宣傳による、擧國體制の完成のために、あらゆる努力を拂ひつゝあることは、今更いふまでもないことであるが、特に寫眞や圖解によつて、例へば飢餓に頻してやせた子供と健康にぽゝえむ子供とを寫眞に依つて對照せしめ「前大戰當時はこのやうに幼兒は飢えてやせてゐたが、今次大戰はかくの如く健康である」と說明し、或は色塗りの地圖によつて前大戰の中立國と敵國とを色分けし、今次大戰に中立國と味方とが、いかに多きかを示して、だからこんどは大丈夫であると國民に訴えるなど、その他數々の至れり盡せるの國內宣傳がなされてゐる。

わが國の宣傳が「ナニ〳〵すべからず」式の、多分に官僚臭の拔けぬ宣傳の多きに反し、ドイツの

宣傳は、國民を先づ敗戰の恐怖から救ふべく努め、そして遺憾の敵愾心と、又なによりも民族一致の團結心を強調し、一糸亂れぬ統制を守らしめつゝある現狀は、いかにしてもわれ〳〵の大いに學ぶべきところである。

世界宣傳戰に於いて著るしくおくれをとつたわが國に、最近宣傳省設立の噂ありと聞くが、ローマの一日にしてならざる如く、今次大戰におけるドイツの宣傳政策の成功を、われ〳〵も亦實踐に於て生かすべきであらう。

（昭和十五年五月記）

三、戰時下の廣告と宣傳

（一）戰時中廣告・宣傳は必要ないか？

戰爭中は商業廣告や宣傳は無用のものであらうか？　もしも自分は軍需產業に轉向したから、あるひは商品さへあれば、廣告や宣傳をせずとも、いくらでも賣れるから、廣告や宣傳は、戰爭中には必要のないものである、と、云はれる人があるとしたら、それはたいへんな間違ひであり、また、私益よりも公益を先んずる新體制を理解しない、所謂自由主義＝個人主義時代の人であり、さらにまた、商賣を通じ、產業に從事しながら、國家に奉仕し、戰爭を勝利にみちびこうといふ忠誠なる考へを抱かない人と申しても恐らく過言ではない。

勿論、どこの國でも、いざ戰爭となると、國內の產業をあげて軍需品に全機能を集中いたすは當然である。それに戰爭が第一次歐洲大戰や、こんどの支那事變のやうに三年も四年も續き、所謂長期戰になれば、國內消費に供せられる平和商品は、極度に切り詰めて、一日も早く勝つために、また東亞

の新秩序といふ大きな理想を實現するために、國内の生産力を總動員し、武器や彈藥その他戰爭に必要なあらゆる物資の生産に全努力を拂ふのは至極あたりまへのことであらう。

かくて、軍需品の生産に轉向した多數の工場は、本來の平和商品の營業を行ふことが出來なくなるし他の平和産業も原材料が缺乏してきたため、國内消費に供せられる商品の生産は著るしく減少してくるであらう。こうなると一般の需要を充すに足るだけの供給ができないので、勢ひ賣るための努力は全然必要がなくなつて、ただどうすれば商品を手に入れることが出來るかといふ點だけが問題となるのである。

こんな狀態が、はたしていつまで續くであらうか。と云ふ不安が、段々つのつてくると共に、商業廣告や宣傳は甚だしく減少してくる。

廣告や宣傳をするまでもなく、商品は不足してゐるから、どん〳〵賣れて行く。先きの事を考へるよりも目先きのことで一杯であり、努力せずとも賣れる商品の廣告や宣傳が無駄な支出のやうに思はれてくるであらう。

アメリカが第一次歐洲大戰に參加したのは一九三七年の春のことで、その翌年（一九三八年）の春は丁度日本の今日における狀態と殆んど變らず、品物さへあれば、どん〳〵賣れて行く、廣告・宣傳

の必要のない様に見える時であつた。

この時、アメリカの聯邦商事委員會の委員長ウヰリアム・ビー・コルバア氏は雜誌「エディター・アンド・パブリシヤー」に、實に何人も傾聽に値する一文の警告を發表した。

「一時的の戰時狀態のために廣告を中絶したり、或は廣告を極度に切り詰めたりすると、すべての營業にとつて最も大切な資產とも云ふべき暖簾を傷つけることになる。營業の資產には有形の物質的なものと、無形の精神的なものとの二つがあつて、廣告を續けて居ればこそ、この無形の精神的な資產が築かれて行くのである。即ち、暖簾と云ふ精神的な資產がこれである。而も暖簾は徐々に築き上げて行かれるものであるから、廣告を等閑にするやうなことがあると、忽ち、暖簾の價値は下つてくるし、廣告も中絶でもしようものなら、これまで投下した廣告費は元も子もなくなつて非常な危險を招くことにあるのである。筆者（コルバア氏）の考へをもつてすれば、暖簾は物質的資產以上に大切なものである。それに物質的資產と雖ども、或る程度までは暖簾に力に依つて不斷に援助せられないでは用をなさぬ場合がある。例へばプロクター・エンド・ギヤンブルの農場も火災に逢へば、完膚なきまでに破壞されて、全然その價値を失つてしまふが、併し、それと同じ破壞力をもつとしても、長年廣告で賣込んだ「アイボリー石鹸」といふ名稱を持つ商業上の信用を破壞することは出來ない。だか

ら、銀今、現在工場を軍需生産に供して、營業本來の平和商品の生産が出來ないからと云つて、廣告を中絶して營業を根本的に失ふやうなことがあつてはならない」云々……と。

要するに、コルバア氏の警告は「廣告をせずに賣れると思つてい〻氣になつてゐたり、軍需産業に轉向したから、昔の商品となんの關係もないように思つてゐたら、將來自分の立場を根本的に失つてしまふぞ！」といふ大變親切な、また極めて先見の明ある忠告であつたのである。

この警告は、氣迷つてゐた各業者——廣告主に意外の刺激を與へて、心氣一轉せしめるに充分な効果があつた。

現在軍需品生産のために、本來の平和商品の生産を中絶してゐる工場と雖も、平和が克服すれば、忽ち平和産業に立ち戻らなければならないものが大部分であつたアメリカにおいては、特に現在だけのことを考へて決して廣告を中絶してはならないものが多かつたに違ひない。

勿論、以上はアメリカの例を取つたのであつて、今日の日本にあつては、自由主義の國アメリカのそれとは大いに事情が違ふ。われわれは「自由・平等・博愛」のために鬪ふのでもなければ、自由主義者が抱く桃源の夢ともいふべき、昔日の平和が、再び來ようとは、それこそ夢にも思つてはゐない。

だから、蔣政權の壞滅により、たとへ日支事變の戰鬪行爲が一段落するやうなことがあつても、なほ統制は續くでせうし、また、東亞共榮圈の確立まで、あらゆる場合に備へて、準備し國外に伸びる力を養成しなければならないであらう。

とはいふものゝ、本來の生產や營業に、永久に復歸できないものとも、また、軍需產業を永遠に續けなければならないものとも、決して斷言できないであらう。

さうすれば、コルバア氏の警告は、わが產業家に、あるひは營業家にとつても、あながち無駄な忠告ともいひ得ない譯ではありますまいか！　むしろ味ふべき數々の教訓を含んでゐないであらうか！

しかし乍ら、われわれは決して「統制」がゆるみ、自由主義の昔の如き自由經濟制度が再び現れ出づるなどとは斷じて考へてはならないと思ふ。

（二）　アメリカ廣告義勇軍の活躍

このコルバア氏の警告があつてから、間もなくアメリカにおいては「廣告義勇軍」ともいふべき一隊の產業家とその廣告技術家達のめざましい活躍が行はれた。

ニューヨークの各辻々の一角に

「これで諸君には今回の歐洲大戰にアメリカが出兵した意義は了解せられた筈だ。自由と正義を生命とするアメリカ國民として、世界併合の大野望を抱くカイゼルの計畫に、今ここで大鐵槌を加へることこそデモクラシーへの忠誠である。健康な青年は銃をとつて正義人道のために戰へ、然らざるものは、擧つて自由公債に應募すべし。これが必勝のスローガンだ。アメリカ國民はすべてを擲つて、家が潰れるまで買へ！」

と、石油箱を持ち出してその上に乘つて、聲高々と怒鳴つてゐる青年があるかと思へば、また、他の辻には、

「祖國を戰禍から救ひ、世界人道のために參戰した名譽ある戰場の勇士のことを思へば、妾どもはどんなことをしても國の護りを固めなければならないと存じます。今すぐ自由公債をお求め下さる方には妾の心からなるキッスをお贈り致します」

と、黃色い聲を張り上げて聽衆に肉薄して行く美しい女性達の勇敢な街頭進出があつた。

ところで、この青年は一體何者であり、この婦人は愛國婦人會の會員であつたであらうか。この青年も若い女性も決しておせつかいな好事家でもなければ、職業的な憂國の士でもない。

アイボリー石鹼會社や、ゼネラル絹布輸入會社の外交員や女店員や廣告係として働いてゐる人達で

それらの會社が國家奉仕のために街頭に送つた會社員であつたのである。

彌次馬氣分で取卷いてゐた群集も、いつの間にか、この青年や婦人の愛國的な情熱に打たれ、一齊に緊張の光りを眼にかゞやかし、直ちに自由公債購入を申込むものさへ澤山出來て來たほどだつた。

これは戰時アメリカの街頭に於ける「廣告義勇隊」活躍の狀況であるが、その頃「新聞」紙上にも次のやうな意味の文句が書かれた廣告文が、各ページの上に連日現られはれる樣になつた。

「君は今の中に米國政府に對して投資するか」

「それとも、後になつてドイツに金を持つて行かれる方がいゝか」

「實利的な立場に立つて、事實を正しく觀察しなければならない。我々は茲で有利な利廻りで米國政府に投資してこの戰爭を勝利に導くか、それとも戰爭に負けて後になつてドイツのために戰爭費用として莫大な金をとられた方がよいか。今我々はこの二つの中の何れかの一方の道を選ばねばならない。而も後になつてドイツが徵收しようとする賠償金はこんな生やさしいことでは濟まないのだ」

諸君は今日直ぐ自由公債に投資すべきだ！

といふ文面もあり、また、

「今や我々はこの大戰に着々勝利を收めつゝあるのだ」と云ふ、大きな見出しを出して、その下の文句に次の樣に書かれてゐる。

我々が日常生活に於てどんなことでも努力すれば、それだけの甲斐があるのと同樣に、勝利を得るためには、それ相當の犧牲と我慢と、惜しみなき努力を拂つてかゝることが必要である。我々は自由と正義と文明を擁護せんとするには、必要に應じて何時でもあらゆる武器を使用しなければならない。而もそのためには多額の資金を必要とするのである。世界歷史に徵して、これ程正しい壯擧はまたとないのだ。諸君は須く自由公債に投資すべきだ

そして、これらの廣告文の下には、四角の輪廓をつけて、その中に會社名と共に、次の文句が書いてあつた。

「この廣告は自由公債委員會に協力してアイボリー石鹼會社が掲載したものである」と。……

皆さん。このアメリカにおける廣告による國家奉仕、總力戰への協力は、一體なにを意味するであらうか。

この樣に、商店や産業人が擧國一致の精神をもつて戰爭目的を達成せんとする、燃ゆるが如き愛國心が天に通じない譯はない。アメリカ廣告關係者を以て組織されたる廣告義勇軍は公債の賣出しに於

て、豫定百四十億を突破し、百八十八億一千二十三萬三千四百五十弗を賣り盡し、四回の發行を通じて、この義勇軍のみで、實に五十八億九千七百二十六萬六千百弗を賣るといふ驚異的成果を擧げたのである。

第一次大戰におけるアメリカ廣告界は、この自由公債の賣り出しの他に、

一、造船所の職工の募集
一、公債の賣り戻し防止
一、戰時切手の賣行增進
一、赤十字資金の募集
一、募兵運動への協力
一、愛國スローガンの普及

等に、街頭に、新聞廣告に、廣告スペースの無償提供、圖案文案の作製等あらゆる技術と資金とを提供して、國家の必要とする戰時宣傳に協力したのであつた。

やがて、平和の鐘が鳴り、これらの生産者が軍需産業から、本來の商品生産に復歸した時、いつたいそれらの市場はどうなつてゐたであらうか。アイボリ石鹸その他多くの商品は、軍需産業に轉向で

贅澤を……我々は何故止めなければならぬか

贅澤は敵だ！

(一)、日本は今、人手も物も不足してゐますから、これまで贅澤品を作つてゐた材料、手間、動力等を戰時下に必要な物資の製造に振向けたいのです。我々は贅澤品を買はないばかりでなく、之を使はないやうにしなければなりません。今のまゝでは戰時下に必要な物資が減るばかりです

(二)、すべての贅澤品に眼をつむり絶緣する時が來ました。我々は贅澤をやめ貯蓄(百二十億)をし、公債を求めて國力を增進しなければなりません。

(三)、戰時下にゐる我々は、最小限度の生活に甘んじなければなりません。戰時下には戰時下の生活がある筈です。

きなかつた小さな生産者に、すでにその市場は奪はれてゐて手の下しようもないほどであつたが、人々は戰時におけるアイボリ石鹼會社やその他の生産者の熱烈なる愛國的行爲に「どうせ買ふなら、國家に盡した功勞あるアイボリー石鹼を買つてやれ。ゼネラル絹會社の絹布を買つてやれ!!」と、同情支援の聲がキユウ然とあつまり、忽ちに、昔の人氣と市場とを回復したといふ有名なるエピソートもあるほどである。

よき廣告・宣傳の效果については、必ずしも、アメリカや戰爭中の愛國宣傳の例をとるまでもなく先きに紹介したコルパア氏の無形なる資産であり、火事に燒かれない暖簾といふべきものの、いかに貴く、また大切であるかといふことは、關東大震火災や近くは靜岡の大火の時に、ハツキリとこれが解つたのである。

即ち、大火の灰燼の中から不死鳥の如くよみがへつた商店は

日本の辭書から
贅澤……の二字を
抹殺せよ！

聖戰目的完遂の爲め
本廣告を國民精神
總動員本部に献納す

明治製菓株式會社

平常信用と廣告とを以つて築き上げた有名商店、あるひは宣傳によつて人々の記憶の中に生き殘つた生産者であり商店であつた。といふ事實こそ、何よりも雄辯に廣告と宣傳の大切なることを物語るものであらう。

（三） 戰時下の廣告は如何にすべきか？

支那事變發生の頃は勿論、今日もなほ戰爭を主題にした廣告——非常時局に關聯させた廣告でありながら、却つて國民的義憤をすら覺えせしめる惡質愚劣なる廣告や宣傳が跡を絕つた譯ではない。また、惡質とまで行かないとしても、かなり愼重さを缺いたものや、無理に時局に關聯させた低調のものも決して尠くないのである。

元來、わが國の廣告は、平時に於ても正面切つて堂々と消費者の利益のために訴へる廣告が少くて廣告者（販賣者）自身の

利益を中心として、哀願的に訴へたものが多いのは、却つてこれが逆効果をまねくといふことを考えないからである。

なんとかして、自分の利益のために金を使はせようと努力する跡を歴然と現はしており、消費者がこれに反撥し、警戒しようとするのはむしろ當然のことである。

況んや、忠勇なるわが皇軍の精鋭が、武器をとりて第一戰に身命を賭して戰ひつゝある時——即ち國民の何人も戰爭に依つて利益を得るべからざる非常時に、我利があからさまに顏を出したり、交換條件が付けられてゐたりする廣告に、誰が同情や好意を寄せるであらう。純粹な動機から、公益に奉仕しようとする眞の愛國的廣告者の行爲に對してこそ、國民の同情や支援は期せずして集められるであらう。

勿論、意識的に不純な動機から、時局を惡用せんとするような廣告は、近來殆んど稀にしかないが多く問題になるものは時局との結び付けが拙劣であつたり、考案上の不備のために、社會的な反感を招く結果に陷るのが大部分であらう。

けれども、なんと云つても、大廣告主が自家商品のために費す廣告面は非常に尨大なるにも拘らずこれを國策宣傳のために提供するを惜しんでゐるのは甚だ殘念なことである。もしも今かりにその半

これを國策宣傳のために提供するを惜しんでゐるのは甚だ殘念なことである。もしも今かりにその半分いな五分の一を國策宣傳のために提供してくれたとしたら、どんなに素晴らしく、また國家宣傳の巨彈を發することが出來るか知れない。

とにかく、自家の商品と無關係な宣傳はしない、といふ樣なケチな考へを棄てゝ國策宣傳に協力する態度を執るべきではなからうか！　中小の資力の乏しい企業家ならばともかく大廣告主は愛國心の上にそのもてる實力を遺憾なく發揮すべきであらう。

今日の如く切迫せる戰時下にあつては、商品に關する說明はもはや殆んど無用であらう。唯だ單に品名だけを示して國策宣傳に大々的に協力をするだけで、自家商品の廣告と國家が必要とする宣傳の目的を相共に果すことが出來るのである。

廣告・宣傳に於ても、公益は私益に先んじて尊重されねばならない。即ち、廣告・宣傳も新體制で行きたいものである。

（昭和十五年八月記）

▲カット廣告は、名古屋新聞に掲載された明治製菓株式會社の廣告スペース献納に提供されたものである。

四、ドイツの廣告統制法

（一） 新體制下の廣告はどうなるか？

世界的大動亂と國內體制の嵐のなかに商品宣傳と廣告はどうなるか？ 商品宣傳と廣告は統制によつて一體いづこに行くであらうか？ この疑問は廣告と宣傳に關心を有する人々の抱く、最も知りたいところの興味ある、かつ眞劍な問題ではなからうか！

すでに、わが國でも演藝・映畫等娛樂に關する廣告——チラシの禁止、ポスターの枚數制限——を始め一部統制が發動されてゐる。

だから、廣告と宣傳は新體制下にどうなるであらうか？ との疑念は一層深められつゝあるが、將來に於ける廣告・宣傳が、どうなるか、を知る參考として、ここに簡單ながらドイツに於ける「廣告の統制法」を研究してみることにしよう。そして、この研究から將來に於けるわが國の「廣告統制」を豫想すると共に、さらに「廣告・宣傳」に對する積極的な方案をあみだすべく努力しようではないか。

（二）ドイツの廣告統制とは？

ドイツではヒットラー政權が成立してから、間もない一九三三年九月十二日に、不良廣告の防止と新聞廣告の合理化のために「廣告法」を發令した。

そして、これを宣傳省大臣ゲッベルスの監督下に置き、經濟宣傳に從事してゐるエキスパートによつて組織された宣傳顧問會あるひは商業廣告調査會に、この宣傳・廣告を監督せしめるようにした。

新體制の理念を理解しない人は、統制といへば隨分窮屈なものであると、考へられ易いけれども、ドイツの廣告統制も決して商業宣傳を妨害するものではなく、むしろ健全なる廣告・宣傳を擁護し發展せしめる建設的なものである。健全なる商業宣傳が不當に妨害されるものではない事を理解する必要がある。

ドイツの「廣告統制」法案の趣旨の大意は、次のように要約することができる。

一、明朗眞實にして不正ならざること。

二、その記述は立證し得るものなること。

三、誇張を避けること。

四、表現特徴共にドイツ的なること。

五、ドイツ人の道德觀、宗教心、愛國心、政治意識を害せざること。

六、高尙にして効果的なること。

七、競爭品を誹謗せざること。

八、競爭者の商品又は設備等と比較することを避けること。

以上が廣告取締に關する大方針の要旨であるが、その結果として、ドイツの統制經濟組織に反するが如き消費を奬勵する文案、外國語を多數用ひたる廣告文、何人がみても好ましからざる語法、商品名、挿繪等を用ひたる廣告等は、ドイツ國內に於ては許されなくなつた。

しかし、これが具體的取締方法については宣傳顧問會が大體次のような點を決定して發表いたしてゐる。

一、新聞雜誌等の發行者は、廣告を揭載する印刷部數、販賣部數、固定頒布部數を公表すること。

一、新聞雜誌の發行者は、廣告料金を任意に定める權利を有するが、制定した以上は一定の期間を經過し、許可を得たる上に非ずんば、之を變更放棄するを得ざること。

一、廣告料金制定の際には割引率をも制定すること。發行部數大なるものは割引率は三分より二割

に及び、部數の少なるものは一割乃至三割とし、案内廣告に關しても掲載回數による割引率を制定すること。

一、紙面の構成（字詰）及び計算單位も標準化され、廣告行數はミリメートルを以て計算單位となし廣告欄の幅を大小二種に區分し、大廣告は幅六十四ミリ・メートル、小廣告欄は幅二十二ミリ・メートルを基準とすること。（この廣告幅に關する規定はその後間もなく廢棄せられた）

一、廣告主又は從來の廣告代理業は、直接に廣告面を契約することを得ず、特に公認せられたる廣告代理業者の手を經て契約することゝ決定せられて居る。この公認廣告代理業者は、現在百餘名あり。大部分の取引は國内主要都市に支店を有する一業者「アラ」の手に收められてゐる。代理業者は廣告料金の一分乃至二分の手數料を發行者より手數料として取り、この手數料は直接たると間接たるとに論なく一切廣告主に割戻すを得ざること。

一、廣告顧問も公認せられ、廣告原稿はこの顧問又は廣告主の廣告部が作製する。顧問の中には若干の廣告代理業者も含まれて居るが、大部分は獨立に營業する文案家を指すもので、その報酬は大なるものは廣告料金の一割に及ぶものがあり、文案料、衣匠料の最低額は規定せられてゐる。

一、廣告をなす場合には、豫め許可を要し許可のないものは、これをなすことが出來ない。廣告關

係者はドイツ廣告專門家協會に加入を要するが、この加入は相當の資格がないと許可されない。

一、あらゆる廣告には百分の二の廣告稅が課せられ發行者が之を納入する。

一、廣告中に實驗者の證明を用ふる場合には、必らず本人の同意を要し、その氏名年月日を廣告中に明記する必要あり、且つその證明の本人に報酬を出すことは絕對に禁止されてゐる。

(三) 廣告統制に協力せよ！

ドイツ新聞廣告取締法規が、この概略な要旨の紹介によつても、決して廣告主を無法に壓迫し統制するものでなくして、むしろ以前よりも遙に多くその利益は擁護され、合理化され、明朗化されてゐることがわかるであらう。

即ち、新聞雜誌の販賣部數を明示して廣告料金を合理化し、廣告面仲介業者の手數料の割合を整理する等廣告主は從來よりどんなに多くの利益をうけ、又朗らかな氣持になるか知れない。又讀者もこの廣告淨化と合理化に依つて、廣告の一言一句を信賴することが出來るようになり、ドイツ廣告界はこの法規の實施によつて、その混亂と不合理から救はれたのである。

だから始めに申上げたように、廣告統制は廣告を禁じ抑制するのが目的でなくてその正當なる利用

法を助長するもので廣告界はこれによつてどんなに質的に向上されるかハツキリわかるではないか。

ゆゑに、廣告統制に決して恐るべきではなく、また避くべきでもない。むしろこの際大いに完璧な廣告統制法の實現のために、即ち廣告の新體制をつくりあげるために、お互に大いに努力し、また勉強し、さらに協力しなくてはならぬ。

（昭和十五年八月記）

五、宣傳寫眞の軍事的役割

（一） 日本の宣傳戰術は現狀でよいか

フランスの軍事宣傳研究の權威ポンコンビイ氏は「戰時に於ける虛僞」なる著書に於て、次の樣に述べてゐる。

「巴里、フランソワー街三番地の地下室のある五階の家がラ・メーゾンドラ・プレツセと呼ばれるフランスの宣傳本部となつたが、地下室には各種の印刷機が据へられ、地階には大きな會議室があるそこにはいかめしい人々が右往左往する、トラツクが着く。立派な自動車が停る。その二百の部屋は何れも塹壕から遠ざかる程勇氣の出る戰爭狂の英雄達の事務室、應接室などの爲に供せられてゐるのである。

その地下室の硝子屋根の五階迄の全部がとりも直さずプロパガンダの一體といふ譯であるが、一番上の硝子屋根の部屋は寫眞繪畫室で、そこには木製の斬られた人の胴體や腕や脚がころがつて居り、

眼をくり抜かれた人形などが立つてゐる。部屋の片隅にはグランド・オペラの背景畫家が、爆破されたフランスやベルギーの寺院、發かれた墓、荒廢した村落などの似寫眞の原畫を描いてゐる。この等の寫眞や繪畫は謂ふまでもなく、何れもプロパガンダの目的を達せずばやまない爲に、全地球上の民衆に對してドイツ軍の慘虐に關する、つきとめ得ない證據として送り出されるものである。……この建物こそは實に最も力强い虚僞の戰場で、前線後方から來たと稱せられ、創作せられたるニュースの絶えざる源泉であつたのである」

わが國の聰明なる軍部が第一次大戰に於けるフランスやイギリスその他の國が進歩せる近代寫眞術を既に利用せるかくの如き宣傳戰を知らない譯は勿論ないが、わが國の對外及び對敵宣傳の現狀を見れば、この種宣傳に全然素人なる一般大衆ですらなほ且つ宣傳の不足と劣勢とをかこたざるを得ないものがある。

しかし、宣傳一般の問題については別に又言ふべき機會を持つであらうから、今は特に宣傳寫眞並に報道寫眞の軍事的役割—對敵宣傳工作としての寫眞の効用に就ての問題、寫眞政策の軍事的分野に於ける重要なる一部門として茲に研究すると同時に緊急缺くべからざる實踐的な問題として俎上にのぼせたく思ふのである。

（二）大戰の教訓から學ぶ對敵宣傳工作の必要

昨年九月三日第二次歐洲大戰の開戰の當夜、英國の爆擊機は早くもドイツ上空に現はれてドイツ語を以て書かれたる反戰ビラ數百萬枚を撒布した。九月中に於けるイギリスが撒いた宣傳印刷物は二千萬に達し、その航空行程は數千哩に達してゐる。ドイツ側はイギリスに對してこの種の行動に出でなかつた樣であるが、ポーランド戰線ではワルソー攻略戰に際して市民の防衛參加を阻止するため同市上空より多數のビラを撒いた。なほポーランド進駐後のソ聯が占據地域の赤化工作に各種多數の印刷機を持ち込み大掛な文書宣傳を行つてゐるといはるゝも想像にあまりあるところである。

わが國に於ても、今事變當初よりこの空からの「紙の爆彈」—「精神的每瓦斯」を巧妙に屢々使用し、多大なる効果を收めたることは既に周知の事實である。

獨帝カイゼルはかの大戰に於て一敗地にまみれた時「余は新聞に破れたり」と嘆息せりとは有名な一挿話であるがドイツ參謀の組織的天才ルーデンドルフ將軍は「ドイツの敗戰は聯合軍の攻擊に對抗する事が出來なかつたからではない。ドイツに散在してゐる外來移住者と過激思想の持主が、聯合國の魅惑的宣傳の餌にたやすく誘惑されて戰線の背後で國家が瓦解したゝめである」と憤慨し、暗にカ

イゼルの長嘆息の必ずしも虚傳ならざることを裏書してゐる。

これら一連の事實は、對敵宣傳工作の勝利を雄辯に物語る證左にほかならない。

（三）對敵宣傳工作の目的近代戰の特長三ツの前衛

過去の世界大戰並に今次の日支事變又は第二歐洲大戰の經過に徵しても明らかなる如く、近代戰は必ず三ツの前衛に立つて戰はねばならない。即ち武力戰、經濟戰、宣傳戰である。

戰爭の過程には經濟的封鎖の爭鬪があり、宣傳の亂鬪があり、そして武力は最後の一擊を加へることである。經濟的壓迫は資糧の流入を防ぎ、資本や勞働力の入路を妨害し武力的壓迫は陸海空軍を以て敵の戰鬪力を破り、宣傳は暗示と事實の求訴を使用して敵を攪亂する。

米國軍事情報局は、戰時宣傳の職能について「宣傳は敵の全軍隊をその根底に於て攻擊するにある即ち軍隊をその基礎から切り離して援兵、彈藥、軍需品、食料、慰安物等の輸送を妨げる。つまり敵國の內部奥深く攪亂して家庭から遠くはなれて戰爭の苦痛に從事してゐる兵士達への愛國的援助—（今の言葉で云へば銃後の支援）—を弱めるのである」と述べてゐる。

宣傳は實に敵國民の意志を破壞し、敵國內を攪亂しその窮狀を曝露して、士氣を沮喪し、敵國に對

して不利な國際的態度と雰圍氣とを醸成せしむる。また宣傳は自國の無限の援助あること——例へば米國の大戰參加をイギリスが盛に放送するが如き——を告げて士氣を鼓舞し、國民を安住せしめ、產業を振興し、物資を節約し、精神の緊張を奬勵する等あらゆる戰時の經濟的援助を刺戟する。かくて宣傳がその威力を完全に發揮する時には、武力を以つて世界に誇る一等國ですら尙敗北の淵に沈まねばならぬのである。

（四） 對敵宣傳工作の分類とトリツク宣眞の逸話

對敵宣傳工作はその目的に依つた分類されねばならぬ。

第一に——敵國に對して憎惡の觀念は如何にして惹き起されるか

第二に——自國と友邦または同盟國との親善は如何にして維持されるか

第三に——中立國の好感は如何にして惹き起され、そして味方に入れるには如何なる方法を據るべきや

第四に——敵國は如何なる操縱によつて攪亂されるや

第五に——自國の理想を傳へて如何にして宣撫するか

等であつて、かつての大戰の際英國の軍事情報部がはからずも手に入れた二枚の寫眞—即ちその一枚は戰線の背後でドイツ兵の死骸が埋葬されるために引き出されて行くところであつて、他の一枚は石鹼工場へ通じてゐる路上に死んだ馬のゐる寫眞である。

イギリス軍情報部はこの二枚の寫眞をモンタージュしてこれに「石鹼工場へいたる路上のドイツ兵の死體」と題する記事を加へて大戰の事情に通ぜぬ上海に送り、更に歐米に逆送せしめ、ドイツ軍が兵體の死體でもつて油か石鹼でも作つてゐるかの如き印象を與へ、感傷的なアメリカ人を煽動し遂には大戰參加に成功したることは宣傳史上の有名なる逸話であり、今次大戰に於ても非武裝大汽船のドイツ潜航艇による擊沈を宣傳する等の手は盛に使はれてゐるが、これ寫眞を中立國を味方に引き入れんがために積極的に利用したもので、これは明白な虚僞であり、トリツク寫眞であつて同戰爭中に完全にその眞僞を糾明することは出來なかつたとはいへ、萬事が完了しないうちに曝露する恐れある樣な矛盾せる材料を使用することは賢明なる方法とは云はれない。

ともあれ、對敵宣傳に於て繪畫、漫畫、寫眞が最も有効な役割を果し、絶大なる成果を擧げつゝあることは最早や議論の餘地なきところにして、今事變に於ても既に幾多の軍事上の貴重なる體驗と研究とが積み重ねまれつゝあることは想像に難からぬところである。

（五） 對敵宣傳に於ける報道寫眞家の地位

軍事上對敵宣傳の必要については、これ以上の贅言はむしろ無用であらうが、〃報道寫眞〃のリアリティとドキュメンタリーな機能を十分活用させ躍動させたところの、しかして更にシャープな對敵宣傳と軍事的戰略とを加味したる目的意識をもつて撮影され、編輯されたところの「報導寫眞」が對敵宣宣工作の上に繪畫や漫畫や數千語の記事よりも遙かに迫力ある眞實性を以て、敵國の軍隊や民衆に驚くべき訴求力を示すであらうことは、報道寫眞の威力を認識される本書の讀者諸賢の容易に想像し得るところであらう。

宣傳は議論ではなく理解と同情と信頼とをかち得なければならぬ。從つて、如何なる報道——宣傳にも必らず感情的上衣——報道寫眞に於けるが如き感情的訴求力——を纏はされねばならぬ。

だから新聞記者をして宣傳の任に當らしめる時、必ずしも社說記者たる必要はなく、報道記者の生命とする處は日々の出來事或は戰鬪の經過を最も面白く又効果的に社會に或は敵國に報道するにある

報道記者（カメラマン）は事件の眞相を如何にして知らしめ且つこれを讀みまた見るであらうところの自國又は敵國の民衆に與へる力をよくわきまへてゐる。故に宣傳の適任者とするならば單なる報

ろの自國又は敵國の民衆に與へる力をよくわきまへてゐる。故に宣傳の適任者とするならば單なる報道記者或は報道寫眞家の方が寧ろ遙かに適任であるといふことが出來る。

（六）對敵攪亂戰術としての報道寫眞の利用

報道寫眞の對敵宣傳工作に於ける優位や、効能書についてはこの邊で打ち切り、對敵宣傳工作として〝報道寫眞〟をいかなる方法を以て、如何なる方向に活用すべきかについて、具體的な説明を試みよう

但しこれは前記五節に於て説明し分類したところの、對敵宣傳の第四に屬する、敵國は如何なる操縱によつて攪亂されるか……と云ふ問題を主とした、對敵攪亂に關する二、三の實例に過ぎず、實戰に參加してこの種のレイアウトをなさんとせば、實に枚擧のいとまなき好個の材料があるに違ひない。

對敵攪亂と宣傳寫眞のレイアウト

（その一）

トーチカを攻撃して占領した際、機關銃座と共に鎖につながれてゐて、逃げない敵兵のあつたことは新聞にも報道された事實で、われ〳〵はこれを撮影する。そしてこの寫眞に次の樣な説明をつけて敵國の民衆にバラまく。

お前達の父や夫や兄弟は、この樣にトーチカの中で鎖につながれながら、勝利の希望のない蔣政權——愛すべき祖國を滅亡の淵に落し入れる蔣介石政權を守つてゐる。

（その二）

支那側の戰線に娘子軍や賣笑婦が盛に活躍してゐる事實—捕虜の娘子軍—を撮影して、背負ひ切れぬ程の重荷を負ひながら留守を守る軍人の妻子に見せつけ、敵國の銃後を守る妻子達に動搖を與え且つ娘子軍との離間をはかる。

そして寫眞說明に曰く。

支那軍の戰線には慰安娘子軍と稱する賣笑婦の一隊が盛に出現して、兵隊達はその魔手にとらはれてゐる

（その三）

日軍百萬抗洲灣上陸、或は北海上陸のアドバルンが上海や廣東にいち早く揭揚され、支那民衆に皇軍の武力を示し功果ある一大デモの役目を果したことは結構なことで、また適當な宣傳戰術であつた

が荒れ狂ふ怒濤を冒して、敵前に上陸せんとする鬼神の如き、わが軍の進撃の現狀を撮影せる一枚の報道寫眞に

「日軍百萬北海上陸の圖」

と簡單な說明をつけて、彼ら支那民衆の知る北海沿岸の風物が背景をなしてゐる生々しい寫眞をバラまいたら、支那民衆に與へる混亂と脅威による動搖は更に効果的なるものがある。

（七） 攻擊的武器たり得る「寫眞」の使命

敵國に送り込む寫眞をつくれ！

以上は對敵宣傳——敵國攪亂に報道寫眞利用のためのレイアウトとキヤプションであり、それを暗示する極めて拙劣なる二、三の實例に過ぎない。ドイツ軍參謀はこの種のビラに依る謀略宣傳、特に敵國攪亂の宣傳手段を當初「軍人の精神を穢すもの」として採用せず有効に使用することを知らずあの慘敗を喫したのである。

わが軍人間にもいまだ一部分にこの種武士的氣質が殘されてゐるかも知れないが、宣傳の方法は必ずしも正當を正當とし否を否として放棄するのでなくして事件をあらゆる角度より考案して、これを

巧妙に操縱して役立てねばならぬ。即ち目的は手段を正當化するのである。

宣傳物の配布方法については別に軍事專問的なる廣汎權威ある研究を必要とするが、こゝにはフランスのストリート少佐の所感を記すに止める「宣傳物を撒布することは鐵片を撒布するのと同樣である、然しその目的が異つてゐる。彈丸は最大の結果を得るためには群集の眞中に投下して爆發せしめなければならぬが、宣傳ビラは出來るだけ範圍を廣く撒布しなければならぬ。宣傳の性質を知りぬいてゐる人に對しては別として、故鄕を離れ、祖國から遠く離れて淋しく戰線の或は銃後の苦役をつとめてゐる者の群に達せしめ、彼等の考へを變化させるより外に目的はない。宣傳によくなれてゐる人は、ビラの內容を冗談に取り扱ふけれど淋しい人達は退屈まぎれに念を入れて讀んで、宣傳文を何か意味ありげに考へて思はず信ずる、こうなると宣傳はその半ば以上成功してゐる」と配布される宣傳物の目的と効果とについて、うがつた觀察をくだしてゐるが宣傳の生命とするところは、最もデリケートな群集——敵國や諸外國又は自國の——心理の日々の推移にあり、群集の輿論を推察し輿論を釀成しこれを左右するには宣傳に關する權威ある人物の援助を必要とし且つその組織機關による統制を必要とする、故に寫眞政策の確立は勿論、あらゆる宣傳を含めての政策を支配する組織機關—宣傳省の如きがわが國に於てもつくられねばならぬ。

（八）廣汎なる組織的寫眞政策確立のために
「報道寫眞新聞」に據る實踐の急務

〃報道寫眞〃が軍事的分野に於てどれほど威大なる功績をもたらすかは對敵宣傳工作としての寫眞政策の確立如何にかゝつてゐると稱してもいゝであらう。廣汎な寫眞政策が組織的に確立されんがためにも、日刊〃報道寫眞新聞〃の發刊が必要であり、否むしろ「報道寫眞新聞」の實踐を通じてこそかゝる政策は具體的に確立をみるを得るのである。

宣傳の軍事的應用はむしろドイツの創案であり、ルーデンドルフ將軍はその威大なる組織的權威であつたが、第一次大戰に於てドイツは却つて聯合國側の宣傳に攪亂されてしまつた。ドイツにとつてはロイテルとノースクリフ卿一派の英國新聞の宣傳は、その大海軍より恐ろしいものであつた、もしもわが國の組織されたる宣傳の力が、わが强大海軍の威力より更に脅威をその敵國に與ふるものとなつたとしても、海軍の名譽は毫も減じはしない。否わが陸海皇軍の威力はかゝる宣傳力の組織的研究と結成によつて更に倍加しその猛威を發揮するに至るであらう。

宣傳の分野にあつて寫眞ほど有効適切なるものはない。しかも優秀なる技術と頭腦と敎訓と膽力とを持てる報道寫眞家が、寫眞界の王座を占むるとせば軍事上に於けるこの種の役割を果し得るものは

萬能なる報道寫眞家以外にその資格あるものは恐らくないであらう。

報導寫眞及び宣傳寫眞の軍事上に於ける役割と使命、また大なりといはざるを得ず、われ〳〵は未踏のこの境地にも新なる勇氣を以つて突き進まねばならぬ

世俗にいふ「寫眞報國」なる言葉も、こゝに至り漸く我田引水的な空虛なスローガンたることなくして、時局下における新なる意義と任務を發見し眞に愉快に堪えないものがある。

あらゆる分野に優秀なる寫眞を送り込め！

國內に、國外に、戰場に、敵國に！

攻擊的武器の一翼としての軍事分野に於ける「寫眞」の使命を果せ！

（昭和十四年十二月記）

第二篇　「新聞と宣傳」に關する評論

一、總力戰下の新聞の役割

戰時下新聞の歷史的役割

東亞に於て歐洲に於て、砲彈は炸裂し、幾多の人血は流れ飛んだ。世界はいま戰ひの坩堝の中に喘いでおり、各國民層はこの世界史的變革に順應すべく生活體樣の全面的編成替に苦鬪しつゝある。

しかるに最も鋭敏であるべき新聞ジャーナリズムが、身自ら民衆の苦惱を呼吸し、未曾有の史的雰圍氣に圍繞されながら、なほ且つ內容的にも、形式的にもジャーナリスティックな具象化に於て、また機構の運用に於て、舊態依然として實に陳腐なる存在を續けつゝあり、世の識者もまたかゝる皮肉な、且つ、有害無益なる存在を許容しつゝあるのは、まさに聖代の不思議といはねばならぬ。

余は新聞人たること、既に十年、その間幾度となく眞正ジャーナリズムの確立を叫び、且又、新聞ジャーナリズの戰時體制への即應のために、その變革を主張し來つたものであるが、今日こゝに、再び「新聞」の歷史的役割、並びに社會的存在の意義を檢討するに、用紙節減資材拂底その他諸種の外部的條件に促されて、頁と段數の上に多少の變化を見られるとはいへ、本質的に編輯に營業に、また

その事業と企劃の上に、殆ど何等の革新も伴はざる新聞ジャーナリズムの歴史的役割と、社會的存在の意義について筆者自ら新聞人たるにも拘らず、多大の疑惑を抱くのみならず、寧ろ積極的にこれを否定せざるを得ない氣持すら湧くのをいかんともし難いのである。

今日の現實面の急激なる變化發展は、新聞人自らをさへかくの如く虚無的にするほど餘りにも激動的であり飛躍的である。だが、われわれは飽くまでこれを乘り越え、生き拔いて行かねばならない。否、舊きを揚棄し新しきを創造するの今日に於けるほど焦眉の急たるは未だかつてないのである。

故に、筆者は「新聞」の戰時體制はどうなつてゐるか？の問題を、この偉大なる歴史的瞬間を歩みつゝある新聞ジャーナリズムの時局下に於ける、最も緊要且つ切實なる變革と更生の問題として、改めて提議し嚴正なる批判の俎上にのぼせたく思ふのである。ジャーナリズムに關心を有する識者の批判を仰ぐを得ば、筆者の望外の悦びとするところである。

報道精神はたして健在なるか？

皇軍が避くを得ぬ曠古の國家總力戰に乘り出した以上、われ〳〵は是が非でも勝たねばならぬ。しからば勝つといふことはどういふことであるか。これに對して軍部パンフレットは實に明確なる答を

與えてゐる。即ち「戰さに勝つにはどうしたらよいかといふ問題は、何うすれば國家總力戰態勢を强化擴充することが出來るか、といふ問題を以て置き代へることが出來る」と。けだし至言といはねばならぬ。國家總力態勢の强化擴充こそ、戰爭に勝つために獲得しなければならぬ必須の前提條件である。

しからば、今日の「新聞」がその機構のすべてを動員して國家總力戰の一翼としての役割を完全に果してゐるであらうか？

この點について軍部パンフはいつてゐる。「今日新聞が大きく聖戰に參加し、凡ゆる戰線に重大なる寄與をしてゐることは、新聞の社會的地位から見て極めて當然のことであるが、之は大きな力である。特に報道戰士の奉仕に至つては既に幾人かの死者を出した程で一般兵士に、優るとも劣らぬものである。日々の新聞を見、數ある記事を聞きニュース映畫を見て眼の中に熱いものを感じたことである」と。

なるほど今事變に於て、戰爭の規模が大きくなればなるほど、戰線と銃後の連鎖となつて國民を結成せる新聞の功績は尠しとしない。だが、これは新聞の報道主義第一とする、即ちニュースを賣らんとする新聞の營業的自由競爭の偶然に齎らした處の最も偉大なる副産物に過ぎない。新聞が「意見（ヴユース）」のために買はれるのでなく「報道（ニユース）」のために買はれるのだ。といふ從來の編輯並に營業政策より一歩

も出でたるものではない。

勿論いつの時代にあつても多少の相違こそあれ、ニュースの提供は必要であり、新聞本來の使命でもあるが、問題はいかに報導し、いかにニュースを取捨選擇するかにある。

だから軍部パンフは續いて云つてゐる「だが、數ある記事の中には「冷靜な客觀的報道」の中に疑問を抱かせるものゝ散見されることも否定し得ない。著しく變貌を遂げた雜誌については、更に急速な戰時態勢化が望まれるのみである」と。

夕に禁綿禁鐵事件の容疑者を報道し、朝にその容疑者の僞瞞的寄附行爲を禮讃的に報道するが如き無節操、あるひは石炭、肥料、燐寸等の不足に官僚的統制の不手際を攻擊しながら、これらの生産を意識的にサボタージュしつゝある大財閥を眞向から槍玉にあげない無氣力は、所謂「客觀報道」に疑惑を抱かれ、大衆に不信の聲を投げられても致方もあるまいではないか。

報道主義第一をいふ新聞の所謂「客觀的報道」に於て、かくの如きであり、「敵に知らしめる不利よりは自國民に知らしめざる不利益遙かに大なり」又「僞報の上に築かれたる愛國心は愛國心の値なし」と喝破した、かのノースクリフ卿の確固不拔の信念と、氣魄なきに於ては、報道主義の末路こそ實に哀れと云ふべきである。新聞ジャーナリズムの報道精神はたして健在なりやを疑ひたくなる。

新聞刻下の急務

戰時下の過渡的混亂と國民生活體樣の再編成期にあつては「新聞」は報道のみによつて買はれるのでなく、またニュースのみによつて賣るべきではない。

政治産業經濟の再編成の過程にあつて極度の混亂の樣相を露呈する現在、國民はその行くべき道に迷ひ、見透しなき將來に對し甚しき不安に襲はれつゝある。彼等は迷へる哀れな小羊の如く、只ひたすら信賴すべき指導者の出現を待望しつゝある。玆に於て新聞が確固たる定見も見透しも示さず、さらにその報道に於て時局適應の選擇性なくしては、徒らに混亂の上に混亂を重ぬる印象以外に役立たず、從つて新聞は讀者大衆に寄與するなにものもないばかりか、却つて內敵思想の溫床を提供さへしてゐるのだ。

今事變に於て、軍部パンフが云ふが如き新聞の功績僅少ならずとするも、新聞が現在國家の總力戰の一翼として、その有する威大なる宣傳力を十分發揮しつゝある　といふならば、筆者は遺憾ながら「否」と答えざるる得ない。

新聞の有する巨大なる力はいふまでもなく對外、對內に於ける宣傳力である。そして宣傳とは多數

の同意を得たる輿論の完成であり、自國にとつて有利なる心理的衝撃(ショック)を與へることである。

しからば、現下の國内の輿論と風潮はどうであらうか。勿論政府當局の失政もあらう、宣傳統制經濟の缺陷もあらう、國民の無自覺の故に自ら責任を負ふべきものもあらう。

だが、新聞ジャーナリズム自身が、本來の使命を完遂せざりしが故に、否、ジャーナリズム自身の無定見・無節操・無批判・無氣力の故に、國民を迷はし、混亂せしめたこと幾何なるや、また實に計り知れないものがある。

各新聞は、國民精神總動員聯盟本部の無爲無策を非難したが、ジャーナリズム自身精動の精神を有爲ならしめるために殆んどなすところなかつたといふも過言ではないのである。のみならず、精動の精神を無爲無策ならしめる、社會的情勢と、根據については、頰包り主義を押し通して、何等暴露せず、攻擊せず、批判しなかつたのである。

『戰爭に立てば「天皇陛下　萬歲」と叫んで行く日本人が、財界に於ては利潤がなければ兵器一つ生産しないといふ。生命を惜んで戰線を放棄する兵士がありとしたら人は何と云ふであらうか。ところが財産を惜んで生産を拒絶する資本家には曾て之と同じ批判が加へられたことを聞かない』

軍部パンフの、この痛烈骨を刺す社會批判が、新聞人の耳にきこえぬのであらうか？。

本能寺は必ずしも重慶にあるのでなく、敗戰的イデオロギーと行爲とは國内隨所に百鬼夜行の有様ではないか。

軍部パンプが正當なる解答を與えた如く、戰ひにどうしたら勝つかといふことは、どうしたら戰時態勢を强化擴充することが出來るかといふことであり、しかもドイツが第一次大戰に敗北を喫したのはルーデンドルフ將軍が正しく自己批判せる如く「ドイツの敗戰は聯合軍の攻擊に對抗する事が出來なかつたためではなく、聯合軍の魅惑的宣傳の餌にたやすく誘惑されて、戰線の背後で國家が瓦解したためである」のだ。

故に、新聞は今こそ、その威大なる宣傳力を驅使して、國内に於けるもろ〳〵の敗戰的イデオロギーと裏切行爲とに對する勇猛果敢なる戰端を開かねばならぬ。「國策に協力せんと欲する者は讀め！敗北を欲する者は之を讀むな！」との意氣に燃え、スローガンを揭げて、東亞の大業達成のための大聖戰を行ひつゝある、此現實を自覺しない、憐むべき國民に對して、何よりも先づ挑戰し反省を促すべきである。

攻擊に勝ち、戰線の背後に於て破れたのは決してかつてのドイツのみではなく、萬里の長城を築き外敵に備へながら、しかも内亂によつて崩壞せるは必ずしも秦の始皇帝のみではない。

「幾萬の忠良な戰士が血で洗ひ骨を埋めた滿洲北支に對して、利潤が無ければ之をボイコットするものは、戰線放棄の兵士と擇ぶところが無いのである。それにも拘らずかゝる叛逆行爲を見ながら、それを反逆行爲と悟らない第三者も亦國體に對する自覺が十分であるとは云へない。一方で現狀打破の戰爭が行はれてゐるのに、他方ではその現狀を維持しようとする階級があり、一方では戰爭に凡てを投込むものがあると、他方ではその裏で利己的な金儲けをやる、といふ樣なことは國體に反する思想の實踐であるといはねばならぬ。軍人や官吏の點取主義も同樣である。階級主義や組合利己主義も同斷である。戰爭に行つた者が不運なので殘つたものはよろしくやるべしといふことでは、全體も分度もあつたものではなく、之こそてん〳〵ばら〳〵の個人主義思想である。大戰末期のドイツやフランスにならぬ前に、一日戰死が每日戰死の氣持にならぬものであらうか。いよ〳〵どん底にまで行つた一九三〇年頃のドイツにならなければ財產の戰死はないものであらうか。今日一人のシヤハトがないものであらうか、今日萬民輔翼、滅私奉公とは皆んなで戰爭するといふことである。現在兵士は召集されてゐる。次に技術の徵用が始まつた。資本の徵用に至つて一應の萬民輔翼が成立すると云へる」

口に擧國一致、滅私奉公を誓ふ國民を前にして、なほ且かゝる叫びを擧げなければならない軍部パンフの聲は悲壯といふよりも、むしろ憤激を感ぜしめる。

この聲に呼應して奮起する新聞は全國に一紙もないのであらうか！　これをジャーナリズムの上に實踐し、もつて國家總力戰の一翼としての役割を果さんとする「新聞」は一箇もないのであらうか！

雜誌に劣る新聞の國策性

思想戰に於て特に重要な事は、國內にも敵思想が非常に多く、敵思想たることを知らないものも亦非常に多い事實である。しかもこの思想戰の恐るべきところは敵戰力が、飛行機や大砲の如く危險を直接見ない所にある。一切のジャーナリズムの戰時下に於ける重大なる使命の一つはこの國內思想戰への展開であり、新聞はかゝる役割を、最も敏速に、最も效果的に果し得る機能を有するにも拘らず新聞のこの分野に於ける、統制ある計畫的な進出は未だ見られざるところである。

さきの世界大戰當時、アメリカで廣告代理業者と約八百の新聞社が、美事なスクラムを組み、新聞雜誌聯合會なるものを組織して、その頭腦と技術と勞力とを以て愛國公債の賣出しに、また赤十字資金の大募集に統制ある活躍をしたのは有名なる話で、大戰參加史の名譽ある一頁（ページ）とされてゐるが、日本の新聞界は、口に戰時販賣、革新販賣を稱えながら、典型的な自由主義的販賣競爭の修羅場を現出した。自由主義的新聞を打つために古き自由競爭の激發を以てし、更に火に油を注いだ結果を招いた

自由主義或は自由主義的新聞を打つ唯一の、又最も正しい戰術は、全體主義經濟文化政治の創造のための鬪爭であり、かつてのアメリカに於けるが如き、全國新聞社の糾合によつて、統制ある組織を以てする國家奉仕への實踐にあるのだ。

事變處理への道は、換言せば、國內輿論の統一であり、總力戰態勢の完成である。從つて、新聞ジヤーナリズムの、今事變に於ける活躍の餘地は、むしろ廣大無限のスペースが偉大な宣傳力を有する新聞ジヤーナリズムのみの獨壇上として與えられてゐる。しかも彼等新聞人は、この天與の歷史的役割を峻拒しつゝあるかの如くである。

だから「著るしく變貌を遂げた雜誌については、更に急速な戰時態勢化が望まれる」との警告をうけた雜誌ジヤーナリズムは、新聞ジヤーナリズムが哀れにも迷路をさまよひつゝある間に、かへつて急速なるテンポを以て、文字通り「著るしき變貌を遂げ」て、新聞ジヤーナリズムを追ひ越して、なほ餘りある前進を示せる壯觀さは、新聞ジヤーナリズムの權威のために、なんとしても情ないことであるさるにしても、雜誌「文藝春秋」の十二月號に於ける「歸還兵は語る」及び「國民はこう思ふ」の輿論調査は、質問要項と形式に多少の異論もないではないが、なんといつても近來のクリーン・ヒットであつた。これに刺戟された譯でもあるまいが、二月號各雜誌は一齊に足なみ揃えて所謂輿論の調

査と喚起のために大進軍を奏で始めた。

中央公論二月號は「米内内閣への翹望」を收錄し、また「新内閣へ訴ふ國民の聲」の募集を始め、「文藝春秋」二月號は「責任ある政治を要望する座談會」を行ひ、續いて時局增刊號に、學生・インテリ・中小商工業者・農民等國民各層の聲に聽く座談會を掲載し、「改造」二月號は國民生活の安定を要望する知名論客の座談會と、米内内閣總批判を特輯し、日本評論も歸還兵農民官吏商人サラリーマン新聞記者等を交えた中層國民の聲に座談會と「政黨復活論の分析」を以てその陣容を飾つてゐる。

勿論これらの雜誌は月刊であり、從つて編輯期間に一ヶ月間の餘裕もあり、スペースに於て自由增減の許され得る特典もあるが、雜誌編輯者のこれらの企劃には、いづれも全國民に時局認識について再檢討と再批判とを嚴肅に迫るある眞劍さと切實なる要望とが感ぜられる。われ〳〵は朝夕迎える新聞の一紙にでも、かゝる眞劍なる氣魄を感じ得るものがあるであらうか？。

思想戰に於ても新聞は雜誌に劣る

余は、新聞ジヤーナリズムが雜誌ジヤーナリズムの著るしき進出に追ひ越されつゝあり、わけて、編輯企劃に於て、時局協力の眞摯な態度と熱烈なる氣魄あるを潔よく認め、これを賞揚したのである

が、言論機關として思想戰線の第一戰に立たんとする攻擊的精神に於ても、遺憾ながら新聞ジャーナリズムは劣勢なる感を免れないのである。

例へば、雜誌ジャーナリズムが阿部內閣の如き弱體者を奏請したる重臣の責任について、各誌とも相當突込んだる批判を加えてゐるのに反し、新聞ジャーナリズムは、殆んど口を喊して語らなかつたし、石炭不足と電力飢饉についても雜誌が「石炭資本といふのは三井、三菱、住友、古河の巨大財閥の寄り集まりで、商工省の威令が幾分徹底されず有力炭鑛では最近坑道の堀進作業も充分に行つてゐないのではないかと疑ひを抱かせるものあり、石炭資本家のサボタージュも相當ある」（日本評論二〇〇頁抄錄）との批判を以て鋭く迫り「利潤のなきところ兵器一つ生產しない資本家の個人主義」を問題にしてゐるのであるが、新聞ジャーナリズムはこれら財閥の行爲に、いかなる膺懲をも加えてゐない、彼等は卑怯にも新聞の片隅で、小さくなつて遠吠えをあげてゐたに過ぎない。

また、各大新聞が競ふて歐洲大戰に送つた特派員のレポールタジュは、またなんといふ貧弱さであらうか。彼等特派員の報道は淺薄なる賣文家の單なる雜報多く、鋭利なる戰爭文化の批判もなければまた、各國戰時態勢下の政治經濟に關する、所謂客觀的報道に依つて、祖國へ齎らす警世的な忠告も見られないではないか。しかるに、改造並びに中央公論二月號の淡德三郎の現地報告の如きは、フラ

ンスの戰時體制下の政情や稅制を詳細に報道し、わが國戰時稅法の改正に向つて、まさに項門の一針とも云ふべき深い示唆を與えてゐる。殷賑產業と平和產業との跛行景氣による不均衡に對して、國民の不平漸く高まらんとしつゝある秋、フランスが今次大戰に行つた緊急稅法の制定はまさに他山の石として學ぶに足る。

外電を讀まんと欲するほどのものは、歐洲大戰の特派記者の報道に期待するところは膠着したマジノ・ジーグ兩戰線のよも山話ではなく、大戰下の各國民が戰時態勢を、いかに急速に整備し、いかに順應しつゝあるか、といふことであり、またわれ〳〵がいかにこれより多くを學び取らねばならぬかといふことにある。

かくて、新聞ジャーナリズムは、事變下總力戰の、しかも事變處理の新段階、態勢强化の最も深刻に必要とされる今日、思想戰線に全羽翼を伸ばすべき好機を捉えながら、空しくこれを逸し去り、しかも恬然として自らの重大使命を覺らざるものゝ如く、雜誌ジャーナリズムに先陣の功を讓つたのである。これを謙讓の美德といふべくばジャーナリストと云ふものは餘りにも情ないものであらう。

愛國運動の實踐に

全國の各新聞社が、今日の戰時體制に順應せんがためには、全國的統制ある規模を以てする愛國的實踐運動の展開と、個々の新聞機構の革新といふ二つの仕事が急速に、しかも斷固として行はれなければならぬ。この際古き革袋に盛られたる貴重な傳統や人事行政の情實の介在は許さず、鋼鐵の意志と勇氣とを以て突き進み、變革の斷行がなければならぬ。

全國の日刊新聞社を以てする新聞社愛國聯盟とでも稱すべき、全國的規模に於ける統制ある組織の結成は、最先になされねばならぬ。

そして一定の廣告スペースの提供をもつてする出征家族援護資金、或は傷病兵愛護更生資金の募集の如きを一絲亂れぬ統制を以て積極的に行ふべきである。

大戰當時のアメリカではジヤーナリストの自發的な申出によつて政府の弘報委員會の下に廣告課なるものが設けられ、宣傳戰に於ける不統一に依つて生ずる無駄を排除し、一貫した計畫が進められた彼等が先づ第一に着手した重なる宣傳は

一、造船所の造船職工を募集獲得しなければならないこと。

二、自由公債の賣出しを宣傳して豫定通りに資金を集めねばならぬこと。

三、國民が一旦買つた公債を出來るだけ賣り戻さないやうにしなければならないこと。

四、戰時愛國切手の賣行きを增加させること。

五、赤十字の資金募集を行ふこと。

六、燃料管理局、國防會、公報委員會、陸軍省、農務省、技術家、管理局等の所管問題について國民に呼びかけること。

七、募集運動を全國的に徹底さすこと

等であつた。しかも、この廣告課には一文の宣傳豫算なく資金と云へば各新聞、雜誌社から寄附を得た廣告面が主なるもので、約八百の新聞雜誌社が毎月平均十五萬九千二百七十五弗六十四仙に相當する廣告面を無償で提供し、これを資金とし宣傳を系統的に按配し、計畫して、必要な圖案と文案を作つて各社に送附したのであつた。

アメリカ・ジヤーナリストのこの愛國運動にわれ〳〵も大いに學び、直ちにこれが實踐に乘り出す可きであり、かゝる全國的規模と統制を以てする仕事は、支那事變公債の賣出に協力するとか、對內對外宣傳政策の確立のために新に宣傳省を設けよ！　との運動を起すとか、考えれば仕事はいくらでもあるであらう。

ともかく、國內相剋摩擦の見本の如き新聞界より、醜惡なる販賣その他の鬪爭を一掃すべく所謂總

親和、擧國一致の體制を、かゝる仕事の實踐に依つて戰ひとるべきであるとすれば、名古屋、新愛知の片々たる小競合も大朝、大毎の覇權の爭ひも雲散霧消するに至るであらう。

いま政府當局は事變公債の賣出しに躍氣となつてゐる。しかも財產戰死の覺悟を以て公債を買え！と、どこかの新聞が一度でも廣告スペースの奉仕をしたことがあつたであらうか？ 各新聞社の合同團結による愛國的實踐への參加は、その間に、必ずや相反目する新聞社間の、種々雜多なる爽雜物を排除し淸算し、新聞界の淨化作用が期せずして行はれるであらう。

新聞の戰時體制

次に、個々の各新聞社が編輯とその機構の運營に當つていかにして事變處理の新段階に順應すべきか、といふに筆者の私見を以てすれば、朝刊八ページ、夕刊四ページの現在の紙數は決してスペースに於て不足を告げてゐるとは思はない。いな、これ以上の頁數の節減や發行部數の制限さへ今日より覺悟すべきである。

編輯內容の再整備については從來の網羅主義の方針を一擲せよとか、時局認識の上に立つ嚴正なる撰擇主義でゆきたいとか、いろ〳〵注文もあるが、かゝる技術的——必ずしも技術のみの問題ではな

いが——な詮策は、いま暫く問題にしないとして、戰時態勢順應のために忘れることを出來ない內容と形式についてのキイ・ポイントのみを强調するに止めよう。

いまさら、ニューヨーク・タイムスの日曜版「讀者の頁」の例を引くまでもなく、最近の雜誌ジャーナリズムは、そのスペースを豐富に讀者に開放して成功を收めてゐる。所謂國民の聲として輿論の反映としてジャーナリズムがこれを採用するのは、かゝる事變下に於ては至極當を得てゐることである

各新聞社がその愛讀者に、むしろ有害無益なる樣々なサービスを工夫しながら、讀者に奉仕する最大の道ともいふべき、讀者の愛讀新聞に對する發言權の附與——即ち讀者開放のための頁を多量に割かないのは寧ろ不思議とするところである。新聞ジャーナリズムの不振の原因の一つは實にかゝる俠量にあるのだ。

讀者の投稿の中には、多額の稿料を支拂ても得られぬ、新鮮にして興味ある記事が決しく尠くない。眞の意味における「讀者の頁」開放は、國民に有益に奉仕する思想の交換所の役目をはたす。新聞の玄人は讀者の中に文筆をとれ得るものは僅少なり、と讀者を依然輕蔑する傾向があるが、使ひ古された活字の如く日々磨滅して行く不勉强な新聞記者より、今日の讀者は遙に進步的である。故に、讀者大衆に自己の愛讀する新聞に對する發言權を擴大するとか、讀者の自由討論場たる頁を開放することは

新聞ジヤーナリズムの前進と時局適應の處置としてまさに緊急なる課題の一つであると信ずる。

更に一の肝要なる問題は、既に筆者の說きたる國內宣傳戰に對する積極的な參加である。

「ドイツ戰線の崩壞は初め戰線の兵士が歸休、歸鄉して銃後の惰氣に感染し、それが戰線一杯に擴まつて後には戰線の兵士が銃後を素す結果となつた。

銃後の安定、緊張と、戰線と銃後との緊密な一體化は戰爭遂行に取つて極めて重要である。銃後安定の第一眼目は內敵解消、銃後の一體化である。前戰の將兵が赤旗に阻害され、ユニオンジヤツクに妨害され、ソ聯機に盲爆され、アームストング製タンクに傷つき、赤化宣傳や法幣工作に操られた匪軍に斃れて行く時國內に拜英崇ソの蠢動があつたのでは、後顧の憂が無い沙汰ではない筈だ。國內の拜英崇ソ、通英通ソの討滅こそ前線の將兵に對する喫緊の責務である。第二は銃後が揃つて戰線に參加することである。一方では生命の奉還があり一方では他愛もなく大トラになつて居たり、特別利得があつたり、デパートの贅澤品が賣切れになつたり、闇相場で物價が釣り上つたり、先物買ひが出たり、政府が石炭の買溜めを奬勵したりしたのでは、戰爭貧乏と戰爭成金とが對立する風潮を作り出すだらう。之は戰爭衰退の恐るべき原因となり得るのである」

（以上の軍部パンフは昭和十四年の九月の「國家總力戰の戰士に告ぐ」と題するもの）

戰線衰退の恐るべき原因や、事變處理を阻止し、後退せしめるパチルスのなんぞ國内に多きことぞ！いな、物資缺乏の根本を見極めず、その對策の積極的なる提言をせずして、無自覺な民衆と共に單なる嘲笑を投げたり、讀者大衆に媚びて闇取引を是認するが如き口吻を洩らしたりしたのは、寧ろ新聞ジャーナリズム自身ではなかつたか。事實宣傳戰に於ける、又現段階に於ける「新聞」の重大なる軍事的政略的役割の認識錯誤は、不知不識のうちに凡ての上に犯されつゝある。非國民的思想の一掃と克服こそ、事變處理の唯一の道であり、從つて新聞の戰時體制への完成でもある。

光輝ある紀元二千六百年の記念として新聞が打ち建てなければならぬものは、全國の「新聞」を一丸とする聖戰參加の實踐的金字塔でなければならぬ。對外對内兩戰線の全面に亘つて深刻なる危機と敗戰思想とは孕みつゝある。

「無冠の帝王」といひ「社會の木鐸」とまで尊稱をうけた「新聞人」が、この日この時起たずしていつの日いつの時に國家奉仕をなすべきであらうか。國家の惠澤と知遇に馴れ過ぎた新聞人の自ら三思三省し奮起すべき秋であると思ふ。（昭和十五年一月記）

二、輿論と社說

——輿論調査機關を設置せよ——

（一）輿論の科學的測定の必要

新聞の論說や、新聞寄稿家その他著名な人士の意見が、輿論を代表すると見做されてゐた時代は過ぎ去り、いやしくも輿論と名づけられる以上、出來るだけ廣汎に涉つて一切の階級の意見を蒐集し科學的に結論して輿論を測定する、即ち輿論の科學的測定の時代が來らんとしつゝある。

アメリカの議會ではジョージ・ギャラップ博士の主宰するアメリカ輿論研究所（Dr Gesgo Gallp: Amerian Institute of Public OPinions）がありさへすれば議會は必要ない、とまで極論する議員が出たほどであるが、輿論研究の機關さへあれば議會が必要であるかないか、は暫く別問題として、新聞が一應輿論を代表するかの如く思はれてゐる以上、又新聞社側に於ても、またかゝる自惚を抱いてゐる以上、この輿論調査の科學的測定といふ問題に對して決して無關心にはゐられないのである。

特に讀者大衆が單なる事實の報道以外に、その公正な批判を欲し、戰時下に於ける自己の針路の見

極めを望んで、新聞論説の權威ある批判と主張を要求しつゝある時、この輿論と社説との關係を更に深く考慮し檢討することは、あながち無益ではないであらう。否、新聞が一箇の主張を持ち、或は眞に輿論の代辯者たることによつてのみ存在の意義が、加重されんとしつゝある非常時局に當つて、いかに輿論を測定し、而してこれをどんな方法を以て正確に代辯するかは、「社説」を始めとして自己の新聞の主張をどうしたら科學的に立論せしめるかといふ論理上の方法論を決定する問題として、今や新聞自體が解決しなければならぬ實に焦眉の急を要する問題なりと信ず。

何故なら、輿論の測定といふ問題こそ、新聞の背負はされてゐるところの基本的な課題の一つであり、そして社説とはこの輿論との關係をいかに結びつけて、いかに解決してゆくかといふ問題に外ならずその及ぶところは極めて廣汎なばかりでなく、新聞本來の使命を達成せんがためにも極めて重大であるからである。

（二）新聞と輿論の關係

朝日新聞社美土路昌一氏はその著「社會と新聞」の「新聞紙と輿論との關係」と題する一章に於て「最近新聞の材料蒐集に對する組織の完備は、一問題に對して直ちにそれに直接利害關係を有する輿

論の中心的勢力の意見を知る事が極めて容易になつた。勞働問題、或は經濟、社會の諸問題に對し、之を代表する團體や組合や、民衆の意見は直ちに新聞社に反映する。從つて社說がその日いまだ表面的輿論の代表に非ずとも翌日起るべき輿論の代表であり、先驅である場合が非常に多い。濱口內閣における減俸問題が俸給生活者の輿論の先驅となり代表となつた如きはその顯著なるものである。要するに新聞あつての社會でなく社會あつての新聞である限り、新聞のみの力によつて直ちに社會が踊り動くのでなくて、新聞によつて社會の既に有する輿論が整理され統制されるのである」といひ輿論と新聞との關係、また社說と輿論との關係について極めて適切なる批判を加へられてゐるが、結局「新聞の論ずるところが輿論の代表であると云ふ事は無論出來ない。何故ならば、この場合にはまだ眞正の輿論といふものが起つてゐないからである。然らばその論文、社說が直ちに輿論を作り得るかと云ふにそれも必ず然りとは云ふ事を得ない」（同書一六頁）と新聞の社說及び論文が必ずしも常に輿論を代表するものにあらざることを認めてゐられるのである。

輿論と新聞の社說及び時評との間にかくの如き間隔があり、遊離があり、しかも成年讀者中時事評論を讀むものが（アメリカに於ては僅かに十五パアセントに過ぎず、日本にはこれに就いての正確なる調査の數字がないが）二五パアセント程度に推定される以上、輿論を科學的に測定し、これを紙上

に正確に反映せしむることによつてこそ、輿論と社説及び時評との間に於けるギャップを埋めることが出來るのであり、又社説と讀者との親密度を益々深めることが出來るのである。

ギャラップ博士のアメリカ輿論研究所と並び稱せられるフォーチュン誌の輿論調査に從へば、四千二百萬人のアメリカ輿論構成人口中、六百三十萬人しか時評家の時事評論を讀んでゐないのである。この調査は時評家の勢力に嚴然たる限界を與ふるものであつて、この限界をアメリカの時評家の最高權威者たるリップマン氏に通用すれば、同氏の執筆する百六十紙八百萬部のうち、その讀者數は僅に百二十萬の讀者しか有してゐないことになるのである。

しかも時評家の說に贊成する者が、その讀者中の約五〇パアセントに過ぎないと豫想されるに於ては、新聞の社說並に時評の影響する範圍はその發行部數との比例に於て極く僅少なるものと見なさざるを得ない。

日本に於てアメリカのこの調査の統計が直ちに適用され得るものではないが、恐らく、この推定を以て律するとも當らずと雖ども遠からぬ結果が生れるであらう。

（三）社說の讀者影響力との關係

アメリカの「フォチューン」誌の輿論調査に據れば、時事問題に對する讀者の信頼と贊成の率が更に確然と判明する。

同一の問題に關し、次の如き各方面より異れる議論を述べられる時、その何れの議論を眞に近しと信ぜられるや？

ラヂオ時報	二二・七％
ラヂオ解説者	一七・六％
講演者	一三・〇％
新聞論説	一二・四％
新聞記事	一一・一％
時評家	三・四％
事態に準ず	一九・八％

「フォチューン」誌一九三九年八月號

右の表の示すが如く新聞社説及び時評家に對する讀者の信頼は極めて稀薄である。尤もアメリカは新聞雜誌を信ずることの最も低い國であり、わが國に於ける新聞雜誌に對する信頼はアメリカに比し

遙に優れてゐるのであるが、アメリカ・ジャーナリズムと讀者の信頼を表示するものとして、次の表もまた大いに參考になるものと思はれる。

アメリカの新聞讀者は新聞ニュースを如何程まで信じてゐるか？

政治記事に關して	三三・一％
勞働問題記事に關して	四一・六％
外國及び對外問題に關して	五〇・一％
ビジネス界の記事に關して	五一・一％
宗教及び人種問題に關して	五九・三％

右は最も客觀的に報道されるといふアメリカ大新聞のニュース記事に對してまで、しかく讀者は信頼を置かぬのである。

わが國民大衆の新聞雜誌に對する信頼は遙に大きいのであるが、この信頼程度の深淺はともかく新聞が輿論を正確に測定することによつて、そしてこれを紙面により妥當なる方法に於て反映することによつて、讀者の信頼を高めなければならぬことは確かである。

否、今日におけるほど權威ある批判と指導を與える社說、並に時事評論の痛切に要求されつゝある

時代はない。しかも、國民のこの切實なる要求に反比例して、社說の不信と輿論との離反が次ぎ〳〵に暴露されつゝある時、かゝる科學的方法を以てする輿論の測定調査は絕對に必要である。

（四）輿論調査の科學的方法

朝日新聞美土路氏の說明に俟つまでもなく、今日の完備せる新聞社の通信網はある程度まで輿論の動向をキャッチすることが出來るが、それは飽くまである程度であり、又輿論の動向であつて、輿論そのものでは決してない。

しからば、輿論調査に當つて、凡そ幾人程の人達の意見を徵すれば宜いのであるか？　といふ問題即ち取材の量の問題は、最も世人の不審を持つ點でありまた、最も知られてゐない點である。

ギャラップ博士の言に據れば「社會的に類似の條件の下に屬するものは、その意見が類似してゐる故に、或る種の階級から適當な代表者を選べば、極めて少數者の意見から、社會全體の意見を推定出來るのである」ギャラップ博士のアメリカ輿論研究所では、普通の問題の場合には、凡そ一萬五千人の意見を徵するに過ぎないのであるから「一切の階級の廣汎に涉る意見」とは云ひ得ない筈であるが、實にそれこそギャラップ博士の創見があり、またハーバアド大學のセオドル・ブラウン教授がベルヌ

イ公式を適用して作製したる高等數學的なブラウン圖表の功績があるのである。

だが、輿論調査に當つて注意すべきは「合衆國の大統領の意見も、ハーヴアド大學の總長の議論もタキシイの運轉手や、レストランの皿洗ひの意見と全く、同じであるし、同じく扱ふべきである。これこそ、眞のデモクラシイであり、平等さである。斯くの如き趣旨で集められた輿論こそ、眞の國民の聲であり、國民の代表である。輿論には英雄も要らぬし、輿論測定には事大思想ほど危險なものはない」　（改造二十二卷一一八頁加藤氏の說）

ギヤラツプ博士は輿論構成人口數を調査し測定し、問題に依つてその範圍と人口數が變更される。また人口の分析も、地理的、經濟的、年齡、性別、人種、政治的等六種別に分けられて、割合少數を對象として、しかも最も正確に近い輿論の結論を導き出し得る樣に研究され調査が行き屆いてゐるのである。

この種の方法を以て推測を行ふ場合五パーセント程度の誤りは「許さるべき誤差」として扱はれてゐるが、この誤差が許されるならば四千四百萬人の全米の輿論を知るためにも、僅か六〇〇人か九〇〇人に回答を發するだけで事足りるといはれてゐる。

（五）新聞社と輿論調査機關

これ以上ギャラップ博士の輿論調査の測定方法を紹介する暇もないが、詳細は昭和十五年の日本評論三月號及び改造增刊號の加藤賢藏氏の專問的な研究を參照されたい。

しかし、加藤氏は日本に於ける輿論研究所は官設のものが便宜であり、新聞雜誌がかゝる機關を持つことをその商業性に俟つて歪曲される恐れありとなして寧ろ反對の口吻を洩らしてゐられるが、余は新聞が大衆の輿論を正確に測定し、大衆により密接に接近することこそ、新聞の社說及び時事評論を眞に輿論の代辨となし、また權威づけ、讀者に興味と期待を與ふる所以なりと主張するものであるだが、勿論、問題の取材方法その對象とすべき輿論構成人口には特殊な研究と工夫が加へられなければならぬ。

しかし、その研究の結果自己の新聞の有する讀者の百分ノ一の範圍に於て輿論構成人員を決定するとし、そして、その新聞が二十萬の讀者あるものと假定しても二千人を對象として回答を求めねばならず、一回の調査費は少くとも二百圓を必要とするであらう。

だが、新聞社に於て一事件に對する調査費二百圓は當然の失費であつて、さして苦痛であらうと

も思はれぬが、果して、この種輿論審査機關を持つ勇氣と決斷と先見の明あるや否や疑問であるが、余はかゝる機關を設置すること早ければ早いだけ新聞業界に於ける確固たる地盤と勝利を確保することが出來るものと信じてゐる。尙、輿論の結果は、必ずしも發表する必要はなく、民主主義的な意味に於てゞなく、國民の動向を察知する資料と考へるならば戰時下に於ても、又所謂新體制下に於ても輿論を科學的に調査することは、その政策實行の上に於て、又所謂「下意上達」の一手段として益することと多いと思はれるが、この點なほ十分研究の餘地ある問題である。

本論を草するに當つて加藤氏の前記誌上の二論文及びギャラップ博士の著書に負ふところ多し。記して謝意を表す。

（紀元二千六百年三月初旬）

三、統制經濟と新聞經營

——經濟問題としての新聞機構の再編成——

（一）新聞經營と統制經濟

國家全體が未曾有の危機にさらされてゐる時、國民が徒らに個人の利益のみを追求して公益を忘れてゐたとしたら、その結果は火を睹るよりも明らかなことである。況んや國民大衆の輿論を統一し指導する地位と役割の課せられつゝある新聞や政治家が國家の當面せる恐るべき危機を前にして、自己の利益と勢力擴張に狂奔する以外に、何等なすところなかりせば、わが國運の前途必ずしも樂觀の許され得ぬものがある。

余は客年の六月頃より起された中京新聞界の爭鬪を自由主義と自由主義との戰ひに過ぎず、專賣店制度そのものこそ古き革袋に盛られたる古き酒にして自由主義經濟觀念より一歩も出でたるものに非ず、と斷じたるに對し、相當の物議をかもしつゝあるが、余は自由主義の何物なるかを知らざる徒輩が余の批判の追擊を恐れて、徒らに詭辯を弄しこの正當なる批判をモーメントとなして將來の飛躍と

發展に備えることなく、却つて自らを糊塗し合理化せんとする誠實なき有樣を見て、實に悲憤と寒心に耐えざるを覺ゆるのである。

しかし乍ら、余は眞に新聞を愛し愛するが故に新聞の戰時體制を飽く迄確立せんとの願望に燃ゆるが故に、戰時體制經濟機構と新聞との關係を究明して、新聞機構の經濟的再編成と改革とを要望せんとするものである。

笠信太郎氏は近著「日本經濟の再編成」に於てこの點について興味ある示唆を與えてゐる。

「新しい經濟體制を確立するには、經濟界が自由を取かへさねばならぬといふことである。それは統制によつて動かされる經濟ではなく、經濟界が自主的に動かす經濟でなければならぬといふことである。しかし、それは統制に對して反撥することによつて得られるのでなく、反對に統制を吾々が自ら摑むことによつて出來るのであつて、この意味で今は何よりも日本の經濟界を荷負つてゐる責任者たちが立上る秋である。ほかでもないそれはいまの經濟界を動かしてゐる利潤といふ動機と統制といふ權力との二つの互に撞着する原動力の葛藤を脫して、一元の姿にすることであり、統制する力と統制に抗する力との二重人格の格鬪を、一つの新しい經濟體制の中に溶解することである。いまは統制が經濟を動かす公然たる原動力となつてをり、そのもとにおいて利潤がいま一つの隱されたる動力とな

つてゐる。そこで、出來るかぎり統制から逃れようとする經濟界の姿勢はその利潤追求の個人主義的な本質をいよ〳〵露出してくる。勢ひ、かういふ腰つきでは經濟界は政策に對して公然たる發言をなすことができなくなるほかはない。しかし、經濟界自身がその自主を取返すためには、結局のところその腐りかけた自由主義の一部分を切つて捨てる覺悟が必要である。この意味で經濟界の指導的頭腦は、彼等自らを眞實に生かす爲に、この大死一番の覺悟をもたねばならぬ」(同書四頁)

新聞機構を支配する經濟的動向、即ち新聞經營の基本たる販賣の傾向を見るに、經濟界に對する笠氏の斷定をそのまゝ當てはめることが出來る。

新聞業界の販賣に於ける姿勢は、ひとり中京においてのみならず、各社の覇權爭奪戰——紙數獲得の競爭——は飽くまで利潤追求の個人主義的自由主義的態勢を示し、統制を逃れんがために、或はより强力な統制の來らんとするに先立ちて、愈々その本質を發揮してその自由競爭的形態は露骨となりつゝある。

だが、新聞業界が國家總力戰的態勢を自ら强化して、その戰時體制を確立することを欲しないならば、やがて來る强力なる統制に或は國家政策そのものに何等の發言權をも失ひ、自ら壞滅すべく、もつとハツキリいふなら發行部數の制限、發行停止、强制合同等の强壓を餘儀なくせしめるに至るであ

らう。

だから、新聞業界自身がその自主を取返へすためには、結局のところ腐りかけた自由主義の一部分を切つて捨てる覺悟が必要であり、且つその指導的頭腦こそ大死一番の覺悟が必要な譯である。

（二） 新聞企業の經濟的解剖

自由主義經濟の原則は利潤の自由である。しかも利潤をコストの構成分とする商品の價格とこの商品を販賣することによつて生きんとする利潤の追求について、否、これを統制——例へば物價統制、配給數量（新聞ならば定價或は用紙）を統制し——一定せんとするところより生ずる根本的な又は機構上の矛盾——自由主義經濟の原則との矛盾に對して、根本的な考察を試みることなくしては、經濟界の再編成の基本方針が生まれないと同樣に、新聞機構の統制と戰時體制化はなし遂げられない。

自由主義經濟の原則は利潤に對する無限の追求であることは今更繰返すまでもないが、しかも考えねばならぬことは、それは「生産」のために利潤追求の原則がとられたのではなく、利潤追求の結果が生産の發展となつたのである。この點が極めて重要である。

だが、かゝる方式による生産の發展が、統制經濟下の日本においてその限度に達し、却つて生産の

發展を妨げる障害となり利潤本位の上に立つ從來の經營を一變するの必要に迫られつゝある。しかもこの經營形態の變化なしには企業の建前の變更もまた不可能である。

例へば、新聞社の經營における他の側（國家）からなすところの經濟的政治的保證なくして、商品としての新聞の價格（定價）を拘束し、又用紙の制限を以て更に發行部數の制約をもなさんとすれば、勢ひ利潤販賣收益——の制限となり、新聞生產機構としての新聞企業の經營を不能ならしめる。

こゝに於て經營形態の再編成といふ問題が浮び上つてくるのである。新聞經營上においては專賣店制の廢止による共同配達、共同集金とか、一市一町一村一店制とか、紙量又は發行部數の制限、販賣地域の割當協定等々の種々の新聞經營の再編成——戰時體制としての統制經濟上よりの機構の改革が新聞經營の戰時下における生存權確保の問題として要望されるのである。

經濟學といふ學問は、十八世紀においては政治學を具體化する學問として登場し、十九世紀においては倫理學の具體化する學問として發達したものとみるならば、二十世紀において經濟學は再び政治學と倫理學との統一において新しい人間共同生活の學問として出發しなければならぬのである。

戰時下における人間共同生活は政治的には、國家總力戰或は萬民輔翼と呼ばれ倫理的には滅私奉公と稱せられる。この政治と倫理との統一としての戰時經濟の方則の行方を見極め、國家の一員としてそ

の線に沿ふこと、即ち、國策に協力することは國家總力戰下の國民の義務である。しかも、政治經濟文化における國民再編成の指導的役割を果すべく最も重要なる地位を占める「新聞」の威大なる歷史的使命を思へば、なほさらに新聞機構に於ける頭腦的地位にあるものが大死一番の覺悟をなし、戰時體制即應の起死回生的手術を施さなければならない。

だが、このことは只單に一個の新聞社の機構編成替によつてなれ得るものでなく、新聞經營の再編成として、新聞企業の强制カルテル或ひは强制トラスト結成といふ方向に進む以外にないであらう。しかし、この强制が自主的に新聞機構の經濟的再編成としてなされるか、或は國家權力による外部的强壓によりてなされるかが問題である。

(三) 新聞經營の基本的問題

新聞經營がいかに特殊的な存在であつても、國家經濟の一環としてのつながりを持つてゐる以上、企業としての新聞が戰時經濟の基本的方則を無視して存在することは許されない。余の本書その他における〳〵の全體主義的提案を、單に新聞販賣或は編輯における業績の批判であり、技術の問題なりと解釋し、甚だしきに至つては一二特定的なる人物を對照せしが如く曲解するならば、それらの

徒輩とは最早日と處を同じうして語り得ぬものである。何故なら、問題は苟くも個人的な感情を介在せしめて解決し得られぬほどに重要にして緊迫せる、新聞經營そのもの、或は新聞業界の死活を意味する問題であるからである、即ち余の提案は經濟的制度——新聞經營形態——の問題であつて、單に人間性の問題でなく、まして特定個人の問題でもないのだ。

何故なら、自由主義の批判と克服こそ、アダム・スミスの經濟學に淵源し、ローマ文明の精華たるローマ法の精神に胚胎する强烈な個人主義の低流をも伴つてゐるのであり、それによつて體系づけられ、その法則的基礎の上に培はれた世界的な近代自由主義の倫理が一夕によつて克服されうるものでなく、況んや政治學倫理學の統一としての經濟學である統制經濟を無視したる單なる嘲笑慢罵では決して解決されない事を知るからである。

だが今や新聞業界に於いても自由主義的な經濟組織（經營形態）そのものに代る組織が現實に必要とされるばかりでなく、現にその組織が登場し來つてゐるといふ事實を知り、その事實の上に立つてこの再編成——機構の改革を考えねばならぬ。

即ち、利潤の拘束であり、生產の制約である定價の一定限度までの据置、用紙統制による紙量の節減、生產コストを支配する諸物質の昂騰と販賣價格及び勞賃等による矛盾、報道の自由制限による編

輯上に於ける自由主義の廢棄、人的資源の不足による機構運用上の破綻その合理化等あらゆる問題が非自由主義的組織の確立と再編成とを要求して、新聞全機構の上に全面的にのしかゝりつゝある。これらの變革と再編成はもはや到底古き自由主義經濟の革袋の中にいつまでも盛り切れないばかりでなく、既にその革袋はところ〴〵に破れて血がにじみ出でつゝある。否その出血に應急手當の膏藥さへもはりながら傷の痛みが少いといつて己が面上の膏藥を知らぬ顏である。

だが、われわれは新聞機構の再編成がそれらの笑止千萬なる人々の欲すると否とに拘らず、國家統制經濟上の必至の問題たる以上、これをいつまでも拱手傍觀してゐる譯にはゆかない。誰か解決してくれるであらう、と待つてゐることは出來ないのだ。これらの問題こそ新聞人自身がみづから解決しなければ强力なる國家權力によつてなされるであらうが、その時この强權の下に壓死したり多數の怪我人が出たりすることはジヤナリズムのために餘り名譽とはいひ得ないであらう。本論提議の余の結論は「長期建設」の後方組織が、即ち經濟再編成の問題であり、新聞經營の形態を長期耐久の可能なる姿勢において作り上げるためにこそ、新聞機構自體の經濟的再編成が必要であり、かゝる根本的經濟問題の解決と戰時體制化によらずんば、戰時經濟統制の進展に伴ひ、これに對應し、これと組み合つて決して矛盾撞着を來たさない强靱性の獲得は不可能に屬する。

余の提案する最近の諸問題がこの意味に於ける新聞機構の戰時經濟的變革を要望する一種の警告たることを理解し得ない人々は、むしろ余の論策を讀む必要のない無緣の衆生であり、且又濟度し難い舊體制のジヤーナリスト（新聞人）でもあるのだ。

（昭和十五年三月記）

四、國家宣傳と新聞統制

——獨、英、佛の新聞は如何に戰ひつゝあるか——

（一）「戰時下に作家は如何にすべきか」の問題に對する英國二紙の論爭

最近イギリスの小說家フイリツプ・リンゼイが「祖國が生死の鬪爭を行つてゐる時、作家は如何にすべきか？ そのペンが國家に仕へる唯一の武器であるとしても、作家は平時と全く同樣な創作活動に携つてゐるだけでよいか。……かういふ重大な瞬間に、テーブルに坐り過去の幻想にふけつてゐることが許されるか、敵機來襲に備へて空をみつめてゐる人々に向つて百年間の出來事を描いた本を讀んでくれと賴むことができるか」といふ、戰時下に作家は如何に生くべきか、との極めて嚴肅なる問題を提出しており、この問題を中心にマンチエスター・ガーディアン紙とロンドン・タイムスとが極めて對峙的なる論爭を展開しておるが、この歷史小說家がイギリス文壇に投じたる一石は、戰局の深刻なる危機に當面するイギリス新聞界に俄然重大なる社會問題を提出するのみならず、ガーディアン、タイムス兩紙の戰爭觀の兩極端を表示する問題として注目に値するものがある。

ガーディアン紙は作家リンゼイのこの疑問に對して「かゝる時期にあつては、アカデミックな考察にふけるべきでなく、作家はみなすべて現在の戰爭を勝利に導くに役立つものを書くべきで、さもなければ何も書かぬ方がよい」と極めて素朴な議論を述べてゐるが、ロンドン・タイムスは「戰爭の背後において市民生活が相變らずつゞけられることは、國民の志氣にとつて望ましいことだ。作家は藝術家はその天職を恥じることなく仕事に邁進すればよい。彼等は明日を準備してゐるのだ」と、かなり遠大な抱負を語つており、作家リンゼイ自身は「作者及び讀者の或るものは一ケ月のうちに死ぬかも知れないが、イギリスは依然として存在しより偉大な國家となるだらう。この將來のイギリスにおいて藝術、文明の狼火は燃えつゞけなければならぬ」と、飽くまで藝術に生きる作家らしい「永遠の生命」ともいふべきものを信じてゐる。

しかし、今私が茲で問題にせんとするのは、戰時に於ける藝術問題に對する兩紙の見解の相違である。

ガーディアン紙は素朴な言ひ方ではあるが、小説を含めての言論の統制を主張するものであり、作家リンゼイ及びタイムスは昔ながらの自由主義の遵奉者である。

（二） イギリス情報相の戰時新聞對策

イギリスに於ける新聞界に於ける統制主義と自由主義との對立は、藝術や小說の問題ばかりでなく新聞を戰時下にいかに處理すべきか、の問題に對してゞさへ今日なほ論爭の焦點となりつゝある。

即ち、ドイツ機の空襲相つぎつゝある時、下院議員のルーイス氏は「イギリス新聞が獨機の空爆寫眞を頻繁に揭げてゐることは、國民に空襲の恐怖を指嗾する樣なもので、國民の志氣沮喪するも甚だしい。當局はすべからく速に空爆寫眞の揭載を禁止すべきである」と非難せしに對して、政府委員ニコルソン並に情報相ダフ・クーパー兩氏は「政府は新聞の空爆寫眞揭載を禁ずる權限を有しない。政府は新聞側の賢明なる處置を希望するのみである。我々は新聞側の當事者の思慮に訴へることにより充分の成功を收めてゐると信ずるものである」と述べてゐる。

イギリスが國家存亡の危機に頻しつゝも、自由主義最後の牙城を守らんとする心意氣は、むしろ悲壯といふべきであるかも知れないが、新聞に於ける論議の自由並びに自由制限の範圍を決定する問題は、その意志がいづれも戰爭に協力せんとし、しかもその方法と見解に於て對立するが如き問題に遭遇する時に於て、一層その左右を論ずるに困難な場合が多い。

しかも「作家は戰爭を勝利に導くやうに書くべきであり、しからずんば何も書かない方がよい」と斷じたガーディアン紙が、フランス崩壞の原因を指摘して、戰時新聞檢閲の行き過ぎにあり、無思慮にして極端なる言論統制が、フランス國家を破壞的結果に導いたのだ、と、論斷せるは、極めて貴重な又示唆に富んだ見解で他山の石として大いに學ぶべきものがある。しかし、最近自由の國アメリカに於てさへ「戰爭が始まつたら新聞を宣傳用に徵發する權利を大統領に與ふべし」といふ議論が、オクラホーマ州民主黨上院議員によつて叫ばれてゐるのは、興味深い事實である。

けれども、新聞の言論に對する統制が無分別にして一歩その方法を誤るならば、却つて反對の効果と悲劇とを生むに至る。現在の日本の新聞統制が徒らに峻嚴に過ぎ、無定見なるを深く反省するならば、ガーディアン紙の次に紹介するフランスにおける新聞の戰時檢閲の失敗を、必ずしも一笑に附するわけにはゆかないであらう。

（三）敗戰國フランスの新聞政策に何を學ぶべきか！

マンチスター・ガーディアン紙の指摘するフランスの新聞政策失敗の重大なる點の第一は、「峻嚴にして分別を失した戰時新聞檢閲の施行は、新聞の築いた尊重さるべき傳統を破壞するは勿論、過酷

の檢閲は大衆をして無知ならしめ、信頼とうぬぼれと根據のない樂觀主義をとらしめるもので、かくの如き民衆心理は遂には悲劇的結果を生むものである。檢閲により味方に都合の悪い事實の掲載を抑へること自身は望ましいことかも知れないが、多くこれは反對に味方の都合のよいデマ・ニュースを大衆に信頼せしめるといふ悪い結果を伴ふ」といひ、わが國の從來の檢閲方針に一矢酬ゆるかの如き批判をくだしてゐる。

そして第二に「國家の危機を目前にひかへて、フランスの民衆は新聞に依つてイタリーとドイツと反目してゐるとばかり信じ込み、またマヂノ線の不可侵性と北部防備の完全無缺に虚僞の絶對的安全を感じてゐたのである。私（ガーディアン紙パリ特派員）は九ケ月間毎日フランスの新聞を讀んでゐたが、一行でもフランスの國境防備の缺陷をついた記事は見たことがなかつた。悉くマジノ線はジークフリード線にも增して防備堅固な要塞であると誇つてゐた。獨軍がソンム河近くまで押よせるまでパリではこの樣な狀態が續いてゐたのであるが、一方壓倒的な獨軍の威力を薄々感じてゐる前線將兵の氣持は全く反對で、パリの新聞記事には疑念を抱いて讀もうともしなかつた。

私は何時かパリーの或新聞の編輯長に、前線の將兵はパリーの新聞を讀んで皆んな怒つてゐるぞ、と云つたところ、その編輯長は頭をかきながら〝檢閲は暇がとつて仕方がないので一行でも多く抹殺

を免れ、早く檢閲を通過するためには記事の內容に多少の手心をせねばならないゝと答へた。またフランス當局は殊に英人記者が、フランスの强靱性を打電することを喜んでゐたので、正確なニュースを誇つてゐる自分としては、並々ならぬ苦心をなめさせられた」と書いてゐる。

しかし、ガーディアン紙特派員のいふ如く餘りにも過酷なる新聞檢閲が、フランスを敗北に導いた大なる原因であつたであらうか。又、新聞政策の失敗がその無分別なる新聞檢閲にあつたであらうか？勿論フランスの敗戰は新聞に對する政策の失敗に見る如く、他に多くの敗北の原因が、あらゆる問題にひそんでゐたのである。また檢閲の過酷といひ、無分別といふも、結局全體主義的政治機構の上に組織せられざるところの宣傳政策の破綻の一つの現れに過ぎずして、私はこれを單なる新聞檢閲に於ける失策として斷定することはできない。

わが國に於ける「檢閲」の問題も、そしてその無分別、無定見もこれと同樣、必ずしもそれは檢閲官の無分別、無定見の問題として簡單に葬り去るべきものでなく、これこそ政治の新體制に伴ひ、いち早く俎上にのぼりつゝあるところの廣汎なる宣傳政策確立の問題であり、從つて全體主義的政治理論に立脚する實に根本的な問題に發足してゐるのである。

この問題に對する解答を、ドイツに於ける宣傳と新聞の美事なる統一を研究することに依つて、採

り出さうではないか。

（四） ヒットラー政權の成立前後の新聞界

今次大戰にドイツが新聞政策に於ても、いかに壓倒的勝利を博したか、また、宣傳と新聞との美事な統制に於て、輝やかしい成果を獲得したかを語るに先だち、われわれはヒットラーが政權を把握せる前後の新聞政策に於ける努力の後を尋ねることに依つて、彼が新聞を如何にして國家宣傳と結びつけたか、を見極めることにしたい。

ナチス出現以前のドイツの新聞の總數は、一九三〇年に於て三三五三紙であつた。そしてその內譯は

政黨機關紙	一、五〇〇
政黨的連絡を有するもの	一、六〇〇
純營業的新聞	二五三

更にこれを思想的に細分すれ

社會民主主義的のもの	三五％
右翼的のもの	三〇％

左翼的のもの　二〇%
營利的のもの　一〇%
その他のもの　五%

歐洲第一次大戰以前、四千二百紙に近き新聞を有してゐたドイツの新聞も、敗戰後中小新聞の倒壞するもの續出し、ヒットラーの政權獲得前には三千四百紙内外に減少し、更に急激に減少して、ヒットラー内閣成立當時二千七百紙に低落し、ヒットラーが「我々が建設せんとするものを妨害する如何なる新聞紙の存在をも許さず」といひ、また「新聞は人民教化の一つの道具であり、新聞を國家及び國民への奉仕をさすため國家は之を統制下に置く」と宣言し、一九三三年十月新聞雜誌記者法、廣告法全國文化院法中の全國出版院規定等の三つの法律を發布して、新聞統制を斷固として實施せしため、新聞は一躍一千三百紙に減少し、新聞記者の數は一九三二年の一萬九千より五千三百に減じ、發行部數も亦三分の一に下つたと云はれてゐる。

國家社會主義の立場から、新聞界の反抗者を一掃することは、比較的容易なことで、僅か三ケ月の徹底的なる統制によつて、營利事業的なる日刊新聞は、財政困難に陷り、發行者をして新聞事業を放擲せしめることが出來た。由來新聞紙といふものは、大言壯語するが、それを沈默させることの容易

なることは、蛙の鳴くのを止めることゝ同樣である。と、ナチスはいつてゐる。

政治的非常時に於いて、かゝる効果を得るために必要であり、有効なるものは、ヒットラー親衞隊突擊隊等の武力であつた。ヒットラーは、かくの如くにして、多數の自由主義の大新聞を相次いで、ナチスの統制下に協調さしたのである。

マルキスト系の諸新聞は、例の國會議事堂の放火事件に關係ありと睨まれて、發行停止を命ぜられた。それから約五十の共產黨新聞と約百三十の社會民主主義系の新聞が、たゞ一片の令狀で閉鎖を命ぜられた。

これに反して、ナチス系の新聞紙は盛況を極め、約百二十紙に達した。この政府反對新聞の徹底的一掃により、ヒットラーは、ナチスの抱く世界觀に依つて言論を統一し、現ドイツの健全な輿論を次第に築き上げて行つたのである。

しかし、ドイツの國力增進とナチスに依る政治機構の統制整備は、ナチスが一九二〇年早くも之を機關紙となしたる「フエルキツシエル・ベオバハター」(Völkischer Beobachter)を始め、漸時發行部數を增加し一九三六年、北ドイツ版約二十七萬、南ドイツ版約十萬八千に達したが、一九三九年には北ドイツ版約十九萬三千、南ドイツ版約四十二萬に變化し、その總發行部數約六十三萬に躍進してゐる。

「フエルキツシエル・ベオバハター」紙が、ミュンヘンを中心とするナチス機關紙たるに對し、「デル・アングリツフ」(Der Angriff) は、ベルリンを中心とする機關紙として、一九二七年に創刊されたもので、ナスチは政權を獲得する以前に、前記の二紙の他に「ハンブルゲル・ターゲブラット」(Hanburger Tageblatt)——一九二八年創刊、ハンブルグ市にて發行（同社は海外讀者版として週間「ウエルト・ポスト」(Welt post) を出してゐたが、一九三九年ターゲブラット紙と共に廢刊)してゐるものや、エッセンを中心とする工業地帶に「エッセネル・ナチオナル・ツアイトング」(Essener Natinal Zeitung)——一九三〇年創刊、發行部數約十四萬三千——等の如き有力なる機關新聞を創刊あるひは獲得して、レーニンが「新聞は最大の組織者なり」といつた言葉を、ヒットラーは、ナチスの黨勢擴張に活用してゐたのである。

ヒットラーが、新聞をわが掌中に收めたのは、彼が政權を掌握した一九三三年以後であるかの如く思つてゐる人が多いので、ここに一言注意を喚起して置く。

因に、今次大戰の勃發せる一九三九年現在に依る、ドイツ國内に於ける前記新聞以外の主なる新聞とその發行部數は、左の如くである。

一、ドイツエ・アルゲマイネ・ツアイトング (Deutsehe allgemeine zeitong) 發行部數六〇、〇〇〇

二、ベルリナー・ロカールアンツアイガー（Berlier Lokal Anzeiger）　同　一九九、〇〇〇
三、デル・アングリツフ（Der Angrib）　同　一〇〇、〇〇〇
四、ベルリナー・ベールゼン・ツアイトング（Berlier Borsen Zeitung）　同　三一、三〇〇
五、ベルリナー・モルゲンポスト（Berliner Morgenpost）　同　四〇〇、〇〇〇
六、ミュンヒナー・ノイエステ・ナツハリヒテン（Münchner Nereste Nachrichten）同　九二、〇〇〇
七、ミュンヒナー・ツアイトング（Münchner Zeitung）　同　六五、〇〇〇
八、ハンブルガー・フレミデンブラツト（Hamburger Fremdenblatt）　同　一一七、〇〇〇
九、ケルニツシエ・ツアイトング（Kelnische Zeitung）　同　七二、〇〇〇
一〇、ハンブルガー・アンツアイガー（Hamburger Anzeiger）　同　一五〇、〇〇〇

（Annuaire de la presse francaise & étrangere　一九三九年版による）

（五）　宣傳省内の新聞部

ヒットラーは、言論統一の必要を認めて、政權を獲得するや直ちに、閣内に新聞部を設置すると共

に、啓蒙宣傳省内にも、新聞統制に關する一局を設けて、各新聞を統制指導することゝした。それは一九三三年三月十三日のことで、ヒットラー内閣が成立したのは、三三年の一月三十日で、二ケ月後早くも「政府の政策及びドイツ祖國の再建に對する國民の啓蒙及び宣傳の目的のために」國民啓蒙宣傳省を創設し、且つ新聞に依る言論統制に乘り出してゐる。なんといふ水際立つたスピードであることか。この省の出現はドイツのみならず、全世界の耳目を聳動するに足るもので、宣傳省一週年記念の祝典に「政治的精神的意志教育に、新しい道、かゝる新らしい近代的な形式としては、未だ世界のどの國にも踏まれなかつた新しい道が開拓されたのである」と誇るのも無理からぬことである。

啓蒙宣傳省の全内容と活動については、他日これを詳論することゝし、宣傳省内第四部に屬する新聞の部局について少しく述べよう。

この部は、同時に政府の新聞部で、その指導者ディトリッヒ博士は、同時に國新聞部長代理でもあり報導制度のすべてはこゝで支配される。

新聞部は「國内新聞部」と「外國新聞部」「無線業務部」の三部に分れており、國内新聞部は、内政、ドイツ新聞に關係する總ての問題を取扱ひ、毎日新聞會議が宣傳省内に開かれる。その會議には各通信社通信員及び新聞編輯人（中央新聞社の主なるもの及び地方新聞社の編輯人）が、參集して、

政府筋より材料が與へられ、各省からの公報の註釋がなされる。又各省はドイツ新聞の輿論についての指導をうける。かくて、新聞と政府との間の緊密なる接觸が、ドイツ政府をして輿論を無視することのないように大いに役立つのである。

「外國新聞部」は、全世界の新聞に眼を通し、これに就いて關係ある國家の省局及びドイツに活動する外國新聞代表者を適當に指導し忠告したりする。そして、報道や見解の誤謬を訂正し、また防止する。

「無線業務部」は、ドイツ放送局に、毎日のニュースを提供する。最も新しい手段に依つて活動する報道網によつて、すべてのドイツ放送所及び報道所と直接の關係に立つてゐる。

宣傳省がゲツベルス博士によつて主宰されてゐることは、人も知る通りで、その支配下に三十二の地方支部があり、ゲツベルス大臣の命令一下、直ちに宣傳の嵐が、ドイツ國内は勿論全世界に向けて吹き送られる。

（六）ドイツ新聞統制法

ヒットラーが、ナチス黨機關紙を所有したのが、一九二〇年で「フオルキツシエル・ベオバハター」

紙であつたことは、既に述べたところであるが、彼はこの時——國家社會主義勞働黨組織の際（一九二〇年）に、既に次の如き新聞政策を宣言してゐるのは、注目に値する。これ彼が政權を握るに先立つこと十二年であり、一九三三年十月新聞雜誌記者法を制定するに先立つこと、實に十四年である。

即ち、ヒットラーは、一九二〇年の新聞政策に於て「吾人は意識せる政治上の虚僞、及び新聞によるこれの頒布に對して合法的宣傳を要求す。吾人はドイツ新聞の創造を可能ならしめんとする左の諸項目を要求す」といひ

（一）ドイツ語にて發行する新聞の全記者及び從業員はドイツ人たるべし。

（二）非ドイツ的新聞は發行の際國家の許可を要す。而してドイツ文字を使用するを禁ず。

（三）非ドイツ人がドイツ新聞に財力的に參與し又は影響を與ふることは、法律により禁止さるべし。違反者に對しては罰として右違反新聞社の閉止、並にそれに參與せる非ドイツ人を國外に追放すべし。

國家社會主義勞働黨組織の當時に於ける政策は、一九三三年に入つて發布した新聞、出版、廣告に關する諸法律の中に、その儘盛られてゐる。ナチスの新聞統制の組織は、一九二八年二月二十六日附勅令第三八四號を以て發布されたイタリーの新聞記者登錄法規に範を取り、これを更にドイツ化した

もので、新聞統制法の名を以て發布せられたるは

一、新聞雜誌記者法　一九三三年十月

二、全國文化院法中の全國出版院規定　一九三三年九月

三、廣　告　法　一九三三年十月

以上の三つの法律であつて、特に新聞雜誌記者法はナチスの最も重要視したる政策で、その發布に際し、宣傳相ゲッベルスは長文の趣意書を布告して、その理想を示した。

「國家社會主義の言論に關する見解は精神の自由、即ち言論の自由は、民族國家に對する權利義務の限界内に於てのみ存在し得る」といふのである。

從來の新聞法の内容は、大部分自由を保證するための保護規定であつたが、この新法はその改善と現代化を要求するものである。新しい新聞法は自由保證や警察法ではなくして、實に組織法であり、民族國家の保證法でもある。新聞を公共責任の擔當者として法律的にこれに參加させることが、この新聞法の目的であつた。

新聞雜誌記者法は、全部を通じて四十七條より成つてゐる。そして、記者の職業、及びその許可、記者の職務の行使、記者の團體的保護、職業に關する刑法上の保護、及びその補則の六章に分られて

ねる。

新聞及び雜誌記者たる資格の、最も重要なる條件は

A　ドイツの國籍を有すること

B　ドイツ公民權又は官公吏たる資格を喪失したることなきこと

C　アリアン人種にして非アリアン人種を配偶者とせざること

D　滿二十一歲に達したること

E　特殊專門教育を受けたること

F　社會に精神的感化を與ふるに必要なる素質を有すること

以上であるが、これらの條件を有するや否やの認定は、新聞記者を登錄せる職業名簿を有する記者協會の會長の權限であるが、この會長の任免は勿論宣傳省大臣の統制下に置かれてゐる。

ここに特殊教育とあるのは、最短滿一ケ年の見習期間を置くもので、ドイツの大學で新聞學の講義を六學期間聽講したる證明書を有するか、六ケ月間以上の新聞通信の體驗を受けたるものでなければならない。

尙、職務行使に當つて、記者が守らねばならぬ義務とは、次の如くで、これに反する事項の揭載は

勿論禁止されてゐる。

A　私利と公益を混同し社會を誤導せしむることなきこと

B　對內的及び對外的ドイツ國の威力、ドイツ國民の共同意志、國防心、ドイツ文化若くはドイツ經濟を弱め、又は他人の宗教心を傷つけることなきこと

C　ドイツ人の名譽及び權威を毀損することなきこと

D　他人の名譽又は利益を違法に侵害し名聲を傷け、侮辱し、又は嘲笑することなきこと

E　その他非道德的なることを禁ず

かくて、ヒットラーは、新なるドイツ文化の建設に協力せしめんがために、新聞統制を斷行したがその政治理想と牴觸せざる範圍內に於て、新聞の表現には獨立性を認め、又機關紙の擁護のみに走らず、民間新聞をナチス文化の建設に協力せしめんと努力したのである。

新聞統制に關しては、その他にドイツ聯邦新聞協會の任務及び、新聞職業裁判所の仕事と組織、全國文化院及び全國出版院の組織と內容との全貌を、十分研究する必要があるが、それを詳論するは、本論の目的でないから、茲に省略することゝしよう。

（七）ドイツ軍「前線新聞」と新聞外交戰の成功

かくて、ヒットラーは、新聞をナチス文化の建設といふ高き理想の方向に組織すると共に、ドイツの國内國外に於ける重要なる武器にまで高めたのであつた。

今次大戰に於て、ドイツ國民が、打倒英國の方向に一絲亂れぬ立派な態度を示したのも、新聞政策の成功を語るものたることは、多くの論議を必要としないであらう。かくの如き統制下に置かれたるドイツの新聞が、外交政策に於て、政府の方針を支持して一致の歩調を示せるは何等不思議とするところではなく、これに就いては多くの説明を必要としないであらう。

だが、ドイツ新聞の論陣と報道とが、今次大戰に於ける微妙なる外交問題に關し、政戰兩略一致の見地から、いかにデリケートな有機的連絡のもとに張りめぐらされてゐるかを示すために、模範的なる二、三の實例を紹介して置くことは、決して無駄なことではないであらう。

『ダンチヒ市及びポーランド廻廊を廻つて、戰雲の怪しくなり始めた頃、ベルリンの各新聞は、如何にもポーランド政府並に民衆の理解ある態度を期待するものゝ如く頗る穩健な論陣を張つて居つた然るに、ポーランドがヒットラーの第一回解決案を拒絶し、英國と攻守同盟を締結し、同時にドイツ

が對ポーランド不侵略條約を破棄して以來、新聞の論調は俄然一變し、連日のやうに廻廊地方に居住するドイツ人虐殺のニュースを載せたり、ダンチヒ市壓迫の有樣を報道したりして、猛烈に一般市民の敵慨心をあふつた。その調子は之でもか〳〵といふ工合に、政府當局者として、最早堪忍成り難いことを國民全體に同意させ、戰ひもまた止む得ないことを、はつきり心底にしみこませる程のものであつた。

對英佛に關するドイツの態度に就て、各新聞は當初から今年の春に至るまで常に筆を揃へて、戰爭の責任が英國に在ることを書き立てた。「ポアリュよトミイの爲に徒に血を流すな！」といふ文句が當時のどこの新聞雜誌にも讀まれた。因にポアリュ及びトミイとは、それ〳〵フランス、イギリスの男子の代名詞のやうな名前である。之は正に眞意であつたに相違ないが、フランス國民の戰意を挫く上に於て實に有効な宣傳であつた。一般市民は當時、獨軍のライン河を越えて侵入しないのであらうかと疑つた程である。

然るに今年春になつてから、新聞紙上にはフランスも亦敵とせざるべからず、といふやうな論說が載せられるやうになつてきた。ドイツは、前年の世界大戰にうけたフランスの侮辱を忘れるものでない。總統は忍ぶ限りの讓步をして、フランスと友好關係を結ばんと努力したが、頑迷な佛政府のため

に、その努力は遂は成功しなかつたが、その責は偏にフランスが負ふべきである。ドイツは過去の恨を忘れるものではない。いつか之をはらす時が來るであらう、といふやうなことを書き始めたものである。果せるかな獨軍がベルギイ、オランダの國境を越えてフランスに進軍して行つたのは、それから間もなくのことであつた。

この西部戰が始まる直前なほ一つ興味深いことがあつた。といふのは新聞やラヂオが毎日々々バルカン問題を報導して居つたことである。ベルギイやオランダの事に就いては一言半句も言を費さず、專らルーマニアやトルコの國情不安を述べ、英國やユダヤ人の同國内に於ける種々の陰謀を暴くやうな記事を掲げたり、イタリアが反英氣勢を盛んにして、今明日の中にも參戰しさうな氣配をみせてゐると報じたりしたものである。丁度その頃私はイタリア經由でナポリから日本の船に乘つて歸國しようと準備してゐる頃であつた。知り合ひのドイツ人達は皆僕にその無暴を忠告し、バルカン地方がかう不穩では、イタリアの參戰は間もないことであらうから、須らくシベリア經由の道を取るのがよいと說いてくれたのである。自分も半分はその氣になり、若し途中でイタリア參戰などといふことになつたら、どうしようと本氣になつて心配した。が、それから間もなくベルギー、オランダへの進軍が始まるなどと豫期するものは一人としてゐなかつた。南ドイツの一都市シュトツトガルトの旅館で、

オランダ侵入を告げるラヂオの報知を耳にした時は正に青天の霹靂であつた。自分はこの時の驚きを忘れない。新聞はそれつきりバルカンのことを書かなくなつてしまつた。そして、景氣よく西部戰線の勝ち戰さを報導しだした。』（氣賀健三氏の大戰體驗記）

新聞をして外交政策に緊密に協力せしめることは、ゲッベルスの確固たる方針であつた。宣傳・謀略の巧妙なるコントロールに依つて、新聞紙面の報道と論說に於ては、カムフラージとゼスチュアよろしく、自國の目的貫徹のために、その假面の背後に隱れて電光一閃進擊するドイツ軍作戰の水際立ちたる美事さと、宣傳戰術の優秀さは、前觸れも騷々しい、わが國新聞の外交問題に對する輕卒なる論議と、これを操縱する術を知らぬ情報部の不甲斐なさは、外交戰に於けるドイツ宣傳省及び政戰兩略一致の（神技に近い）メカニズムと、その戰術とを、大いに學ぶべきであらう。

しかし、今次大戰における宣傳分野に於ける最も異色あり、しかも顯著なる收獲と功績を擧げたるものは、PKの略稱を以て呼ばれてゐる報道中隊の編成である。

報道中隊に關しては、前章「大戰に現れたドイツの宣傳戰」及び第四篇「寫眞宣傳」の最後の論文「寫眞家よ武裝せよ」に於て、詳論したから、茲に詳述するを避けるが、報道中隊の功績に於て、われわれが最も注目と關心を有するは、「前線新聞」の報道中隊アパートに於ける編輯と發行である。

日支事變に於いても「前線新聞」は、わが軍報道班によつて發行され、今次大戰に際して英佛側に於ても、恐らく發行されたであらうが、ドイツの報道中隊に依つて、編輯された「前線新聞」の巧妙なるアヂテーションは、ドイツ軍前線將兵に對して、實に重大なる役割を果しつゝある。

ドイツ兵がどうして、あんなに勇敢に鬪つたかについては、勿論、平時に於けるナチ精神の徹底その他種々なる理由を擧げ得るのであるが、ナチ精神の昂揚、ヒットラーに對する絕對の信賴を最もよく植えつけたものは、實は戰場に於けるこの「前線新聞」であり、新聞記者として日頃訓練されたる宣傳省のエキスパートに依つて編輯されたるこの新聞は、今次の戰爭の目的、ドイツが復興せんがためには、英佛はどうしても邪魔であるとか、また、ドイツの爆擊しようとしてゐる目的都市であるとか、その戰略的意義がどこにあるといふやうな、當面必要な戰局や戰況を詳細に報道して、士氣を鼓舞すると共に、實際に戰爭に携つてゐる兵隊に、現在目前に展開されつゝある戰爭の狀況をよく知らしめる、それも記事と共に極度に寫眞や圖解を利用して行ふといふ非常に親切な方法を以て、前線將兵の士氣の鼓舞と統一といふ點に、全く想像も及ばぬ多大なる成果を獲得したのであつた。

ドイツ軍の新案による「報道中隊」は、ペン、カメラ、畫筆を握る文化人が、戰場にあつて、カメラを持ち、ペンを握り、繪筆を執れば、いづれも皆各々有力たる武器としての役割を、十分發揮し得

るものであるといふことを、立派に證明してくれたのである。私は今次大戰に於ける宣傳省大臣ゲッベルスの顯著なる功績を相當高く評價するものの一人である。

イギリスでは、作家はいかに生くべきかを迷ひ、フランスでは、新聞がいかに闘ふべきかを知らざるに、ドイツにあつては、總力戰の一翼として新聞も亦立派に、鎬を削る外交戰に、又その最前線に戰ひつつあるのだ。

しかるに、今日、同じ總力戰を戰ひつつある日本の新聞界が、日頃の機敏と聰明にも拘らず、今日なほ古き自由主義時代に於ける桃源の夢から醒め切れず、イギリスの如く、いかに生くべきかを迷ひ又フランスの如く、いかに闘ふべきか、を知らざるものゝ、尠きとしないのは、實に慨歎せざるを得ないではないか！　ゲッベルスは「デル・アングリッフ」紙の社告に於て「我々の目的は通信にあらずして、刺戟、鼓舞、激勵にあつた。我々が設立した機關は、ある程度怠慣なる睡眠者をその微睡からよび醒し、たゆみなき活動へと驅立てる一種の鞭の働きをなすべきであつた。「デル・アングリッフ」と云ふ名の如く、新聞のモットーも亦綱領（アングリッフ）であつた。」と喝破してゐるが、國家宣傳に於ける新聞の役割について、實に明快なる解答ではなからうか！

（昭和十五年九月記）

五、ディトリッヒの新聞論

この譯文は國防大臣にして又同時にドイツ宣傳省次官で、ナチス黨の新聞部長たるオットー・ディトリッヒ博士の「新聞と世界の政治」と題する一文を全譯したもので、現下の日本新聞界にとつて極めて適切なる警告と忠言に滿ち滿ちてゐる。新聞ジヤーナリズムに於ける自由主義的精神揚棄のため、即ち全體主義新聞論建設のために、他山の石として學ぶべきもの多いと信ずる。

（一）

最近重大なる國際的政治問題に關して、一の新なる問題が課せられつゝある。新聞については以前に於ても、社會生活の上にも亦國際政治上にも、最も興味ある問題であつたことは事實であるが、今日に於ける如くに、新聞が政治問題の上に直接甚大なる影響を及ぼすことは、いまだかつてなかつたと云つても過言ではない。

ヒットラー總統は、かつて新聞の國際問題に及ぼす影響について一大演說を試み、全世界の反響を喚び起したことがある。彼は公然と又明白に新聞の破壞的行動が國際政治の上に及ぼす危險に對して

全責任を有する點を指摘した。

ヒットラーは新聞を以て、世界的重要性を有する政治問題なりとしてゐる。彼の演說は國際的新聞の消極的半面を示したものに過ぎないが、その聽衆の中には、始めて現代の新聞が、國際政局に如何なる役割を與えるかを知つて、驚いたものも少くないであらうと思はれる。今や新聞政策は、國內的にも國際的にも政治の最も重要なる部分となつてゐる。

だが、新聞はその光明の半面より、暗黑の半面に多く注意を拂はれる損な役割を持つてゐるものであつて、或る人々が新聞を指して、人類社會に害毒を流す厄介者の如くに考へるのは、それがためである。しかし、今日の社會では新聞なしに、一日も存在し得ざる程度に進んでゐるのであつて、新聞は現代社會の最も重要なる一機關となつてゐる、新聞のない社會といふようなものは想像することも不可能である。

新聞は日々の出來事を報導することによつて、時間と空間の橋渡しをするのであつて、人々は新聞によつて始めて、時々刻々、自分とその視界以外の周圍とを連絡をせられるのである。新聞は社會の映寫であつて又あらゆる大事件の中心となるもので、輿論の機關であり、國民の聲であり、又世界の耳目ですらある。新聞はかくの如く重要なる使命を有するのであるが、事實どの程度まで、その重大

なる使命が果され得るかといふことが現實の問題である。そしてこれに伴ふて起る種々の弊害を如何にして取除き得るかと云ふことは更に大なる問題である。それは良き空氣をも作るのであつて政治家は新聞の作るその空氣中にあつて行動するのである。

（二）

ドイツの新聞政策に關して、他の世界に於て往々誤解せられてゐるが、それは眞相が判らないからである。ドイツの新聞と新聞政策に對して正當なる理解を欲するならば、先づ國家社會主義の根本義を諒解することを要する。その根本となる思想、國家に關する定義の新解釋は、個人と全體の關係に就いての教義を明白に諒解しなければならない。國家社會主義はドイツ國民の政治思想に革命を齎らしたものである。

もはや周ねく人の知る如く國家社會主義は、個人的思想に代ふるに社會的思想を以てしたので、その國民の全生活の上に新なる途が開かれたのである。自然主義的思想（即ち自由主義的思想）を以てしては國家社會主義を理解することは不可能であつて、個人は全體の犧牲となるべきものなり、との信念があつてこそ、始めてこれを理解することが出來るのである。

ドイツの新聞政策は、畢竟するに、右の全體主義を新聞に適用したるに過ぎないのであつて、國家社會主義を理解し得ないもの、或はこれに對して、反感を有するものが、その新聞政策に對して同情を持ち得ないのは怪むに足らない。なるほど新聞は自由主義の生産物であるに違ひないが、自由主義の新聞のみが新聞ではないのである。

ナチスの國家に於ける、新聞に關する思想は、他の諸國に於けるものと全然異なつてゐる。自由主義の諸國に於ては、國家若くはその機關に對して、個人が勝手に批評をしたり、意見を述べることが許される。各個人は新聞記者であると寄稿家であるとを問はず、自己の意見をば、恰も輿論であるが如くに發表するのである。これは固より個人主義の思想の所産であるといはねばならない。

國家社會主義の新聞に關する思想は、これと全然反對であつて、個人に對して全體の意見を發表して知らしめんとするにある。我等ドイツ國民はその經驗によつて、一致結合して全體が一團となることが、國家發展の最大要件であり、國民幸福の本源であることを發見した。國家社會黨はドイツの歴史によりて全國民の統一せる政治思想が、國民的成功の基礎であることを發見したのである。そして新聞は統一せる國民的思想、即ち眞の輿論を發表すべきものである。かくして新聞紙は始めて國民に對する警告となり政治思想養成の機關となり、また各個人は、社會的連鎖の一環であることを悟らし

めることが出來る。

かくでドイツに於ける輿論なるものは、個人の利害關係や、その他の勢力に左右せられて日々變動するバロメーターではなく、眞に國民の創意を代表するものなのだ。國家社會黨は國民自身の集團にして、絶へず國民と密接の交渉を有するが故に、彼等の意見を確かめることが出來る。我々は輿論をつくらず常に現存する輿論を認むるのみである。

外國人は、往々わが國の新聞政策に對して非難を試みるものがあるが、彼等は全くわれわれと、その立脚點を異にするのであるから、理解點に達しないのも致し方ないことである。彼等は全く自由主義の立場から論ずるのであつて、その議論はわが國には通用しない。然しドイツの新聞紙は、單に政府の意見を取次ぐのみで全く自由を有しないかと云へば決してさうではない。國家の大方針に關する一定の制限を除いては、彼等は却て大なる自由を持つてゐる。民主々義國の人々が人類の最も貴重なる財産なりと信ずる言論の自由に關しても屢々批評を揮ふことが出來る。

言論の自由なる言葉は、人類の頭腦を混亂せしむる最も空虛なる言葉である。最も完全な自由を有してゐるといはれる獨立の新聞でも、實際には言論の自由を持つてゐないのであつて、言論の自由なるものは、自由主義を以て誇りとする諸國に於てすら、曾て存在したることなく、又今日と雖ども存

在しない。自分はそれに就いて、いくらでも例證を示すことが出來るが、ここには二、三の例を擧げるに止める。

一九一三年、アメリカの一新聞記者たるジョン、スキントン氏は、アメリカ新聞協會の會合に於て小都會に於ける他アメリカに獨立新聞なるものはないと喝破して左の如く語つた。即ち、もし事件の眞相を發表する自由を敢てするやうな大膽無謀な記者があれば、彼は直ちに往來に投げ出されるの外はない。自分は現に黃金の脚下に拜跪したニューヨークの一記者を知つてゐる。彼はパンのために自己と國家とを賣つたのである。要するに今の新聞記者なるものは、その背後にあつて糸を操つるブルジョアジイの傀儡に過ぎない。之は今より二十五年以前に發表された意見であるが、その後と雖ども事態は益々惡くなつてゐようとも決して改善される兆候は全然ないのである。

最近ニューヨークの一出版會社から「ワシントン通信」と題する書物を出版したが、その中に最も興味ある記事が盛られてゐる。同著者は數百名の新聞記者に質問を發し、その回答を記載してゐるが同著者の發した質問は、貴下は如何なる程度まで、意見發表の自由を有せられるやといふのであつたが、その答案は千差萬別であるが、之れを概括すれば社長、又は主筆の命ずる儘に書くのであつて、これに反すれば馘首されるだけであると云ふのである、著者ロストン氏は、之に批評を加えて、平素

自由を口癖にする社會に於て自由なるものは實際に於て存在しない。良心の自由といふが如きは、自己の意志に反して書くことを拒絶し得るだけの金を持つてゐるものだけが許される一種の贅澤に過ぎないと云つてゐる。この書物はアメリカで出版されたもので國家社會黨員の書いたものでないが、ドイツに言論の自由なしと云ふ人々に取つて絶對に必要なる讀物と稱すべきである。

今一つニューヨークで出版された「アメリカの六十富豪」と稱する出版物があるが、著者フアージナンド・ルンベルグ氏が、同書に於て富豪の生立やその内幕をすつぱ抜いたもので頗る興味あるが、その中で新聞記者と富豪との關係を暴露せし一章がある。右によれば新聞記者なるものは、およそ金次第でどんな舞文曲筆もするものだ、といふことが、實に明々白々な事實となつてゐる。

要するに言論出版の自由などといふものは、一箇の空想に過ぎず、過去現在を通じ又世界の如何なるところにもあつた例はないのである。

（三）

およそ不羈獨立の新聞といふものはなく、必らず何物かに隷屬して、その指令に依つて働くのであり、問題は只だその主人公たるものが何人であるかと云ふ事だけである。即ち商業團體の機關紙であ

るか政黨の機關であるか、背後に隱れたる黃金の權力に依つて頤使せられるのであるか、秩序と道德を破壞せんとするもの（例へば共產黨の）道具となるのであるか、或はまた責任を有する經世家、又は政府の機關となるかゞ問題なのである。

一九三三年國家社會黨の成立したる當初に於ては、ドイツに於ける新聞は全く混沌たるもので、亂脈を極めてゐたので、ナチス政府は根本的に之を改革することに決意し、一九三三年十月四日に新法律を布告し一九三四年一月一日より之を實施することにした。これによつて始めてドイツ新聞界の秩序は恢復し新聞の面目は一新されるに至つた。

ドイツ新聞の改革されたる組織は、極めて簡單明瞭である。先づ第一に、新聞の重要部分たる社說欄、即ち政治評論に筆を執るものは、個人的にその責任を負はねばならぬことにした。即ち匿名を以て無責任なる放言高論をなすことは許されない。かくて新聞紙面は始めて淸淨潔白なものとなつた。個人は全國民に對しても全責任を有するものであるから、新聞に筆を執り輿論を動かさんと欲するものは、その意見に關して當然國家社會に對して責任を負はねばならぬ。

かくの如くにしてドイツに於ける新なる新聞條令は記者をして直接に國家に關係を有せしめ、自己の良心に對すると共に國家國民に對して責任を負はしむることゝなつた、その代りに國家に於ても彼

等が不當の勢力に依つて動かされぬように彼等の地位を保護するのであり、彼等の地位は以前よりも遙に安全になつたのである。

記者をして、その記事に就いて責任を負はしむることゝ同時に、その權利を擁護するのがナチスドイツに於ける新聞改革の發足點にしてそれによりて、記者等の社會的地位は根本的變化を見つゝあるだがそれがためにドイツ政府が記者等の有する自由を束縛して凡ての新聞を政府の機關たらしめんとするものであると思ふならば、それは實に大いなる誤りである。わが政府と雖ども新聞記者が自由にその意見を發表せんことを希望する點に於て民主主義國の政府に一歩も劣るものではないが、彼等記者をしてその記事に責任を負はしめもつて國家國民の利益に貢献せんとせしめるものに外ならない。

新聞はもとより國民生活における一大勢力であつて、以前には第七の勢力と呼ばれたものであるが最近二十年來、その須位は更に上位に昇つたと思はれる。通信運輸の異常なる進歩は、各國民が益々近接すると同時に國際間に於ける勢力は增大する。新聞電報によりて世界の主なる事件は數時間にして全世界に報道せられる、無線電信は一層迅速に報導を傳へることが出來るがそれは主に新聞に依つて傳へられるのである。新聞の主張は最も多く輿論に影響を與ふるが故に新聞の主張自身が輿論として考へられるのである。

これこそ新聞が世界政治のバロメーターと呼ばれる所以であり、それがまた各國の政策の上に及ぼす勢力は最近に到りて益々增大し强大になるものとなりつゝある。然しこれは勿論單に勢力といふだけであつて、善き勢力となる事も又時として惡い勢力となる事もなきにしもあらざる場合がある。フランスの外交家はこれを舌と呼ぶ、エソップがそれを最善にして又最惡なるものと云つたからである不幸にして國際關係に於ては新聞の善勢力よりも惡勢力の方が一層大なるものありと認められるは遺憾である。

新聞に記載せられたる虛僞の報道により、輿論は歪曲せられ、無責任なる煽情的、挑發的の議論によつて、世界の平和が危機に頻したる例は決して少なくはない。ナチ政府樹立の五年後、その議會に於てわが大總統ヒットラーは無責任なる記事を以て社會に流する害毒を論じ、爆彈や毒ガスや燒夷彈等に關して、國際協定をなすと共に國際關係に害毒を流す新聞紙の發行を禁止する要ありと力說したのである。

問題は至極簡單なるに拘らず、各當局者のいづれもが之を解決出來ないのは、政治上屢々新聞の力を借りねばならぬので心ならずも沈默を守つてゐる。民主主義國家の新聞はあらゆる問題を捉へて自由に評論するに拘らず、彼等自身も亦この問題に關して一言半句も論及しない。獨りわがナチス政府

のみこの問題を取上げて改善の方法を講ずることゝなつたのである。

或る時ムソリニ首相は、國際記者協會々長に向つて、一方的の誤れる報道が國際關係に與へる影響の甚大なることを話した事があるが、實はかゝる記事は毎日の如く各國新聞に現はれてゐる。しかしかくの如き狀態は一日と雖も放任しおくべきではなく、各國政府が協力して矯正すべき事であるが、民主主義國の政府は、之を敢てするの勇氣も誠意をも持つてゐないが故に、我が國だけでこれを試みることにしたのである。

（四）

彼等が時々なす演說によりて、民主主義國家と雖ども、この問題の如何に重大なるかは十分に諒解しつゝあることで、議會その他の場所に於ける、彼等の演說によりてこの事實を知り得るのである。一九三七年二月八日に開かれたる同國新聞協會の年會に於て、フランスの大統領ルブラン氏は、新聞記者たるものは所謂言論の自由なるものを亂用せざるよう深く注意せねばならぬ旨を警告してゐる。彼のなしたる演說の趣意を要約すれば、言論の自由にも一定の限界があり、感情に驅られたり憎惡の念に燃えて他を傷つけるが如き言論をなすことは許さるべきではない。過度の個人主義は國民の一致

團結を破り、從つて、國家に害惡を流すことが多い誤れる記事や挑發煽動的言論によつて國際間の平和が脅威されるに至つては、その弊害實に甚しきものがある。新聞記者たるものゝ責任又重大なりといはざるを得ない。

近頃パリーで開かれたる外國記者協會の午餐會に於て、フランスの外相デルボー氏は新聞記者なるものが往々虛僞の報告や、不公平なる意見を發表することを非難して、國際的新聞記者の本分は國際間の感情を刺激したり、その對立を挑發して激成したりすることにあらずして、却つてその感情を融和し國際的協調を圖るべきであると述べた。一九三六年四月十六日發行のタム紙に據ればエリオー氏は新聞が紙面に於て人を傷つくるが如き虛僞の報道をなすことを非難して新に之を罰すべき法律を制定する筈で、凡ての論說は必らず署名し、一切の記事に對して、新聞の管理者及び執筆者をしていち〳〵その責任を負はしめる筈なりと云はれてゐる。

アイルランド新聞協會の大會に於て同大統領デ・ヴレラ氏は、新聞に絕對的の自由を與ふべきか、或は何等かの制限を加ふべきかに就いて演說して、次の如き疑問を提出してゐる。新聞の自由と云ふことに就いては相當の說明を必要とするのであつて、それを以て責任を負はない無制限的の自由と解してはならない。新聞の自由なる語は、その意義が明でないために屢々濫用され勝ちであるが國民は

新聞の勢力の濫用に對して保護せられねばならない。と

各國に於ける心ある政治家はいづれも殆んど同樣の意見を有し、既に度々これを發表してゐる。デンマークの首相スタンニング氏、スキスの政治家メーヤー博士等も種々の會合に於て、新聞の勢力の濫用と、之に制限を加ふべき必要を力說してゐる。

英國の前外務大臣イーデン氏は國際聯盟の席上に於て、外交の成功に關することは新聞的價値少くその失敗に關することは、寧ろ、それに引續いて起る種々の出來事のために長く世人の注目を惹くことゝなると云つてゐる。

英國の首相チャムバレン氏は、議會に於て、新聞が國際問題に關して有する勢力は善かれ惡かれ强大なるものがある故に、十分の責任感を以て之を善用すれば、國際間の空氣を緩和する上に於て多大の貢獻をなすことが出來る、と云つてゐる。チャムバレン氏が之を語る時にはハリファックス卿がベルヒテスガーデンを訪問されたことを思ひ出し、英國新聞の一部が英國外交を助けたことを考へてゐたものと思はれる。無責任なる新聞のセンセイショナルな記事によつて、國家間の理解が妨げられたる例は數ふるに遑ない程多くあるが、然し新聞の勢力によつて、危機を一髮の間に防止し得たる例は更に多くある。新聞の勢力が常に善用せられたらんには、人類社會に取つて實に至大なる祝福といは

ねばならない。

新聞記者がその責任の重大なることを自覺して、その勢力を善用するに至れば國內の政治生活も國際關係も面目を一新するに至るであらう。國際聯盟は國際關係の改善をなすためてあらゆる努力を試みた。それがために種々の工作をなし、又種々の會合を行つたがその結果の見るべきものは殆んど一つもない。若し新聞の勢力の偉大なることを認識して之を善用してくれたならば、寧ろその功果は顯著なるものがあるであらう。他の方法に依つて、一世紀かゝつても出來なかつたことも、新聞により相互の理解と尊敬を深め、その目的を達することが出來るであらう。

世界の各國は、藥品の密輸入や、白奴隷商業や、罪人引渡等の事に關して協約を結んでゐるが、何故に國際間に毒素を注入してその關係を惡化させるが如き、無責任にして惡意に滿てる新聞に對して協同戰線を張ることが出來ないのであらうか。吾々はもとよりその解決の困難なることを知つてゐる然しドイツとイタリーに於ては、共に最近新に制定せる新聞の條令によりて互ひに協力することになつてゐる。それによりて兩國の新聞紙はその國交を更に溫める上に大なる貢獻をなすことが出來るようになつた。

ドイツはポーランドとも新聞協定を締結して、新聞紙によりて、相互の視善關係を增進せんことを

勉めてゐる。又ユーゴスラヴィアの首相がドイツを訪問したる際にも、紳士契約によりて兩國間の新聞が互ひにその記事に愼重な注意を加へ、新聞によりて益々國交が深められるように努むべき旨を約束した。ドイツとイタリー間の國交の圓滿なるは、兩國間に殆んど共通とも云ふべき新聞の條令があるばかりでなく、兩國の新聞記者が互ひに往來してその交誼を暖むるためである。

（五）

ドイツは他の諸國と新聞協定を結んで、相互の理解を增進せんことを願ふものではあるが、しかしそれには自ら限度のあることを知らねばならぬ。それはわが國の好意に限度があるといふのではなく先方の新聞の理解の如何によりて協定の不可能なる場合があり限度があるといふのだ。一方のだ隊が訓練の行屆いてゐるに反し、他の軍隊が無統制なる場合には、休戰條約が成立せざると同樣で、一方の新聞のみが固く協約を守るに反し、他の新聞が無責任なる行動を行ふとするならば勿論その協約は成立しない。

幸ひにして、我が國の新聞は國家社會主義の下に、嚴重に訓練せられてゐるので、無根の風說を流布したり、濫りに外國の政府を非難攻擊するやうなことはしない。故に外國と締結したる協約を確實

に守ることが出來る。外國の政府はこの點如何なる地位にあるであらうか。

外國特に民主々義國の新聞は無遠慮にわが國の政體を非難攻擊して、その國民に對して罵言讒謀を浴せかけるのである。之れに對して各國外交官は如何なる辯解をなすかといふに、その紋切型の口上は「我等もその事實の無根にして、徒らに毒舌を弄することを知つてゐるが、遺憾ながら我國に於ては憲法に於て言論印刷の自由を認めてゐるが故に、之に干涉することは出來ない」と云ふのである。

かゝる辯解は、たとへ民主國の立脚點より見るも、吾人には諒解することが出來ない之は新聞の自由を保護するものでなくして、その濫用を默認するものに外ならぬ。エリオー氏は尊敬すべきフランスの國土に於て、眞赤な虛僞が公然と發表せられて罰せられないと云ふことは忍び難いことであると嘆息しながら、之に對して適當なる方法を講じようとはしないのだ。虛僞の風說を流布して國際關係を危險ならしむる如き無責任なる行爲を各國の政府は新聞に對して阻止する權力を以てゐる筈である國民の幸福を完ふし、國際間の平和を維持することがデモクラシーの第一義であるべきだ。しかも無根の風說や、故意に作られた毒素により國民の幸福が傷つけられ國際平和が害せらるゝ以上政府たるものは、法令の有無に拘らず、その新聞を差押へその發行を禁止するに、なんの容赦もいらない筈である。かゝる明白なる道理さへ認識し得ざる政府はわが國の協約の相手とするに足らない。

ドイツの新聞紙上に現はれたる一言一句に對して、ドイツの政府が責任を有するが如く考へる不思議な習慣が、外國政府の間にあるが、ドイツの新聞に對して愼重の態度をとるべきであることを要求しつゝ自國の新聞に對しては、印刷の自由に藉口して、何等の手段をも取らないのである。之は決して公平な態度と云ふことは出來ないし、又新聞の平和をかゝる態度を以て招來せんとするはむづかしい注文といはねばならない。

我國のみが新聞道德を守りて、外國新聞の無責任なる攻擊を甘受することは不可能である。外國政府が自國の新聞に對して殆んど何等の統制をも加へず、無責任なる言論を放任する以上、わが國に於ても之に對して勿論相當な手段に出でざるを得ない。我國は自らを防衞する權利を持つてゐる。惡魔が眼の前に立つてゐる時に自分のみが平和の天使であるかの樣に振舞ふことは出來ないことである。この點に於ては我等も亦眼には眼、齒には齒を償ふの外はない。

相手が勝手放題に、わが國を攻擊する場合に、自分だけが刀を鞘に收めて、敵のなす儘に放任しておくわけにはゆかない。我國の新聞は政府の監督の下にあつて、その自由は濫用されてゐないと云はれるけれど、往々にして外國の攻擊を常とするものあるはどうしてであるか、といふものがあるが、自國の新聞のなすことを、全く棚の上に揚げておいて、他を非難するのは隨分勝手な言草である。

（六）

他國に率先して嚴重なる新聞紙法を制定したのはドイツとイタリーであつて、兩國は新聞のその勢力の濫用を防止すると同時に新聞と記者に向つて保護を加へることにした。

我等は新聞の腐敗は記者等自身の責任ではなく寧ろその背後にあつて彼等を操縱する勢力のためであることを認めた。故に我國にあつては新聞記者等を資本家の支配より脱却せしめ直接に國家と國民に責任を持たせることにした。しかしそれがために私人の新聞の發行を妨害するものではない。かくて我國の新聞は一方に於ては無責任なる記事を掲載することを出來ない樣にすると同時に、他方に於て資本家の傀儡たることを免かれしめて、自由にその筆陣を揮はしめることになつてゐる。

我國に於ては既に立派な模範を示したことであるから、他國の政府が眞に新聞改革の意志があるなれば、その例に倣ふべきである。もとよりこれをなすと否とは彼等の自由であつて、吾人はこれに干渉しようとするのではない。彼等にして本當に世界の平和を希望するならば、この新聞を改善することが必要であると悟り、一日も早く各國が協力してその實現に努力すべきである。

彼等はいつも出版印刷の自由を口にして之をさも重大事件の如く考へてゐるが、これこそ一箇の、

想に過ぎない。實際新聞に從事するものは、新聞記者に自由の存在しないことをよく知つてゐる筈だ。新聞の自由なるものは理論の上だけの話であつて、實際には黄金の力に左右されてゐる。

抑々自由なるものは、責任の中にありて無責任の中に存在するものではない。吾等は皆な自國の社會と各國民とに對して責任を有してゐるのであつて、新聞は世界の平を促進するための道具となるべきで國民をして嫉視反目せしむるやうになつてはならない。新聞を指揮し監督するものは勿論、論說を書くもの、雜談を書くものと、等しくこの責任を自覺しなければならない。そして吾人はドイツにゐる外國新聞の代表者と層合理的ならしめんとするものである。

我が國のベルリン滯在外國記者團に對する態度は、先づその誤解を除くにあると信ずる。新聞の公平と外國記者に對する國家義務とは相互に結合されねばならない。換言すれば互ひに双方の地位を理解しなければならない。

吾人の理解するところに依れば、外國通信者の義務は、その在留せる國と國民に關して偏見なき眞實の通信を、各々自國民に與へることにあると信ずる。我國は誠實にかゝる義務を盡す人々に對して出來る限りの便宜と保護とを與ふことを惜しむものではない何故なれば、我國はかゝる人々をばその國の輿論機關の代表者として尊敬するためである。彼等が眞理に忠實ならんとする限り、わが國の事

物に關して、客觀的な批評を加へることに對して吾々は異議をさしはさむものではない。しかし個人の感情や憎念の念を以て、自己の在留する國の事物を歪曲したり國際間の感情を悪化せしむるが如き記者は我國に滯在せられざることを希望する。彼等はわが國に害を與ふるのみならず自國にも損害を與へるものであることを忘れてはならない。悪意より出づる虚僞の通信によつて國際間の破綻を來すことは決して少なくないのである。

故意にわが國の事物を曲筆して、他の國民をわが國に敵對感情を抱かさせる樣とする通信を物する記者に對して、吾々は神經過敏たらざるを得ない。悪德記者を發見したる場合に、わが國の取るべき手段は之を國外に追放することであるが、それは決してドイツの發明ではなく、他國の政府に於ても早くより之を實行してゐる。今後と雖どもわが國はこの政策を維持して行くつもりであるが。しかし決して外國の新聞記者が、國家社會主義の信ずる通りに書かねばならぬといふのではない。外國在留のドイツ人がそのドイツ人たることを忘れないことを希望すると同樣に、外國人が固有の思想感情を有するの權利あることを承認することに吾人は吝さかではない。只吾々が彼等に希望する處は、眞理に忠實にして、新聞記者たるの責任を忘れず、外交官と同樣に國際間の善意と諒解を增進せんがために努力せんことを願ふのである。

尤も新聞には何かセンセイショナルな記事がなければいけないが、國家社會主義の施設や、行動は相當にセンセイショナルな材料を提供する筈である。積極的の材料の十分に與へくれてゐる場合に、消極的の缺陷のみを渉獵して歩く必要はない筈だ。徒らにセンセイショナルならんがために、事實を誇張せんとするがために、デマの奴隷となり、往々にして虚僞に陷ゐることゝなる。

ビスマーク曰く、各國はその新聞記者のために破られたる玻璃鏡の代價を早晩支拂ひせねばならない。又曰く、十二人の樞密顧問官より一人の良新聞記者を作ることの方が、一人の良新聞記者より一人の大臣を作ることよりも遙に容易な業ではないと。かゝる名言は今日でもその價値に變りはない。

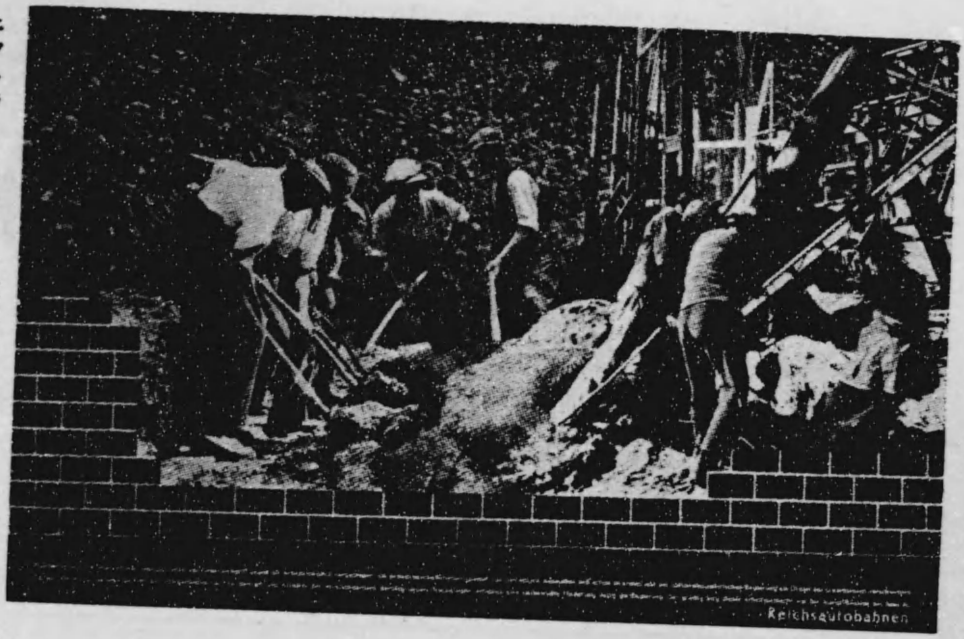
ヒツトラー氏はかつて議會における演說中に、新聞記者に二種類あると云つたことがあるが、吾人はあらゆる新聞記者が眞實の報道をなすことに依つて、世界に利益を與ふる階級に屬せんことを希望して止まない。外國新聞記者に贈る一つの金言が茲にある。曰く「凡ての國に對して尊敬を拂ひ給え而して後に自分自身の國を愛せられよ」

第三篇　「獨逸・國防・青年」問題に關する評論

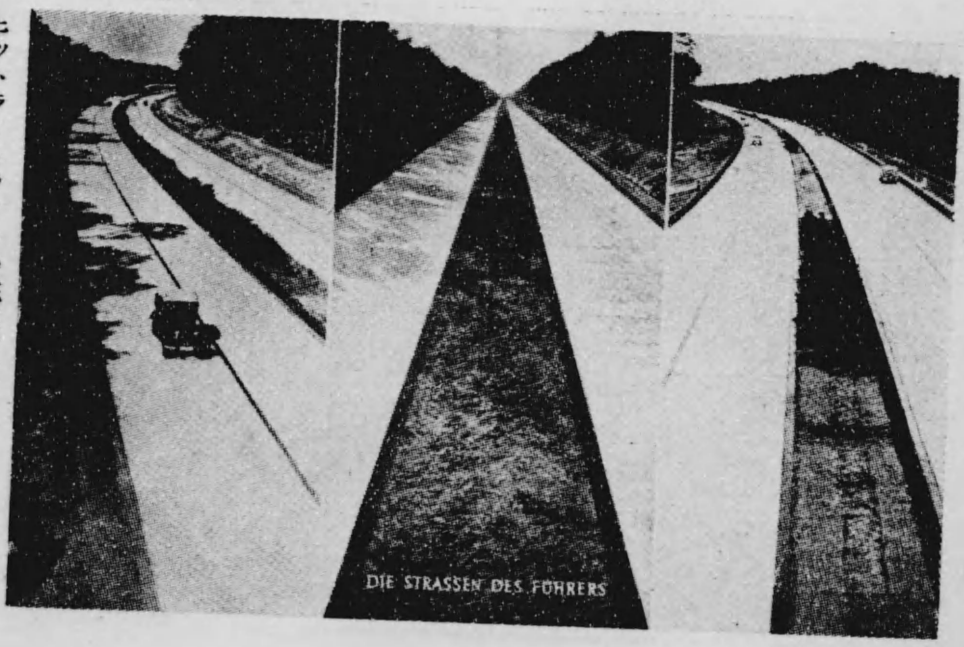
一、ドイツを語る寫眞帳

——この寫眞集はヒツトラーの政策の實行狀態を寫眞及びそれに依る構成によつて說明しようとする意圖のもとに計畫された「ドイツチエランド」といふ寫眞報告書より拔萃したるものである——

六百萬の失業者をヒツトラー總統は如何に活用したか。總統の失業救濟策の一つとして、ヒツトラー・ライン（道路）の完成がある。



ヒットラー・ラインの建設工事。下部の煉瓦の積重ね方は、その基礎工事の進捗を示し、背景の民衆は「パンと職を與へよ」を高唱し、それは過去の人間を暗示し、工事の建設的な畫面に有機的に結び付いてゐる。



ヒットラー・ラインの完成。道路のもつ近代的な機能性が充分説明されてゐる。今次大戰に於ける電擊作戰の主要な武器はこの道路であつたことは容易に理解出來ようと

ドイツ經濟の再建に寄與する機能的な建築。ヒットラー總統が建築の機能に重大な關心を寄せてゐることは、彼の政治家としての偉大さを物語るに充分である。

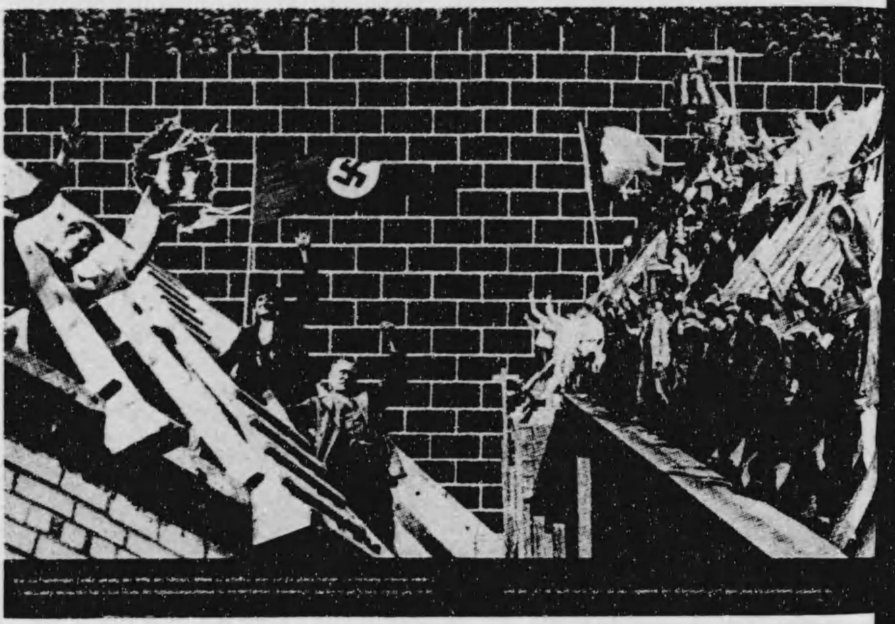
ソビエートに於て勞働力の增進を計る方法として個人勞働量の大小によつて精勵章を施行した。これを名付けてスタハノーフ運動と稱するがドイツに於ても略これに近い運動を制定した。選ばれた鑛山勞働者と工場のモンターヂユ。

の人間を暗示し、工事の建設的な畫面に有機的に結び付いて居る。

電擊作戰の主要な武器はこの道路であつたことは容易に理解ができやうとおもふ。

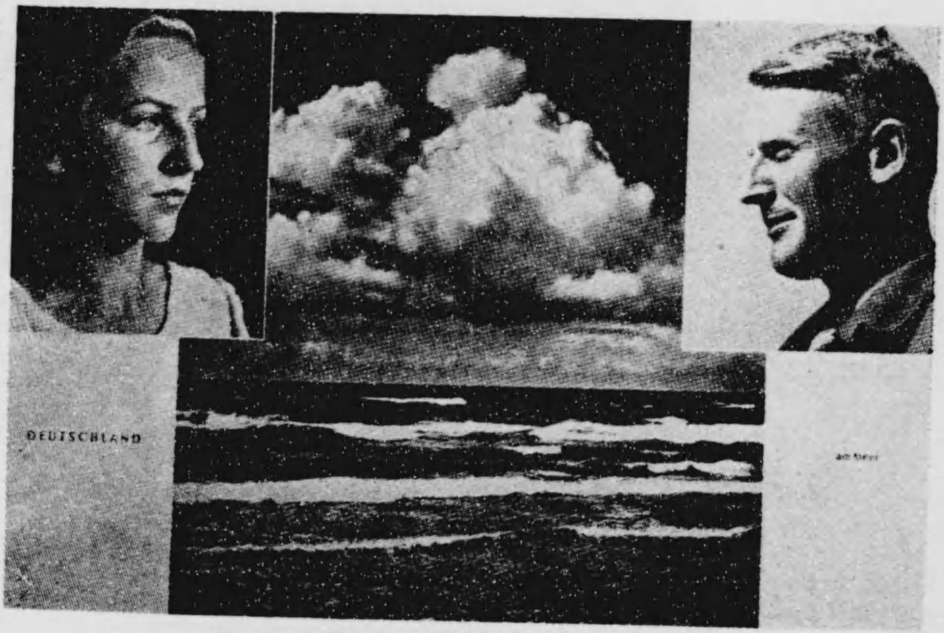
重工業に於けるもの。各種産業別にこの種のモンターヂュがある。

穀物害蟲檢査狀況に於けるモンターヂュ



建設工事は完成に近づき、國内の失業者はその數をも減じ、それに比例して勞働力は旺盛となつたこの作品のもつ説明的な要素には贅嘆を感じない譯にはゆかない。

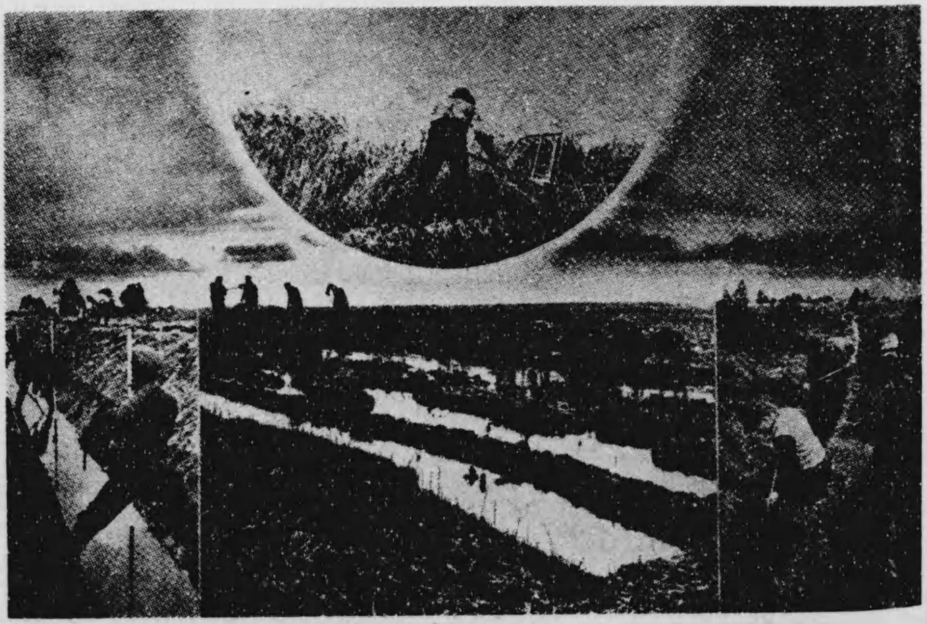
ドイツには歡喜力行團（K・D・F）と稱する團體があつて各分野にある勞働者たちが彼等の技術を動員して船やボートを作つて休暇中の慰安旅行をする。K・D・Fの政策は彼等に働きつつ樂しむことを教へてゐる。これは人間生活に一番ピッタリとした生産的生活であるあらゆる部門の勞働者たちが一つの氣持になつて遊ぶ狀態である。



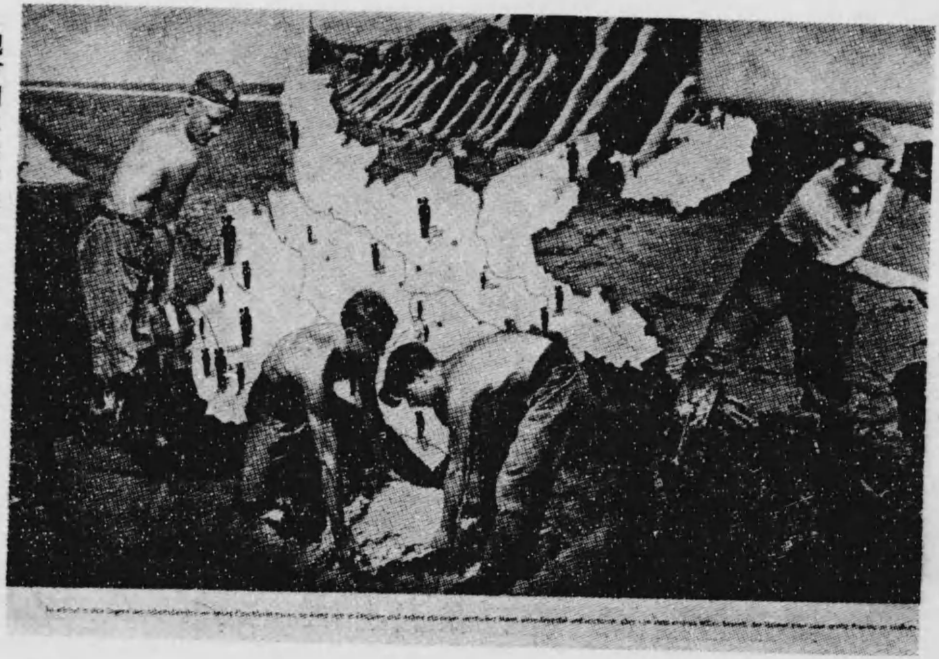
海へ。詩を感ずるレイアウトである。このやうなレイアウトはソビエートには見出せない。K・D・下の海岸班。

ヒットラー青少年團。黨旗は新しい時代を象徴する。寫眞素材と構成力の豊かさに一驚される。

ヒットラー少女團の團欒ぶり。



アルバイト・デーンスト農作奉仕を説明するレイアウト。



地方別に農耕奉仕作業の狀況を說明したもの。統計圖と寫眞との調和したモンターヂュ。

突擊隊員の閱兵式。寫眞と構成の合き協力。

ドイツ國防軍の起立。寫眞のもつ力强さを物語つてゐる。

ナチスを構成する制服の說明。左から少年團員勤勞奉仕隊員、突擊隊員、國防軍兵士。

ドイツの全國民はナチスドイツの旗の前に忠誠を誓ふ老ひも若きも貧富を問はず、國旗の前には一つである全體主義國家ドイツの象徴。このモンタヂユは素晴しい好結果をもつて迫る。旗のみ赤と黒のダブルトーンで印刷せられ三頁をもつて壓倒的な好果を與へてゐる。

二、歐洲大戰とヒットラー・ユーゲント

オランダ、ベルギーの進擊に當つてヒットラー總統は「この進擊は國家千年の運命を賭すものである」と喝破したが、ノルウエーの攻略といひ、マヂノ戰線に展開されんとする世紀の一大決戰といひヨーロッパは、今後少くとも百年を支配する歷史が塗り變へられんとする瞬間に立つてゐる。

しかし、この驚嘆すべき歷史的瞬間は、今次大戰中に忽然ヒットラー總統の手に握られたものでなく、これこそ實に第一次大戰において「ドイツが大敗したのは經濟的原因にあるのでなく、民族意識の喪失にある」となし、ナチス主義の高き理想を揭げ、さらに「青年を支配するものは未來を支配する」といふ先哲の敎訓に從ひ、第一次大戰の砲煙のいまだ消えやらぬ一九二一年、早くも國內體制の革新新を叫ぶとともに、青少年團の結成に着目し、ドイツ軍隊の背後に七百萬の强固な豫備軍ともいふべきヒットラー青年團を準備したことは、今日の輝かしい戰果を獲得せる重大な素因であつたとみねばならぬ。

すなはち、ヒットラー總統の青少年問題に對する根本方策の樹立こそ、今次大戰の赫々たる武勳をかち得た最も大きな礎石としての役割を果してゐることは明白な事實であつた。

東亞新秩序の建設といふ偉業を擔當するわが國の內外ともに重大な時局に直面して、國家が男女青少年の精神力と活動力とに俟つところは大なるものがあり特に次代を擔當する少年少女の肉體と精神と情操の鍛錬は國家百年の大計の地固めであつて、決して等閑に附すべきではない。

かの少年少女日參團ならびにその指導者が、青少年問題に對する正しい認識に立つて、皇軍將兵の武運長久の日參祈願の裡に強い強い愛國の精神を植ゑつけ、新東亞をうけつぐ「人」を育成しつゝあるを想起するとき、實に國家を永遠に泰山の安きに置かんとする隱れた眞の愛國的大事業であると賞讃すべきである。

今日の日本は知識の不足や物資の缺乏を憂ふの必要はない。憂ふべきものありとすれば意思力と決斷力の不足である。つめ込主義の、また徒らに批判倒れとなつた實行力の全く缺如した男女青少年に對する從來の教育觀を是正し、國民としての義務と使命を遂行するに足る信念と精神力及び肉體力を養成する事は少年少女の教育に關心を有するものゝ最も重大な任務であらねばならぬ。

先年ヒットラー・ユーゲントが來朝した時日本における最も強い印象は名古屋地方でゆくりなくも目擊した可憐な少年少女が武運長久の旗を押し立てて、神社へと行進する日參團の健氣な姿であつたといはれ、これこそ祖國ドイツへの最上の土產であるといつて感激したといふが、名古屋市並びに愛

知縣を中心として、各地に結成された日參團が、今日までなしつづけてきた隱れた功績に對して、これが正しく理解され、認識されるところの餘りにも尠いのは、少年少女問題に對して重大な關心をもつ者にとつては極めて遺憾なことである。

名古屋新聞は既に「こどもの新聞」を夕刊に掲載して、少年少女問題に對する積極的な關心を示してゐるが、支那新政府も樹立され新東亞の黎明をつげる最も記念すべき時期に際會し、長く少年少女の腦裡にこれを銘記せしめるために、また廣く銃後國民に對し少年少女の薫育問題に對する關心を呼び起さんがために、しかして男女青少年の國家における極めて重要なる地位を認識せしめ、さらにその指導者達の日夜を分たず勞苦を惜しまぬ愛國的、献身的篤行に對して、いさゝか感謝の意を表するために名古屋城北練兵場で支那新政府樹立記念の中央日本少年少女日參團大會を擧行せんとするものである——云々。

以上は、同大會開催に當つて私が書いた趣意書の大要であるが、さらに深く日參團そのものを再檢討するならば、愛國の赤誠において、敬神の念において、すなはち日參團の精神的內容においては、かのヒットラー・ユーゲントの指導精神にまさるとも劣らぬものであるが、その組織的訓練において、また統制あるその機構と構成においては、いまだ彼に及ばざること遙に遠いものがある。

日參團の各指導者の熱誠によつて、こゝまで育成されてきたわが愛國的青少年團運動を、この事變の終了とともに、斷じて消滅させてはならぬ。われ〳〵は、この愛國的青少年團運動を、全國的規模において、そして、より高度な組織と統制と訓練あるものとして、あくまで育成せしめねばならない。

ノルウエーの攻略に、オランダ、ベルギーの進擊に電擊戰を展開し、歐洲の天地を震撼せしめつゝあるドイツ軍の强みは、軍隊の背後になほ七百萬のヒツトラー青少年團が控へてゐることである。

ヒツトラー總統が、一九二一年眞劍に魂を打ち込んだ青少年團はヒツトラー・ユーゲントといふ名稱こそ持たなかつたが、ナチス黨の發祥地南獨ニユールンベルグ市で「祖國團」といふ名稱でまづ誕生した。

これは當時のナチス黨員を父兄に持つ少年達が組織したもので、その指導者は僅かに十四歲の一少年であり、まだ具體的な內容をもつ運動となり得なかつた。

一九二三年、マルフフエルトにはじめて第一回ナチス黨大會が開かれ、それには多數のナチス青少年が參加し、ヒツトラー黨首の閱兵を受けたが、それは突擊隊及び親衞隊にまじつて行進をしたに過ぎなかつた。その年ヒツトラー黨首のクーデター失敗から黨は禁止解散を命ぜられ、從つて青少年團も自然解散の運命に逢着した。

其後一九二六年に至り、新に第一回の全國大會がワイマーで開催された時、はじめて現代の「ヒットラー青少年團」が誕生した。この名稱の名附親はクルト・グルーバーといふ當時國家試驗に及第したばかりの青年で、彼が試補として勤務してゐたザクセン州、ブラウエン市でナチス青少年團を組織し、これに「ヒットラー・ユーゲント」といふ名稱を與へたことにはじまる。ヒットラー黨首は、このグルーバーをヒットラー・ユーゲントの最初の指導者に命じ、こゝにユーゲント・ヒューラーなるものが生れた。

一九二八年にはバードシュテーベンで、最初のヒットラー青少年團大會が開催され、一九二九年のニュールンベルグにおけるナチス黨大會では、二千名のヒットラー青少年團が、グルーバーを先頭にして大行進をした。

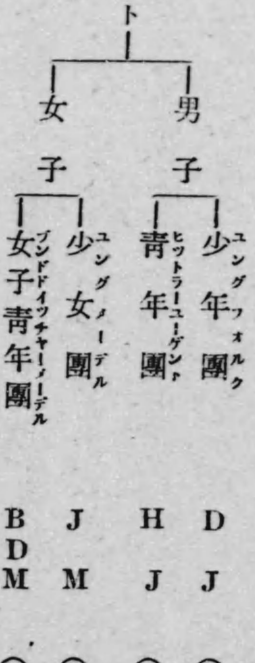
その後、一九三一年、ブリューニング內閣時代にナチス突擊隊の解散命令とともに、ヒットラー青少年團も解散を命ぜられ、ヒットラー青少年團の苦難時代が訪れた。

かゝる苦難の一ケ年後、一九三二年ブリューニング內閣に代つて再びパーベン內閣が成立した時、シーラッハ氏はヒットラー青少年團禁止後、最初の大會をベルリン近郊のポツダムで擧行したが、當初の七萬五千といふ豫期に反して、十萬人の團員が參集し、非常な成功を收め、ヒットラー黨首が大

統領ヒンデンブルグ元帥から組閣の大命を受けたのは、その翌年の一九三三年一月三十日のことであつた。

組織と構成

今日七百萬のドイツ青年を抱擁するヒットラー・ユーゲントの編成は、滿十歳から十四歳までの少年による獨逸少年團（ユングフォルク）と滿十四歳から十八歳までのヒットラー青年團（ユーゲント）、滿十歳から十四歳までの少女によつて編成されてゐる獨逸少女團（ユングメーデル）、十四歳から二十一歳までの女子青年からなる獨逸女子青年團（ブンドドイツチヤーメーデル）の四團體からなつてゐる。



そして獨逸少年團は今日ドイツ全少年の九十八％を占めてゐるのであるから、およそ十歳から十四歳までの少年は、殆どこの少年團員といつて差支へない。滿十歳になつて、四月二十四日ヒットラー

總統生誕日を入團日ときめられてをり、團員は年齡に應じ、遊戯、スポーツなどが重點に置かれて活動する。この團員は特にピンプといつて約十人のピンプからなるユンゲンシヤフト、約四十人からなるユングツーク、約百六十人からなるフエーンライン、約六百人からなるスタム、約三千人からなるユングバン、さらに約十五萬人からなるゲビートなど、分隊、小隊、中隊、大隊といつたやうに軍隊的に組織されてゐるわけである。

ヒットラー青年團は十五歳に達した少年團員が編入され、この青年團で無我の精神や、盟友の精神を養つて後、十九歳となると勞働奉仕團に入團して、共同勞働によつてさらにドイツ精神の涵養に邁進する。

このヒットラー青年團も軍隊式に六つの單位からなつてをり、約十人の青年團員からなるカメラード・シヤフト、四十人からなるシヤール、百六十人からなるゲフオルク・シヤフト、六百人からなるウンターバン、約三千人からなるバン、約十五萬人からなるゲビート等に編成されてゐる。ドイツ女子青年團の中で、ドイツ少年團に相當するものはドイツ少女團で、十歳から十四歳までの少女が團員となつてをり、ドイツ女子青年團はヒットラー青年團に對應するもので、ドイツ國民の母たる女子訓練に大なる關心が拂はれてゐる證左として、二十一歳以上になるとエヌ・エス・フラウエン・シヤフ

ト（ドイツ國民社會主義婦人團）に入團することになつてをり、いづれも男子同樣な軍隊的組織に編成されてゐる。

嚴格なる規律

この規律正しい編成と組織のもとに、ヒットラー總統は、まづ在來の教育方針に對して四つの大改革を行つた。

その第一は詰込み主義の教育の弊害打破である。すなはち、ナチス政權確立前のドイツ普通教育はその教材があまりにも多岐にわたり、必要と不必要の見境なく、雜然と無理矢理に教へこまれた結果肉體的訓練は顧みられず、しかも夥しい時間がこれに浪費された。例へば歷史の教授は細かな年代とか、人名だとか、末梢的な問題にこだはつて、歷史の中に流れる大きな動きを閑却してゐた。ヒットラー總統の見解によれば、歷史は單に過去に何が起つたかを知るのが目的でなく、國民の將來の教訓を得るのが目的であるから、その教材を簡單にし、歷史的進展の大きな輪廓を教へることに重點をおくべしといふのである。

その第二は教育の技術化を排し、理想主義を昂揚したことである。そのために普通教育の重點を歷

史教育におき、特に古代史の研究を肝要とした。ローマ史は現代ばかりでなく、あらゆる時代にとつて教訓的であり、ギリシヤ民族の文化的理想はそのまゝ現代國家の模範として足るといふのである。

その第三は、民族的誇りを皷舞することに重點を置いた。こゝに一人の發明家を例にとつてみても單なく發明家としてでなく、同胞なるが故に偉大であるといふやうに說明しなければならぬ。かゝる見地から學校の教材は計畫的に構成され、青年が學校を出る時には、一個の完成されたドイツ國民として卒業していくように組織的に教育することが肝要だとされてゐる。

第四は、青年の天賦の才能の伸揚である、およそ貧乏なるが故に、その天賦の才能を伸し得ぬことはナチスの世界觀よりして默認することはできない。ナチスは、いかなる階級の出身者であらうともその才能ある者は、それ〴〵國立の上級學校に入學せしめて、これに社會の指導的地位を與へることにした。そして從來の知識階級に、絕えず下層大衆からの新鮮な血液を注入して、知識階級の更新をはかると同時に、下層階級と知識階級との溝渠を芟除することをナチス教育機關の最大の使命としたのである。

ヒットラー青少年團は、指導者養成の問題を特に重要視した。指導者の適否如何は、直に青少年教育の成否如何を決定するからである。

だから、ドイツ青少年指導廳はヒットラー青少年團指導者學校を特設したのである。そして「どんな小さな子供にも、まづ責任をもたせよ。そしてその子供に彼の遊び友達七、八人の者の全責任を負はせ、講習なり、キャンプなりをやれといひつけたら、その子供はきつと喜んで全責任をもつてはたらくだらう。それだけでも立派な人間修業ができる」と「責任と創意性」の指導原理を指導者達の教育の根本方針とした。尙、ここに少年團勤務に關する細則を簡單に紹介しよう。

會館の夕‖所要時間二時間を超ゆることを得ず。午後遲く開催された場合は、午後七時以前に閉會さるゝものとす。

旅行‖組四十人以上の團體を以て旅行を行ふ場合には、その參加少年の年齡も甚だ異るものなるが故に斯の如き場合は四列縱隊の年少少年團員を先頭に立てゝ行進を行ふものとす。先頭縱隊および後續縱隊の間隔は最短三メートルとす。後續縱隊第一列はこの間隔確保に對し責任を有す。各隊の後尾に隊長に命ぜられたる指導者一名を附し、隊の整頓に關する責任を有し、かつ疲勞の發生、もしくは衰弱現象を適時に隊長に報告する義務あり。

行進行程‖十歲および十一歲の少年團員の行進速度は、一日當り行進行程十キロを超ゆることを得ず。十二歲乃至十四歲の少年團員は、一日當り十五キロを超ゆることを得ず（ドイツ少年團優秀章を得

るに必要なる行進行程は二十キロなるも特に十五キロまで引下げを行ふことを得）

行進速度＝十歳および十一歳の少年團員の行進速度は一時間當り四十キロを超ゆるべからず。十二歳乃至十四歳の少年團員においては一時間當り四・五キロを超ゆることを得ず。

休憩時間＝一時間の行進の後には最小限十五分間の休憩時間を與ふること、その間、遊戯あるひは授業に當てることを禁ず。

宿泊＝十歳および十一歳の少年團員の天幕夜營は原則としてこれを禁ず。但し青年宿泊所において宿泊することが可能なる場合には、數日間にわたる宿泊旅行を行ふことを得。十二歳乃至十四歳の少年團は（イ）乾燥せる野營地の確定せる場合（ロ）必要なる藁が十分準備しうる場合においてのみ數日にわたる宿泊旅行に參加することを得（十二人用天幕に必要なる藁の重量は百ポンド乃至百五十ポンドである）

わが日參團の學ぶべき點は何か？

ヒットラー青少年團も、現在の日參團少年少女隊の如く、自然發生的な一種の私設團體であつたがヒットラー青少年團と、わが國の少年少女日參團との相違は、彼が發生の當初ナチス黨の支持と支配

下に成長した一種の政治的團體であり、青少年兵團なるに反し、わが國のそれは全く皇軍の武運長久を祈りつゝある敬神思想と團體觀念を涵養せしめんとする純粹の精神的な、愛國的な動機から出發し誕生したところにある。しかし、少年少女日參團が、もしもこのまゝ高き理想的原理と指導精神の理論を打ち建てず、また社會とその兩親から眞實な信頼をかち得るために、少年少女の肉體と精神と情操に適應する嚴格な規律と訓練とについて研究し、それを實行することを怠るならば、指導者が折角今日までその犧牲的精神と不屈な努力で育成してきたこの貴重な團體が、次第に影うすきものとならないとも限らない。これは既に心ある日參團幹部諸氏の自覺されつゝあるところである。

少年少女ならびにその兩親たちの信頼と興味とをつなぐには一定の指導原理が必要であり子供らをほんたうに喜ばしめる自主的な訓練と、また適度の娯樂的興味と、明朗な遊戯や規律がなければならない。勿論かかる設備や訓練をするために相當な資金も必要であらうが、それにも增して必要なことは、少年少女團指導者の養成である。指導者の適否如何が、青少年團の教育の成否如何を決定する鍵であるとして、ヒットラー總統やシラッハ博士が指導者の養成に最も眞劍に考慮を拂つたやうに、われ〳〵も、この問題—指導者養成—を、もつと根本的に考へなほす必要があり、いつまでも町內の篤志家の犧牲的精神のみに委ねてゐるべきではない。

（昭和十五年五月記）

三、國防スポーツの現狀

——獨・ソの武裝せるスポーツ——

ドイツの電擊的武力の前にもろくも破れたフランスが、高度に武裝せる國防國家としての體制確立を忘れてゐたために、あの悲慘な敗北を喫したることは、今日すでに明白なる事實で、武力を伴はぬ經濟體制なるもの——自由主義的經濟機構——は總力的全體戰に於ては、寧ろ第二義的な役割しか果し得ない。即ち、黃金も資源も經濟體制も、對等の實力を持つた長期戰でない限り、從つてドイツの如き高度に武裝せる國防國家の電擊的武力の前には、殆んど無力に近いものなることが實證されたわけである。

高度國防國家の眞髓は、要するに國家を軍事的機械に轉化するところの一種の「スパルタ主義」であり、單に戰爭に對して自己を保障するといふことではなくして、戰爭能力を常に準備し創造するといふことにある。從つて、かゝる國防國家にあつては、スポーツもまた當然武裝され、國防スポーツへと變形されねばならない。かくて、ドイツ、イタリー、ソ聯の如き國防國家にあつてはスポーツも重大なる國防的要素として取りあげられ、その武裝化が要求される。

ナチス・ドイツにあつては、スポーツと體育とは、小學校より大學に至るまでの、あらゆる學校に於て、正科目として十分教育せらるゝのみならず、ヒットラー・ユーゲント並に勞働奉仕團によつて同樣の目的のために使用されてゐるのであり、スポーツと體育とは、青少年の身體を强健ならしめるを以て目的とするばかりでなく、軍隊教育の基礎を築くことが目的となされてゐる。

ドイツのヒットラー・ユーゲントが滿十歲より十八歲までの男女青少年七百萬を擁し、これに軍事教練と國防スポーツを訓練しており、滿十九歲より二十五歲までの青年四十萬を正規の軍隊的訓練の豫備期間として强制的に勞働奉仕團に加入せしめ、これ亦同樣に軍隊教練が行はれてゐる。そしてヒットラー・ユーゲントの十六歲以下の少年には空氣銃、十七歲以上の少年には小口徑の銃が渡され、七千人の教師に依つて射擊の訓練が行はれ、この小銃訓練をうけた青少年は、一九三七年までに百二十萬人あり、ヒットラー海洋青少年團と稱する水兵訓練をうけたもの四萬五千人、ヒットラー青少年團自動車隊は六萬人の團員數を有し、ドイツ少年團の五萬五千名は飛行訓練の準備教育としてグライダーの練習を行つておる。また七萬四千人のヒットラー青少年團員が飛行部で訓練を受けてゐる。そして、そのうち一萬五千人がグライダー單獨滑空免狀を一九三七年中に授與されてゐる。

また一方ナチス黨員によつて、一九三三年結成されたるドイツ航空スポーツ聯盟員は、六十萬を突

破し三七年度のナチス飛行團員は三百萬を數へ、この中五萬人が現在練習に從ひ飛行練習場六、グライダー練習場二十二、飛行機四百臺、グライダー五千臺を有してゐる。

ソ聯に「勤勞と國防への準備」（ゲー・テー・オー）運動が始められたのは九年前のことで、これはヒットラー・ユーゲントが走行、跳躍、腕の運動、水泳、運動種目を撰んだと殆んど同じ樣に臂力、勇氣忍耐、速力、正確性等を涵養する運動種目が選擇され、これを適當に組合せた階梯に合格したものにスポーツマンとしての榮譽を與へてゐたが、ソ聯も最近の國際情勢、特にドイツのスポーツ武裝化に刺激せられて、國防を目的とする運動競技をソ聯體育組織の根本をなすように變更し、一九四〇年の一月一日から大改正せられたる「ゲー・テー・オー」運動を實施し驚くべき躍進を示しつゝある。

それは從來の「ゲー・テー・オー」の階梯に入つてゐなかつた。

フェンシング　乘馬　射擊　自動車

障碍通過　グライダー　落下傘降下　モーター・サイクル

操縱等の國防スポーツが包合され、現在このゲー・テー・オー有資格者は全國を通じて六百六十萬あるが、この青少年は丁度第一次大戰後の內亂と大飢饉當時に生れたもので、その體位劣弱なものが多く、スターリンは躍氣になつて、その體育の向上を計ると共にドイツと同樣女子の體育にも傾注し、

男子同樣有事の場合に、第一線に動員し得る强健な肉體と訓練を施し、國際情勢のいかなる變化にも十分なる準備をしつゝある。

ヒットラーは一九三五年のナチス黨大會に於て、ヒットラー青少年團及びドイツ女子青少年團に行つた演說に於て「吾がドイツ國民の中でも亦、理想の男と云ふものは常に同じではなかつた。かなり古い昔で、又吾等には殆んど理解しがたいタイプではあるが、ドイツ青年の理想が所謂斗酒尙辭せざる大言壯語青年であつた時代もある。處が現在では吾等は最早斗酒尙辭せず式の大言壯語をする青年等ではなくして、不撓不屈の青年、堅固な青年をば喜びの眼で迎へるのである。何故ならば、吾等にとつて大切なのは、何盃のビールが飯めると云ふ事でなくて、どれほどの困難に耐へ得るかと云ふ事であり、幾晩續けて夜遊びが出來るかと云ふ事ではなくて、幾キロの行進に耐へ得るかといふ事であるからである、吾等は現在では最早嘗つての酒呑市民を吾等ドイツ國民の理想型として認めない。吾等の理想は心底から健康にして嚴格なる青年少女である。

吾等がドイツ青少年、少女に要求する處のものは過去に於けるそれとは幾分異なる。吾等の眼に映ずべき將來のドイツ青少年、少女は優美でスラリとして獵犬の如く敏活、鞣革の如く强靱、鋼鐵の如く强固であらねばならぬ。吾等は新らしい人間を教育し上げねばならぬ。かくする事に依つて吾等國

民が現世の廢頽的現象に依つて沒落する事を防がねばならぬ」と叫んだ。

ドイツの青少年達はヒットラーのこの叫びに應じて起ち上つた。ドイツ青年の信念は祖國の崩潰を目前に見て、その破滅の反覆を防ぐために、一切を犧牲に供することを欲しないやうな人間は、ドイツ精神に對する冒瀆者である、といふにあつた。

ペタン首相は、その悲痛なるフランス敗北の宣言に於て、社會政策の第一に青年問題を指摘したが、ドイツの青年が思想に於て肉體に於て若々しく、精力的能動的なるに反し、敗戰國フランスの青年達は餘りに倦怠し、不活潑で受動的で、戰ひを嫌忌する國民であつた。ドイツが新しいナチス精神に依つて鍛錬され、第三帝國創造の理想に燃ゆるに對し、後者はニヒリズム的無關心に沈湎し、戰爭の友愛と自己犧牲によつてむしろ新なる世界秩序が建設せられるといふことに氣が付かなかつたのである

かくて、未完成な國防國家フランスは既に破れた。だが、この敗戰フランスの中に教訓を攝取しなければならぬのは豈ひとりペタン首相のみではない。

皇軍の連戰連勝はさることながら、白衣勇士の歩む銃後の街頭に、次代を背負はねばならない青年學生達の一部には、いまだ時局の重大さを認識しない醉態狂氣の世相が斷じてないとはいえない。

われわれは國家の興亡と民族の浮沈を前にする重大なる時局に直面しつゝあるのだ。われわれは一

日も早く高度國防國家を建設しなければならない。そのために青少年のスポーツもまた國防化され武裝されねばならぬ。そして、青少年の一人をも餘さず國防化された健全なスポーツに動員され戰鬪的にして優秀なる國防國民とならねばならない。祖國と民族の自衞——東亞新秩序の建設——こそ我等に課せられたる最高の道德的義務であり、從つてこれを守るための仕事こそ、正しく又最も緊要な事業である。この意味に於て吾々も亦スポーツの國防化のために協力しなければならない。

（昭和十五年八月記）

四、オリンピア映畫とドイツ・スポーツ政策

映畫ファンは勿論、汎く知識階級層に待望されつゝあるオリンピア映畫「民族の祭典」が、愈々日本に於ても上映されることに決定された。

「民族の祭典」はドイツ映畫史のみならず、世界映畫史上、空前の規模に於て撮影された一種の藝術記錄映畫があつて、かつてアーノルド・フアンク博士が「聖山」を作るに當り主役女優として名演技を見せたレーニ・リフエンシユタール女史が總指揮並びに藝術的構成に當つてゐる。リーフエンシユタールは人も知る如く當初女優として映畫界に登場し、やがて自ら監督、主演した「青の光」に於て始めて女流監督となり、一九三四年のニユールンベルグのナチス黨大會の記錄映畫の總指揮の大役を見事はたした「信念の勝利」と題されたナチス黨大會の記錄映畫によつて、全獨乙國民を感激させ、更にこの「民族の祭典」と題名せるオリンピア映畫は、世界各國民——世界の全民族を感激せしめ、一躍名監督として又世界映畫界の女王として君臨するに至つた。

リーフエンシユタールの「オリンピア」映畫に於ける仕事は、單にこの「民族の祭典」の制作に依つて終つたのでなく、この映畫の完成後も一九四〇年初頭まで續けられた。それはスポーツ文化映畫

の製作、スポーツ醫學へ貢獻する醫學映畫、或はあらゆるスポーツの映畫による記錄と、そのライブラリーの整理などを含む仕事で、この間實に四ケ年に亘り女史は百二十萬フィートのネガとラッシュとサウンド・プリントの中で苦心の仕事が續けられたのであつた。故にリーフエンシュタールの仕事の成果は、過去に於けるドイツ映畫の扱つたスポーツ映畫を凌く傑作に成功したといふことばかりでなく、一時は無謀とさへ罵られたスポーツのあらゆる角度よりの研究と集大成の大事業を完成したのであつた。因にリーフエンシュタールを總裁とするオリンピア映畫社は、本年春より既に他の映畫製作に乘り出しつゝあつたが、突如今次大戰の勃發するに當つてヒツラーより戰爭記錄映畫の製作を命ぜられ、今戰塵にまみれて活躍中なりと聞くが、恐らく、戰爭記錄映畫に於ても、世界映畫界を再び驚嘆せしめる傑作を生むであらうと期待されつゝある。

「オリンピア」第一部「民族の祭典」は、まづ古代ギリシヤの遺跡を侈動する美しい場面から始まる。ドイツがベルリン・オリンピツク大會を開催するに當り、古代ギリシヤ精神——ヘレニズム——の近代的復活といふことに重大な關心を拂つた。肉體と精神の完全なる調和に人間最高の美を思出しこの美の追求を近代スポーツの理想として、しかも同時にスポーツを通じて民族性の昂揚を圖らんとするのがドイツのオリンピツク及びスポーツに對する態度であつた。

本文に於ける筆者の目的は「民族の祭典」の映畫紹介ではなく、本映畫を通じてなす、ドイツのスポーツ政策の探求であるが、一通り本映畫の內容をここに紹明しておこう。

同映畫は「古代オリンピアの遺跡」

「オリンピアの復活」

「聖火リレー」

「開會式」

「競技開始」

に始まり、次の順序で競技は展開される。男子圓盤投、女子圓盤投、女子八十米障碍、鐵鎚投、女子走高跳、砲丸投、八百米、三段跳、走巾跳、千五百米、走高跳、高障碍、槍投、一萬米、棒高跳、女子四百米繼走、男子四百米繼走、千六百繼走、マラソン等十九種目に分れてゐる。

本映畫は、製作意圖の高さからも、撮影規模の大きさからも、又すべての技術の點に於ても、あらゆる過去の記錄映畫を凌駕するものであるが、「オリンピア」映畫には更に一つの誇るべきものを持つてゐることを忘れてはならない。それはヘルバート・ヴィントが「オリンピア」のために作曲し、編曲した音樂である。ヘルバート・ヴィントはウフアの文化映畫の中に彼が音樂を擔當してゐたが、

新しいところでは「最後の一兵まで」や「ポーランド進撃」といふ戰爭ドキュメンタリがある。尙リーフエンシュタールとは既に「意志の勝利」「信念の勝利」のナチス二大國策映畫より名コンビといはれており、音樂に無理解なる筆者の如きですら「民族の祭典」の全篇を通じて流れるスポーツの尊嚴美、律動を常に表現して餘さぬ、カメラの美しさ、的確さ、と共に、この映畫を最大限に生かす實に力學的(ダイナミック)な力强い音樂に壓倒され勝ちであつた。

ドイツ映畫が、民族的な特殊性への傾向を辿り始めたのは、實に歐洲第一次大戰當時であつたが、ドイツ映畫がナチスの支配下に編入されたものは、ウーフアの資本的代表者たるフーゲンベルクが當時の藏相として入閣してからであり、フーゲンベルクとの同盟は、彼が映畫新聞界の大立物であつたといふ政治的目的のもとに行はれたのであつた。ドイツ映畫は一時ナチスの統制の故に、藝術の優秀さを窒息さるものといはれ、政治的實用的意識にあまりに急であるとも罵られてゐたが、この汚名は最近の數々の傑作によつて完全にぬぐひ去られてしまつた。ここにも全體主義的映畫政策の勝利がある。

さて、オリンピア映畫の制作の意圖と目的は、先に述べた如きスポーツを通じて民族性の昂揚を圖らんとするにあるが、ヒツトラーのスポーツ政策こそ、まさにこの一點にあり、オリンピア映畫制作

の企劃こそ、民族意識を昂揚すると共に、他面に於て新興第三帝國の文化的躍進の姿を宣傳するものに外ならない。

ナチスの體育觀に從へば、精神と肉體の善き調和は勿論必要である、故に單なる肉體自身のみの訓練を目指してゐるのではなく、嚴しい肉體訓練は常にナチス世界觀に立つ精神的理論的訓育と結合されてゐる。ここに古代ギリシヤのオリンピア精神の復活があるのだ。本映畫の臂頭にオリンピアの遺跡が尋ねられるのも決して故なきことではない。

さて、ヒットラーのスポーツ政策と體育觀に依れば、體育なるものは少數のものゝ記錄の向上のために行はるべきか、或は廣汎の人間の體位向上の目的に行はれるか、の問題は屢々論議の的となる事であるが、その答は誠に簡單である。何故ならば、優秀な記錄は、多くの人間の體育向上が實現せられて始めてあり得るものであり、一般の體位の向上は、少數の者の優秀なる記錄に依り指導され、鼓舞されるもので、兩者は相反するものではなく、全く相關的なものである。只絕對に排せられるべき事は、一般の者は只センセーションと神經の昂奮とを呼び起す樣な、恰もサーカスの曲藝の如きレコードを作るための運動である。これ程オリンピック大會の精神と違反したものはない、といふのである。

即ちオリンピックの記錄を出すことに、國民全體の意志と努力とを表現するための催しである。ス

ポーツの發達せるドイツに於ても、スポーツはまだ國民全體のものといふことは出來ぬ。極く少數の人達のものであり、只記錄に興味を有する若人達の專有物であるに過ぎない。從つてヒットラーの青少年團の運動に對する指導方針は、これらの特定の人達以外のものに正しいスポーツを認識せしめ、實行せしめんとすることに主眼が置かれてゐる。故にスポーツの成果に對して最も重要な事は、各人が各人の身體から要求し得る最高最大の成績を擧げ得たといふことであつて、總ての者に一樣に最高のレコドに達せよといふことではない。ナチス・ドイツは、以上を基礎とし運動の試驗を行ひ、之に及第したるものにはスポーツ優秀章突擊隊スポーツ優秀章、ヒットラー青少年優秀章等が與へられ、各人の體力を表彰する制度が設けられてゐる。

學校に於ける必修課目として「體育」は課せられてゐるが、そのスポーツの種目は、走行、跳躍、腕の運動(投擲)、水泳の四種目が最も重要なるものとして選擇せられ、筋肉、心臟、又肺臟を强健にすると共に皮膚の强健といふことが主眼に置かれてゐる。そして又以上の如きスポーツこそ、軍事教練に最も適當せる運動であると見られてゐる。例へば、走行に關して兵士は如何なる程度の成績を擧げねばならぬか? 先づ第一は百メートル競爭である。これは步兵の訓練上最も必要な練習である。又投擲(腕の運動)は、手榴彈の操作の場合の訓練にも缺く能はざるものである。要するに强健、迅速

制御、耐久力ある肉體を形造ると云ふ事は軍隊教練の根本越旨と全く一致する、即ちナチスのスポーツと體育とは、單に青年の身體を强健ならしむるを以て目的とするのみならず、それに依り眞のナチ精神を養はしめ軍隊教育の基礎を築くことを目的とするのである。

かくて、ドイツはスポーツ及び體育の組織に關しても全體主義を採らんことを要求したのであり、ギリシヤのオリンピアの昔にかへり、再び肉體を重んずる時代が來たのである。その理想とするところは肉體と精神との調和を完全に所有する者こそ、新らしい時代の使命を認識し、且つ、それを擔當し得る國民である。且又、青年の優秀なる體位の向上こそ、外敵の攻擊を防禦する城塞ともいふべきで、ヒットラー・ナチスのスポーツ政策の眞髓は、スポーツは最も重要なる國防的要素であるといふのだ。

我々はオリンピア映畫「民族の祭典」を觀賞しつゝ、ナチス・ドイツの映畫政策と共にそのスポーツ政策を觀取することに依つて始めて、二十世紀最大の傑作といはれる本映畫の時代的價値と使命とを始めて完全に認識することが出來るのである。尙、さらに茲に見落してはならぬ重大なる點は「オリンピック」の大會場の施設と大衆動員及びその整理の裡に、今次大戰への準備とテストと企劃とが暗々裡に組織的に計畫されて居り、この計畫の成功を以てドイツはこれを全世界への一種の示威運動（デモンストレーション）となしてゐたといふことである。

（昭和十五年八月記）

五、落下傘部隊の研究

（一）落下傘部隊の起源

パラシュートの發明は文藝復興の天才レオナルド・ダンチによつてなされた、といはれてゐるがパラシュートの發達史は別として、ここでは落下傘が軍用に使用され、さらに落下傘部隊として、空軍中に於ても特殊な獨立的な兵科にまで進歩せる歴史を研究してみることにする。

落下傘が最初の戰爭に使用したのは、第一次世界大戰のときで、北佛に參戰した米國航空隊の指揮官ミチエル大佐であつた。大佐は非常に勇猛な人で、夜陰に乘じて、スパイを飛行機に乘せて、パラシュートを利用して、ドイツ戰線の後方へ降下させた。

ミチエル大佐はこれに思ひつき、大型飛行機に武裝した兵士を乘せて、戰線の後方に降ろしたらどうであらうか。と、パーシング米軍總司令官に提言したが、一笑に附せられて採用されなかつたが、その後も落下傘部隊の必要を力說して、米空軍の姑息な戰略と政策をたへず罵倒してゐたさうであるから、落下傘部隊なるものを最初に着眼したのは、恐らく、このミチエル大佐である、といつても間

違ひはないであらう。

その後米空軍もミチエル大佐の強硬なる意見に動かされ、一九二七年ワシントンの航空演習で小規模な演習を試みたが、失敗に終つたので、ミチエル大佐も失脚を餘儀なくされたが、落下傘部隊の最初の演習として特筆される價値があらう。

一九三〇年、ドイツもアメリカのワシントンにおけるこの演習の話を聞いて、その眞似を試みたが誰も落下傘部隊の効用を信ずるものはなくひどく冷評されてしまつた。

落下傘部隊のこれらの不成功にも拘らず、早くもこれに着目したのは、ソビエート・ロシヤで一九三五年キエフ地方で空軍、機械化兵團、化學兵團などの近代裝備を網羅した演習を行つたが、この時は十臺の飛行機が三百名の武裝步兵を落下傘で降下させ、續く第二の空中戰はデザントによつて占領された地域に約一ケ大隊の步兵を空輸した。觀戰武官を驚かせたが、翌一九三六年の秋九月、この演習の成功したソ聯空軍は、さらに大々的に落下傘部隊の公開演習をなした。

ソ聯はミンスクに於けるその大演習で百臺の飛行機によつて、千二百名のデザント隊、十八門の野砲、百五十挺の機關銃を降下させた。しかし、この時もこれらの銃砲は皆分解され、相當多量の彈藥と共に地上に運ばれたものであつた。

この公開を目擊した各國觀戰武官は飛行機の數を增加すれば、もつと澤山の兵士を目的地點に降着させることができるであらう、ことを想到して、その戰略的効果に戰慄した。

特にソ聯に好意を寄せてゐるフランスの武官は、この新戰術を激賞し、デザント部隊の軍事的價値を絕對的のものとした。

ソ聯軍當局は、この新兵團の存在を世界に誇示して、巨大な飛行機から軍隊を落下傘で降下させる目的は、敵の背面から奇襲するにあり、十分に多くの兵員が降下され得るならば、敵の戰線の背後の計畫を攪亂することが出來るであらう。また空襲時に、大都市の電話電燈、その他の電力に關する一切の施設を破壞するには、僅か少數の落下傘兵を降下させれば足りるであらう。しかし、ソ聯當局もその缺點をも指摘することを忘れなかつた。落下傘をたよりにして地上に降下する兵士達は敵の機關銃の好餌食となる恐れがあるが、しかしこれは幾機かの飛行機の中の一つが薄煙幕をこしらへれば防禦できるに違ひないといつた。けれども、落下傘部隊が奇襲的に着陸するのでなければ、近くの敵の優勢なる軍隊に間もなく擊破されるから敵の陣中の中央に降着しない樣に注意しなければならぬ。とソ聯軍當局の落下傘部隊の研究に於て指摘せるところは一つ一つ當つており、今日もこの點についての缺陷は十分注意されてゐる。

フランスは一九三六年ソ聯から教官を招いてパリ郊外のシャトウ・ルーとアルゼールとに落下傘中隊を編成した。

ドイツは、これより早く一九三四年ゲーリング飛行聯隊中にこの研究が始められつゝあつたといはれてゐるが、これを演習に使つたのは一九三六年ハンブルグ市の防空演習が始めてであつて、これよりドイツはソ聯の公開演習に刺戟されてより一層眞劍になつて研究するに至り今次大戰で奇襲兵器としての性能を十分に發揮するに至つたのである。

ドイツ空軍は落下傘の特殊な性能を重要視してシュテンダルに落下傘兵學校を設立して組織的に訓練を開始し、これを一兵科として採用した。また、ローテンブルグ、シュースレーベンなどにある飛行學校でパラシュートの取扱を教へるなど、落下傘兵團の活動に猛訓練を施したが、ドイツはこれを公開せず、秒速四メートルから卅メートルまで自由に落下速度を調整できる新式落下傘の發明研究やその他新戰法を極秘の裡に進めてゐた。

そして、戰爭の始まる前ゲーリング空相の直屬飛行隊落下傘部隊を擴大强化したりして努力した。大戰直前スンダールとウイツトユツクとに落下傘大隊が設立されたときは、すでに三萬千八百九十名の多きに上る落下傘部隊員が登錄されてゐた。

落下傘部隊員たるべきものは、次の論文で紹介した樣に、十七歳より二十三歳までの獨身青年で、人格の高潔、犧牲的愛國心の旺盛なること、またドイツ人であることが肉體的な條件の他に、先づ第一に要求されており、これらの青年を大量に志願兵制度を以て募集し、この大戰開始に先だち既に着々準備して奇襲作戰に備へてゐた。

イタリヤ空軍も、一九三九年六月、アフリカの自國領リビヤ（トリポリ）における演習中に、一個大隊工兵を落下傘で降下させて、飛行場を急造させ、それが出來るや否や、二箇聯隊の突擊隊を大型飛行機で空輸した。その上多數の機關銃や數門の輕野砲さへ運んで來た。

かくの如く落下傘降下術並に特殊新兵團としての落下傘部隊の編成と新戰術は、各國軍事專門家及び航空技術家の間に研究され、又それぞれ空軍內に新設されたが、ひとり我國やイギリスは、一朝ことある時、これが運用され驚くべき戰果を收めるであらうことを、恐れもし警戒もしながら、落下傘部隊の編成を準備しようとはしなかつた。

（二）落下傘部隊大戰に出現

一九三九年九月ドイツのポーランド進擊戰が開始されるや、逸早くドイツは落下傘部隊を、敵の第

一戰線の背後に降下せしめ、退路を遮斷のために橋梁の破壞を始めた、と傳へられてゐる。

AB通信員ロイド・レールバス氏は、當時ポーランド軍に從軍中であつたが、ポーランド南部の某所からニューヨーク市APの本社に國際電話をして「獨空軍はポーランドの後方攪亂を目的として落下傘決死隊を組織して、ひそかに多數のスパイを、落下傘で飛び降りさせ、ポーランド軍司令部所在地、同飛行隊基地、軍需工業地帶ならびに連絡線等を偵察させたことが判明した」とドイツ軍の落下傘によるスパイ戰術を報告してゐる。

その後、ソ聯はフインランド攻略に際して、フインランドのカレリヤ地峽戰に、落下傘部隊の奇襲戰術を盛んに敢行して、マンネルハイム要塞の背後に、多數のスパイおよび兵員を降下させてフインランド軍を惱ましたが、殘念ながら地上に降りる前に全滅したり、下りたが積雪のために身動きも出來ずに全滅したりして、ソ聯軍落下傘部隊も散々の成績であつたので、ドイツは孤立無援に陷つたナルビイクに於ける、救援部隊を落下傘に依つて降下させたこと以外には、北歐電擊戰にこれを使用しなかつたようであつたが、地形の點、急襲を必要とする戰略上のためか、相手が平和な小國と悔つてか、さらに諜報機關との十分の連絡があつてか、白蘭進擊は、先づ空から始められた。

北歐を席捲したドイツの電擊戰は突如鋭鋒を轉じて、洪水戰術を唯一の頼みとするオランダの水鄉

を飛び越えて、五月九日ドイツ飛行隊は夜闇をついてオランダ海軍根據地デンヘルダー、シニーメーゲン、イームイデンなどの沿岸重要地區を偵察し、十日拂曉（午前二時頃）にいたるや、ドルドレヒト附近へ百名、ヘーグから廿キロのデレツトへ百五十名、ホーゲンツヴアルヴエロへ百名、ナルデンスリトレヒトに二百名、さらに蘭領の西海岸ジーランド島や、ローゼンブル島へも數十名づゝ武裝落下傘隊が舞ひ下りた。

續いて、十日の午前四時、ベルギーへも、ドイツの大編隊群が飛來したと思ふ間もなく、前大戰で惱まされたリエージエ要塞の北方ハツセルトを初め、その南方卅キロのニヴエル、西方四十キロのサントロド、ロツテルダム飛行場、マース河舊マース河及びワール河附近一帶に降下して忽ち重要戰略據點を占據してしまつた。

戰爭理論家として、また軍事評論家として世界的に有名な英國のリツデル・ハート氏も落下傘部隊の實戰上における威力と、敵國の人心を攪亂する「神經戰」における大きな役割を力說してゐる。

八月十三日のこと英本土各所にドイツの落下傘部隊が降りたといふので、全英は極度は神經を尖らせて謎の落下傘兵搜索に血眼となつた。イングランド中部やスコツトランド邊で發見された落下傘は約廿であつたが、落下傘兵の姿が見えないので前記の地方では道路といふ道路を悉く閉鎖して通行人

を一々誰何した。ある地方では十三日夜八マイルを行く間に二十回も身體檢査を受けたほど當局は無闇に過敏となつてゐた。英本土中部地方某所で十三日夜一警官は深夜頭上に飛行機のエンジンの音を聞いたと思ふ間もなく、シューと重い絹ずれの音を耳にしたので直に自衛團員等と現場にかけつけたが、そこにナチスのマークをつけた主なき落下傘が蟬の脱け殼のやうに捨てられてあつた。またスコットランドでは大形のドイツ機が現れてパラシュートを落して飛び去つたので牧羊者や農民が兵や森林地帶を隈なく探した結果、これも十六個の主なき落下傘だけを發見し大騒きとなつた。後で分つた話であるが右は全くドイツの神經戰術の一つで、落下傘だけを落して人心を攪亂すると同時に、敵情を窺ふことに十分成功したわけである。武裝した本當のナチス落下傘部隊の精鋭が大擧英本土に降りた場合の英國民の狼狽振が今から想像出來る。

落下傘部隊の奇襲戰略の成功した場合、それが軍事的にどれだけ價値があるか、については、軍事專門家でない我々に、ハッキリとわからないが、敵國内へ與へる混亂、恐怖、それに後續される空中輸送隊並にスピードを以て進擊する戰車隊の先達となつた點で、實に世界戰史に於ける最初の成功であることは間違ひなからう。

落下傘部隊がオランダ、ベルギーに於いて、いかに活躍したかは、他の論文に於て、詳細説明してゐ

るから、ここでは省略するが、落下傘部隊の侵略成功如何は、私の見るところでは空軍の爆撃に依る掩護以外に諜報機關との緊密な連絡と活躍を要することは疑ひないところで、第五列部隊及び內通者の誘導によつてゐるものと斷定してよい事實が相當多く見受けられる。

要するに、落下傘部隊は强力なる空軍の征空權獲得と諜報網の活躍に依つて始めて成功するものであり、そして戰略的に之を見るならば、スパイの降下、軍事據點の破壞と占據、交通連絡線の遮斷、孤立せる部隊の救援等に活用されるものである。

しかしながら、落下傘部隊の如き挺身隊の養成といふ一つの呼びかけは、對內的に自國の青年達に犧牲的愛國心を鼓舞すること、けだし想像に餘りあるものがあらう。

しかし、落下傘部隊は空軍並びに民間航空の進步發達といふ背景なくしては、決してその編成訓練に成功するものではない。

ドイツは民間航空の統制のために、一九三七年一切を擧げてNSFK（國家社會主義航空團）を結成し、大戰の勇士クリスチヤンゼン將軍を團長として滿十八歲以上の青年に統制ある航空敎育とスポーツ飛行を奬勵しつゝある。（「國防スポーツの現狀」と題する拙論を參照されゝば、その點詳述されてゐる）。また、NSFKに入團出來ない若い少年は、獨逸少年航空團に入り、或はヒットラー青年

團の飛行部で、模型飛行機やグライダーで、航空知識と共に祖國愛と團體訓練の精神が教育されつゝ今日あるを待機してゐたのである。

突如アメリカ陸軍長官スチムソン氏はアメリカ陸軍最初の落下傘部隊が約五百名の志願兵によつて組織された旨一九四〇年十月三日に發表した。同部隊司令部はジョージア州フオート・ベニングに設けられる由である、新しい部隊は第五〇一落下傘大隊と命名され、訓練は既に數週間前から小數の主だつた試驗部員によつて行はれてきた、隊員となる志願兵は陸軍歩兵聯隊隊員中から選ばれる模樣である。

以上の簡單なる落下傘部隊發展の歴史を見てもわかる如く、彼等は早きは五ケ年の、おそくも一日の長ある鐵の訓練を經ており、數々の貴重な體驗を積んでゐる。我が國に於ては、今民間に於て、落下傘部隊の編成のために青年を訓練せよ！　その設備をつくれ！　と叫ばねばならぬとは、なんといふ情けないことであらうしかし、これが日本の現狀とあれば止むを得ないし、また、今からでも決して遲くはないのだ。

軍隊の機械化をいち早く看眼したのは、今イギリスに亡命してフランス假政府の主班となつて、祖國に反逆の弓を引きつゝあるド・ゴール將軍であつた。彼は一九二〇年早くも「技能の軍隊（アルノード・ノチエ）」なる

一書を著はし、上下に遊説すること十二ケ年、しかし、人民戰線時代のフランスはド・ゴール將軍のこの卓見を認め得ず、却つてドイツはこの將軍のあらゆる著述を研究して、これを實際に採用した。フランスがド・ゴール將軍の眞價を認識したのは、フランダース戰線にドイツ機械化兵團に徹底的に敗北した後であつた。落下傘部隊編成に於て我々もかゝる後悔はしたくないものである。

愛國の血に燃ゆる青年諸君!! 祖國のために一身を捧ぐるを諸君が最高の名譽とするならば、落下傘部隊の建設のために、進んで協力せられよ!!

（昭和十五年十月記）

六、英本土襲撃とドイツ落下傘部隊

（一）落下傘部隊はイギリスへ行くか

地球上日の沒することなきを誇つたイギリス老大國も、今日この頃はドイツの英本土上陸作戰を前にして戰々恂々の有樣で、水鳥の羽音に驚く平家の武人のように、朝に幽靈落下傘隊に驚き、夕に無音爆彈や時計仕掛の爆彈の脅威におびえてゐる。

英本土襲撃にあたつて、ドイツの所謂電撃作戰——ヒットラー戰略が、またどんな新機軸を生むか？　どんな新兵器が飛び出るか？　今、世界は英本土の世紀の敵前上陸に焦點を集中し好奇の眼を開いて、今やおそしと待ち構えてゐるが、オランダ、ベルギー攻略以來、一躍今次大戰の花形となれる、あの落下傘部隊は英本土にその凛々しい挺身部隊としての姿を現はすだらうか？　空に舞ふクゲラの樣な落花の舞ひが見られるであらうか？

（二）落下傘隊志願兵とは？

ロンドン二日發の同盟電報は去る二日早くもドイツの大型飛行機、それも始めて空に登場した眞黑な双發動機付大型機がイギリス東南岸を横切つて編隊を組んで飛んで行つたのを目擊せるものあり、といひ、やれ落下傘部隊が降下したともいはれ、ロンドンの恐怖と戰慄は益々つのりつゝあるが、一方ドイツ本國では落下傘部隊員の志願兵が「英本土襲擊にこそ一番乘りをしたい!!」と、われもわれもと各地官廳に殺到しつゝあり、といはれ、ますますイギリスはロンドン子の神經をイラダテてゐる。

落下傘部隊なるものをドイツ軍にこれを採用せしめたのは、矢張りヒットラー總統その人であるといはれ、それは一九三四年に現空軍總帥であり、又元帥でもあるゲーリング飛行聯隊に、極く小規模につくられたものである。

落下傘部隊は、いふまでもなく敵中に投下する挺身隊であり、決死隊であるので、人並みすぐれた精神力と犧牲的精神と敏捷なる活動を要求される。

落下傘部隊は志願兵制度で、その採用には次の十ケ條が、その資格に必要なものとされてゐる。

一、十七才から二十三才までの青年にして身長一・六〇米乃至一・八五米たること

二、ドイツ國民たること

三、兵役に服する名譽を有すること

四、徵兵檢査に合格し得る體格を有すること

五、ユダヤ人又はユダヤ系にあらざること

六、軍醫の身體檢査の結果、落下傘降下に適すると認めらるゝこと

七、落下傘降下者としての心理的適性を有すること

八、法律上の前科を持たず品正方正なること

九、未婚者たること

一〇、常に民族社會主義國家のために鬪ひ、何時たりとも生命を捧ぐることを宣誓し得ること

このやうな嚴重な資格條件が要求されてゐるのだが、諸君！　驚いてはいけない。この落下傘部隊志願兵に採用された者は、その上に十二ケ年の義務兵役が課せられてゐるのだ。だから、たとへイギリス本土襲擊を完了するとも十二ケ年の義務兵役につくを覺悟して志願すべきであるのだ。ドイツ魂といふかナチス精神といふか、祖國のために一身を捧げるを最高の道德なり、とするこの立派な決意あつてこそ、始めて、大戰の花形たりドイツ軍精鋭中の精鋭たる落下傘隊員の名譽を擔ふことが出來るのである。

（三）落下傘部隊は如何に活躍したか？

落下傘部隊がイギリス本土に降下した場合どんな活躍を演じるかを知るために、オランダ、ベルギーでこの挺身體がいかに勇敢に闘つたかを調べて見よう。

オランダへこの空からの見知らぬ訪客——落下傘部隊が降下したのは、五月十日の午前二時、ベルギーに降下したのは同日の午前四時といはれ、いづれも夜明けに近い頃で、ベルギーのリージェ要塞の一番先の一番重要なエベン・エマールの保壘は、ドイツの落下傘隊員の數十名で、司令官以下七百名より一千名に近い多數を捕虜にしたし、ロッテルダム飛行場附近に着陸した挺身隊は、一組は同飛行場を占據し、また他の組はワール、舊マース、新マースと三つの河にかゝつてゐる橋梁や鐵橋を守備した。この河に架つてゐる鐵橋は長さ一キロに及ぶもので、落下傘部隊スポーネツク中將自らこれを指揮してゐる。この人數がどんなものか公表されてゐないので確實な數ではないが、僅々百五十名程度であつたらしい。ベルギイ戰線全體に降下したその數は、二千五百名内外であつたといはれてゐる。しかも、この寡兵の挺身隊は敵の大軍の逆襲に逢ひながらも防戰に努め、これを擊退して、十日より十二日の三日間、主力部隊の戰車隊がくるまで頑强に各々その據點を死守したのである。

落下傘部隊輸送にはユンカー五二の大型機を使用しており、自動車道路に、あるひは林の中に危險を冒して着陸してさへゐる。それで、イギリスは廣い道路にも落下傘部隊輸送機の着陸出來ない樣な仕掛や森林などにも待機して準備おさおさ怠りない樣子である。

（四）落下傘部隊と謀略戰術

落下傘部隊の、以上の活躍については殆んど知られてゐるが、落下傘部隊について最も重要なる點が餘りにも忘れられ、又研究されてゐない。それは落下傘部隊が兵器彈藥兵員のみによつて編成されてゐるのでなく、勿論兵隊ではあるが謀略班——後方攪亂と通信連絡——が、それに加つて活動してゐることで、オランダの如きは所謂第五列部隊といはれる內通者によつて辻々に野菜その他の一般宣傳用のポスターが張られ、その裏に地圖が書かれてあり、落下傘部隊に準備されてゐたといふが、この第五列部隊との秘密な連絡で後方攪亂戰術を行つたり、通信隊は——報道中隊（無電技師、カメラマン等）——着陸點を撮影して飛行機に托送したり、機上より航空寫眞を撮つて降下地點を確めたり、或は無電によりて指揮を仰いだり位置を知らせて連絡したりしてゐる。

オランダでは、オランダ政府と同一の波長で「わが國（オランダ）にドイツの落下傘部隊がオラン

ダ軍と同一の服裝で降下せり、極めて嚴重なる警戒を要す」といふ實に功妙なる苦心の僞電放送を以て人心攪亂をやるとか、この謀略班通信班の活躍も相當のものであつたらしい。

（五）豫斷を許さぬ英本土襲撃

だが、オダンダ、ベルギーにおける落下傘部隊のドイツ戰術は、イギリスにとつて既に先刻研究ずみのもので、これらの戰鬪形式、攪亂戰術に備へて、あらゆる場合が考慮され、落下傘部隊捕捉義勇隊が活躍してゐるので、オランダ、ベルギーの場合のやうに果して問屋がおろすであらうか？

だが、筆者の想像が許されるならば、イギリス本土襲撃の落下傘部隊は、ロッテルダム飛行場を襲撃し、この警戒嚴重なる飛行場に降下したように、急降下爆撃機により猛烈に爆撃をくりかへし、わざと敵の最も軍備の堅固なところへ降下或は着陸する。しかも——一分隊約十二名塔乘一作戰目標百五十名——從來のように小人數ではなく、全く文字通り落花の舞ひ落つるが如く大部隊の、それも分解され高射砲や步兵砲ばかりでなく、今度は輕戰車隊をもつ相當の大部隊を空からの、あまり有難くない珍客として送るのではなからうか！　しかも、敵前上陸地點のすぐ背後に、あるひは英本土各地至るところに百雷一時に落つるが如き壯觀さを以て、敵前上陸寸前あのジョンブルのキモ魂を拔く曲

藝を演ずるようなことはあるまいか？　その人心攪亂とパニックを時を移さず利用して奇襲作戰を敢行するのではなからうか？

いづれにせよ、いつの場合も、神出鬼沒の作戰をあやつり、意表に出るヒットラー戰術は、われわれの豫斷を到底許さぬものがあるが、なんにしても敵前上陸——英本土襲擊作戰といふ今次大戰の最高潮に達せんとする時、ドイツ軍の花形役者たる落下傘部隊の活躍こそ見ものである。

（昭和十五年九月記）

第四篇　寫眞宣傳に關する評論

一、戰爭は新しき寫眞を生む

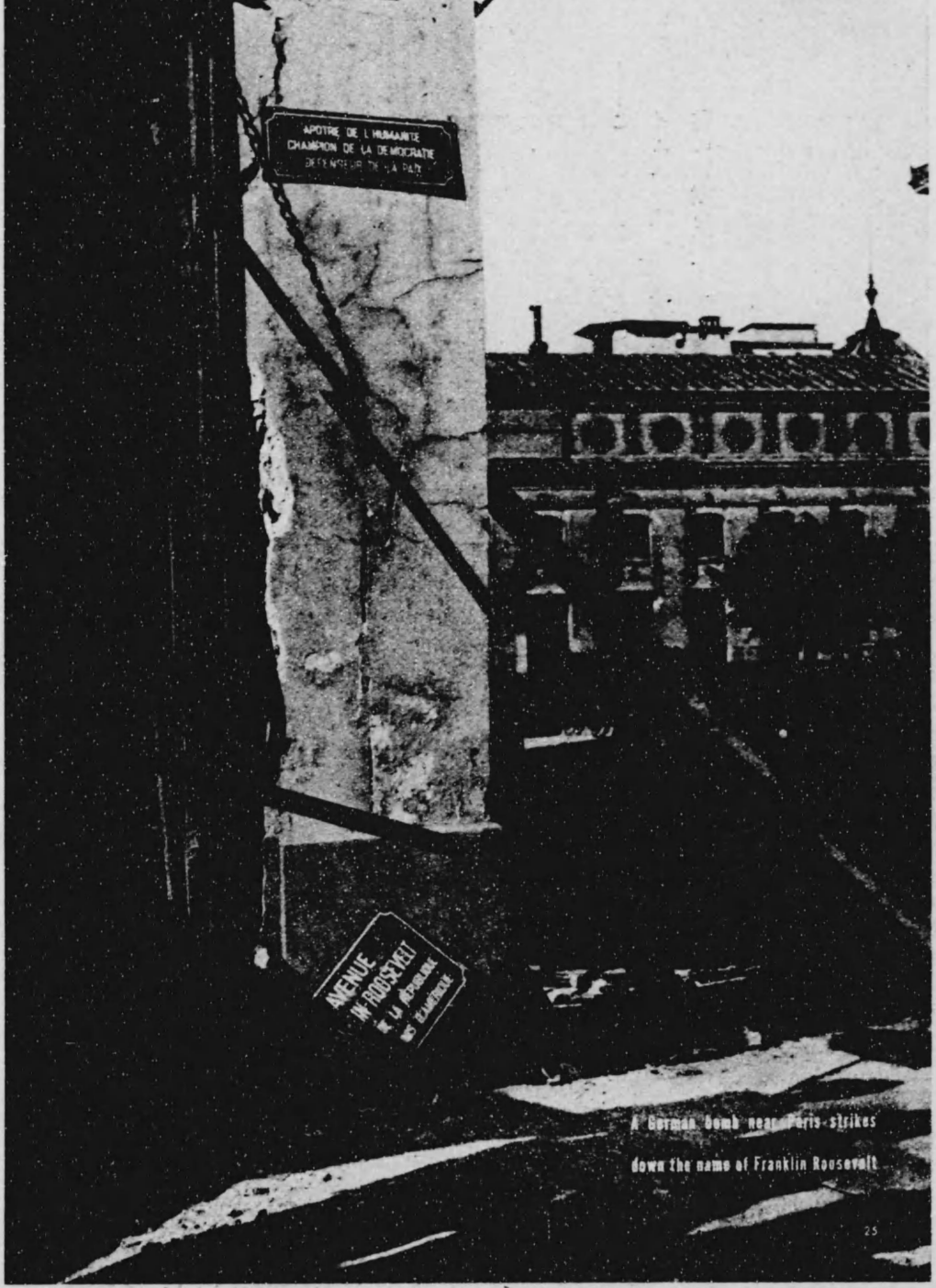
世界の注目となつた第二次大戰の寫眞グラフ

――このグラフはオリエンタル社「フオト・タイムス」誌の御厚意に依り轉載す、玆に深甚の謝意を表す――

「アメリカのグラフ雜誌に現はれた歐洲戰爭寫眞の傾向」を紹介する意味で、最近の「ライフ」から目ぼしい作品を選んで見た。開戰一年の今日ではあるが、實のところ、我々の注目を惹く樣な戰爭寫眞の數は決して多くはない。それは、現地に於ける寫眞檢閲の嚴重なこと、一般のニュース的な寫眞は、電送によつて、畫面の明確さの如何を問はず、唯報道の迅速のみを競つて發表されてしまふために、グラフ雜誌としてはそれらを揭載する機會が少いこと等、色々の原因によるのであらう(「ライフ」等も時に電送寫眞を集錄してはゐるが、その畫面の貧弱さは全く物足りない)

これに關聯して、グラフ雜誌が、寫眞では示し得ない情景を大袈裟な繪によつて表現し、讀者の好奇心を滿足させつゝ一方、宣傳的な機能を果してゐるのは注目すべき事實だ。勿論、そのためにグラフ雜誌に於ける寫眞の地位が低下するなどゝは考へられないが……。

そこで、寫眞としては、戰鬪そのものを正面から記錄したものよりは、側面から間接に戰爭の姿を描いた作品の中に却つて興味深いものが見出されるのは當然であらう。然し、そうした作品の中には、敗戰の悲慘をことさら露呈することによつて、その裏に警戒すべき宣傳的意圖を含めてゐると考へられるものもあるから、私達としては常に批判的な態度でこれに接すべきであると思ふ。



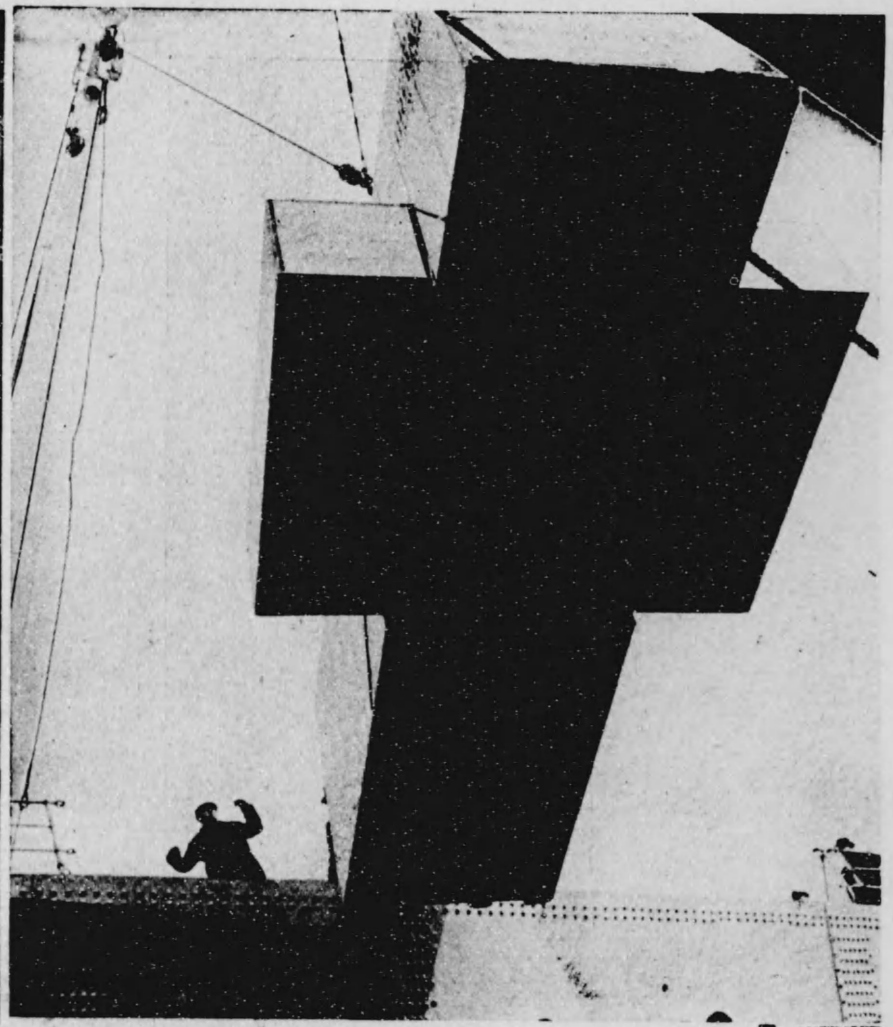
ドイツ空軍の爆撃で打ち落されたアメリカ大統領の名（パリ郊外所見）

パリヂヤンは外國の盟友達からの氏名を街の名に付するとゆふ習慣を持つてゐるが、眞に「フランクリン・ルーズヴエルト通り」の標識の辛辣な爆撃に堪へ、外見たる寫眞は「パリ郊外の小さい札に「ルーズヴエルト通り」と書留つてゐる人道の使徒「平和の擁護者」「デモクラシイの選手」等の讃辭が記されてゐる。今は儀なくされる名を餘らう。（パリ・フランス陸軍ポスター提供）

一劇抹の戦慄の一刷の静けさの中に淋しく居てみる巧みに建物の巧妙に配置し、個の有名なパリの標識は、近代の戦争の物語を面白く想像する。

事が出來る。

フランスの悲劇—希望の十字架（一九三八年）

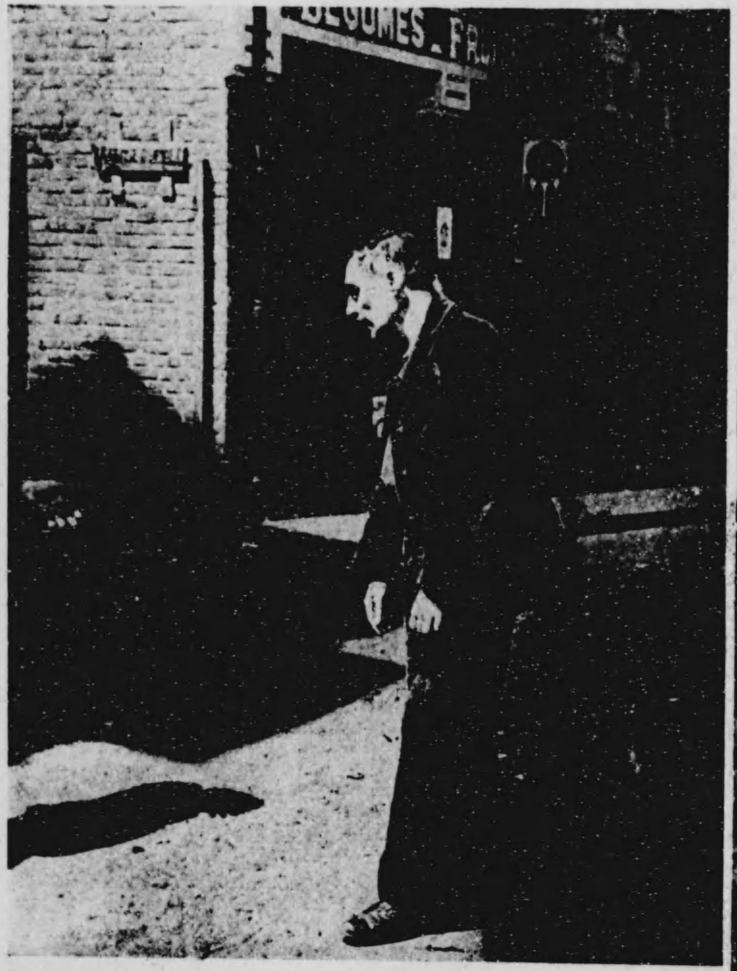


実は アメリカより輸入された飛行機の荷造箱

嘆きの巴里（フランス陸軍映畫サービス提供）

街の舗道を往く若き戰死者の靈柩

戰爭と狂人



空爆のあと（一九四〇年）

皇法る祈を和平

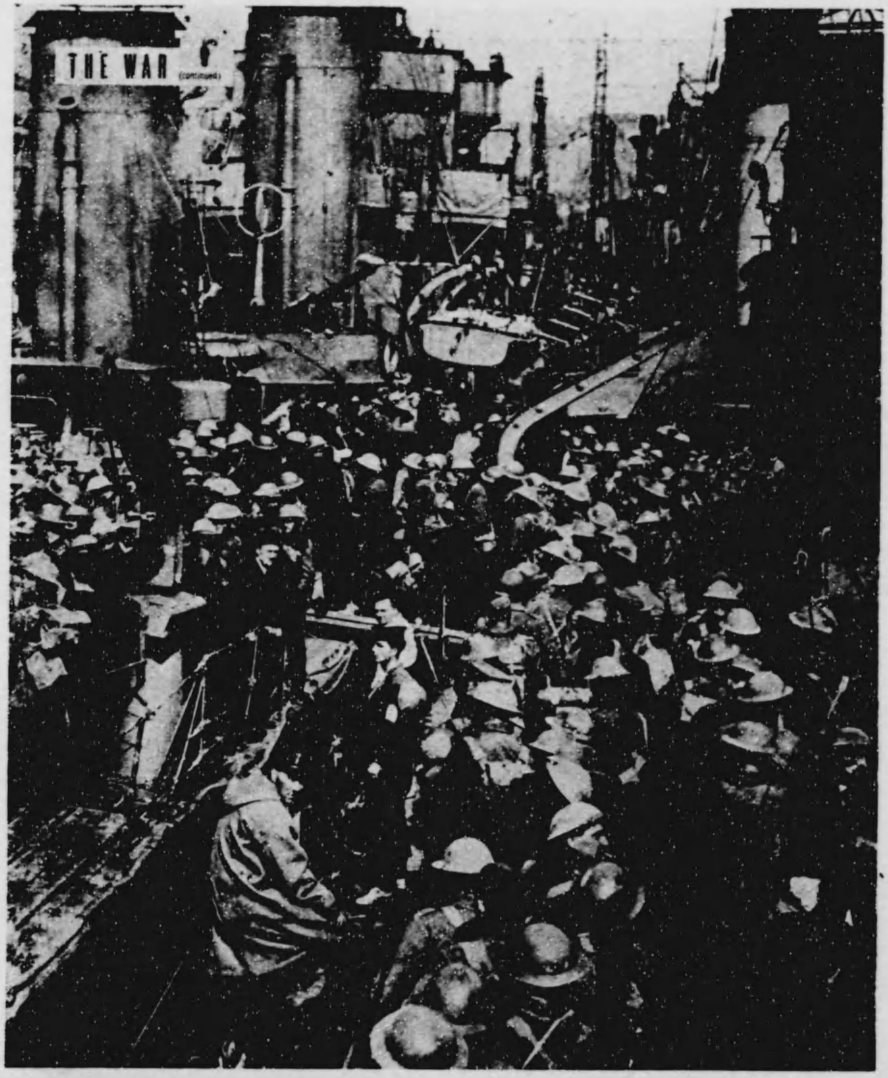
皇法は、三月三十日の特別撮影で、四萬のローマ市民に前日三月三十二日の特別撮影で、四萬のローマ市民に前日三月三十二日の特別撮影で、四萬のローマ市民に前日三月三十二

歡呼に迎へられてベルギーに進入したイギリス軍

（供提P・A）。たつまし走敗もくろもは等彼、に前の撃猛の軍ツイドがだ

以上四枚のイギリス軍歓迎の寫眞は連續した物語りをよく傳へてゐる。被寫體とカメラの位置の問題も充分考へて場面を生かしてゐる。

生きてゐた兵隊



ダンケルクの虎口を脱して英本土に無事生還したイギリス遠征軍

（P・I提供）

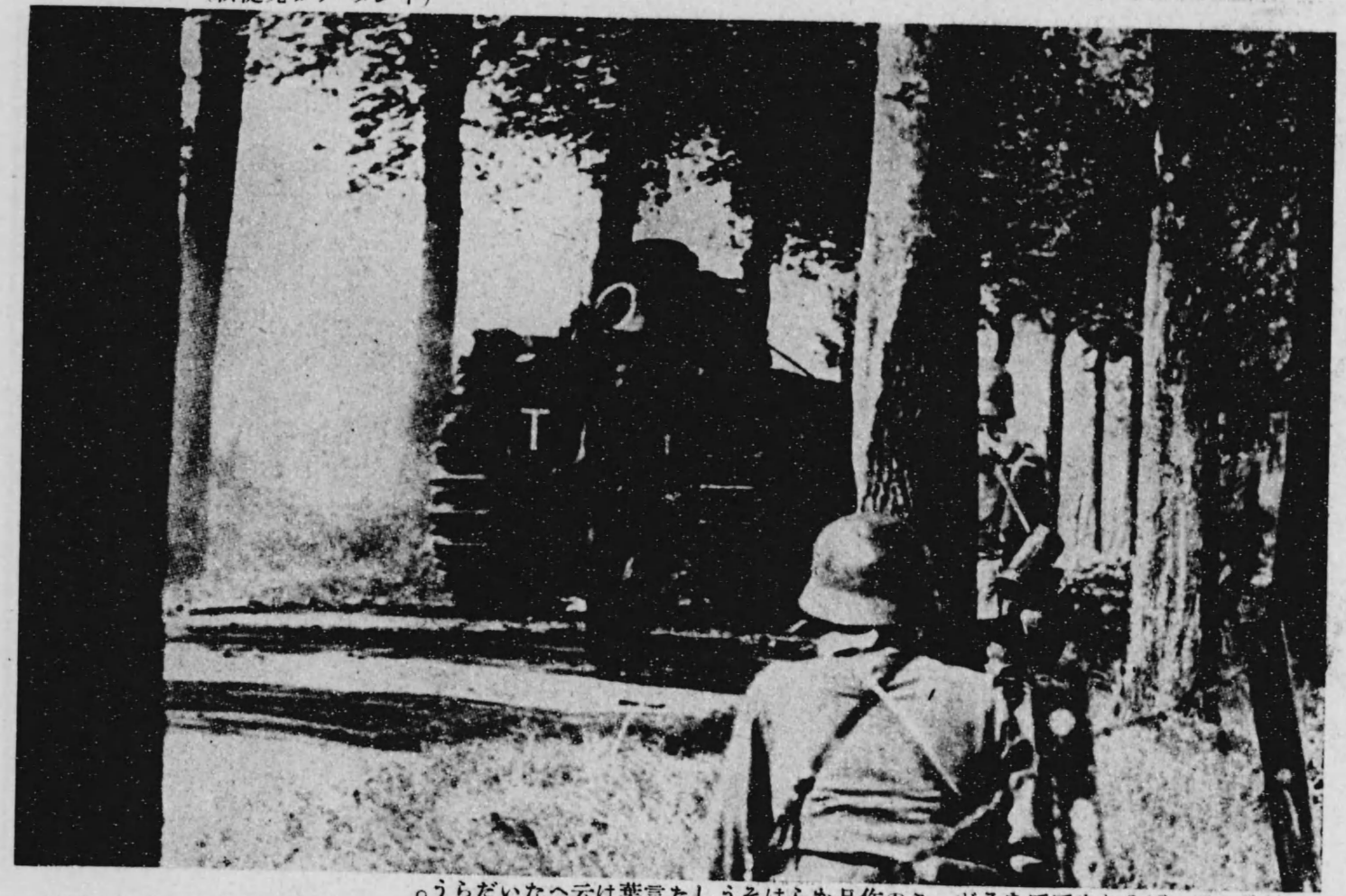
集團のねらひは俯瞰の位置で、充分効果を得て、焦點の鮮明さで兵士の個々の姿を、するどく描いてゐる。これでこそカメラで描き得る世界であらう。

これも生き殘つたイギリス兵隊で、逞しい作家の態度が充分想像される。迫力ある作品である。カメラを思ひ切り被寫體は接近させ驚く程人物のリヤルな表情と姿を捉へてゐる。

一枚の作品に依つて虎口を脱し得た生々しい過去と現實を充分想像出來る。優れた報道寫眞の一枚と云ひ得るであらう

スターリングラードの戦線にて

獨軍の猛撃に戰車を破壊され回復全部を失つたフランス兵の降服
（供提九オフ・タンイ）



強力に面畫、り語物をかるたん何の士兵のそ、は點一のクンタ、るあで面場るあの力迫、象對の方味と敵に間の米數
さを與へてゐる。

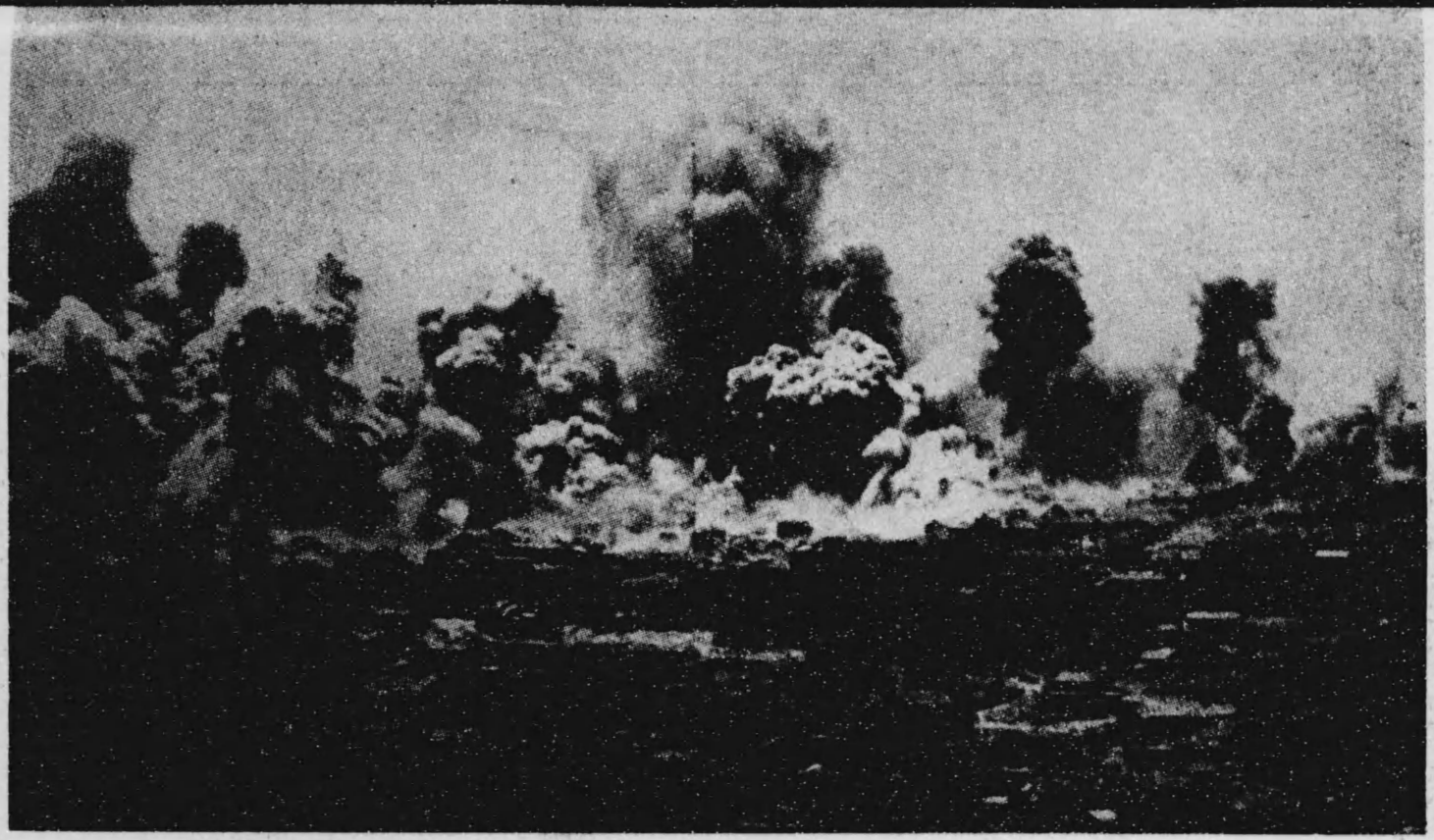
演出と云へばそれまでであるが、この作品はらかそうしたうたいなへ云は葉言

母のスリギイ

我が子が
らがな
ラフが
支を銃
然決て
性女るげつをれ別
こてつ依に個一銃を事ふ云とるあで母の士兵に殊
出て け向へスン
た然決てへ支を銃、らがな、母つ持を銃、に心中を士兵
相るた
こ性女るげつをれ別、母つ持を銃、に心中を士兵
てつ依に個一銃を事ふ云とるあで母の士兵に殊、リ
るるてへらとく鋭を情表なルヤリてつ依にユシツ

征貌
頭驛
て見
人三
面畫
說分充
明
提P・A)

待を番順の吻接のれ別、で
ち時戰、るるて
性母のスリギイ時戰は配の面畫
あでのもなみ巧るるて與
ラフに時同



わが荒鷲の猛爆により壊滅の一路を辿る抗日重慶

去る七月二十八日三時間に渉つて行はれた我が荒鷲決死の猛爆は容共抗日に瀕死の足搔きを續ける敵首都重慶の全市を火焔と煙塵で蔽ひ盡し蒙々と燃上る火煙は天をも燒盡す程の悽愴を極め、この爆擊により約一千戸の建物が灰燼に歸し、早くも遷都の噂さが立ちはじめた。この光景は揚子江向ふ岸の馬鞍山から見たものである。（米國ライフ誌より）

二、青年報道寫眞研究會に捧ぐる文

—「日刊報道寫眞新聞」創刊のために前進せよ—

（一）はしがき

私自身編輯部の一員として又同時に販賣關係の重要なる一幹部として某新聞社に參與し、文字通り十年一日の如く、眞正ジャーナリズムと戰時體制下に於ける新聞道確立のために某紙の根本的改革を提唱し微力を盡して來たのにも拘らず、資本家特有の面目論や複雜怪奇なる內部的情實にとらはれ、或は災ひされ且つは經營擔當者の無理解と不敏の故に、遂に最後まで享け入られ得なかつた私の「新聞論」が、慧眼といふべきか明敏といはうか、カメラ・ジャーナリズムの前進のために飽くを知らぬ情熱と眞摯な努力とを以て鬪ひ續けつつある「フオト・タイムス」を根據とする青年報道寫眞研究會の有能新進なる一連のグループに依つて、極めて卒直に享け入られ、大いなる共鳴と支持とを與へられたることは、私自身の喜びはもとより、天下に眞正ジャーナリズムを死守せんとする同志の必ずしも僅少ならざるを知り、すくなからず意を强くすると共に、斯道のために同慶に堪へない次第である。

（二）私は諸君の精力的な活動に期待し その動向を注目してゐた

私は自ら新聞經營の擔當者たるべき野望を抱いて約十年を某新聞社の一員として、編輯・販賣の兩機能に參劃し、身を以て新聞機構の實際を體驗すると共に、歐米各國のジャーナリズム——特に新聞及びピクチュア・マガジン——の機構と動向に關して不斷の關心を拂ひ、その研究を怠らなかつたのであるが、國內に於て私が茲數年最も注目してゐたのは「報道寫眞」の指導理論の確立と、その前進のために活潑なる理論鬪爭を展開し、且つ屢々報道寫眞に關する意義ある研究論文を發表し、わが國「報道寫眞」領域の擴張と充實のために最も勇敢に鬪ひ、從つて斯道に最も貢獻するところ多かりし「フオト・タイムス」並に靑年報道寫眞研究會の斷えざる活動であつた。

（三）「報道寫眞」に協力しないのは果して何者なるか

「日本に於てよき報道機關、發表機關があるかと云つたら報道寫眞に關する限り無いといふより仕方がない。我々は日本のそれらを顧むに足らずとなして、不自由な思ひをし、相當犧牲を拂つてまで

直接歐米の通信社を通じて、出來得る限り日本文化のよき報道をしてゐたのであるが、こんな狀態は既に變則であつて、永く續いてよい理がない。日本の通信事業などが、もつと寫眞の分野を活潑に動かさない以上、報道寫眞の溫床にはなり得ない。」と光墨弘氏は昭和十三年十一月號の「寫眞による國家宣傳は現狀でよいか」といふ「フオト・タイムス」誌上の論說に於て早くも長嘆息を洩らしてゐられるのであるが、今より五年程前〇〇新聞社がかつて私の關係してゐた某社に買收され、その經營權の移らんとする時、私は〇〇新聞を軍部報道班の大衆版とも云ふべき軍事新聞とするか日刊報道寫眞新聞とするか、ともかく特殊な新聞として再出發すべきを强調し、特に報道寫眞のみによる新聞の編輯と經營の可能を力說したのであつたが、同紙の主宰者はこの私の提案を不幸にして理解せず馬耳東風と聞き流してしまつた。また昨年であつたか諸君等が青年報道寫眞研究會の結成を本紙上に發表された時、私はいち早く同會スタフの活用を社內にあつて建策し、諸君の活躍すべきスペース提供のために腹案をねり、二、三レイアウトのプランまで設計したのであつたが、これまた實現する運びに至らなかつた。これ私の微力不德のいたすところのみであらうか？

しかし、このことは光墨氏の「日本の知識階級が見たり聞いたりを能とせずに、何故もつとこの方面の啓蒙發展に協力してくれないのか」といふ難詰の必ずしも當らず、協力してくれないのは知識階

級にあらずして、寧ろジャーナリズムを理解しない新聞經營者であり頑迷なる資本家階級なることを指摘したいのである。

（四）諸君に一半の責任なきや否？

だが、資本家は利潤を追究することには明敏であり、大膽なるものもある。報道寫眞新聞の經營の可能を說得し得なかつたのはもとより私の力及ばざりしためであらうが、このことは同時に諸君等もまた一半の責任を負はねばならない。

なぜなら、諸君等は日本のジャーナリズムの機關が諸君等に必ずしも開放的ならざることを常に慨嘆し痛憤してゐられるが、私の如きが內部にあつてこれを强硬に支持し主張してさへかくの如きであるのだから、何故に積極的に自ら「日刊報道寫眞新聞」の組織と設立のための提唱をされないのであるか！

私はフオト・タイムスの最も忠實なる愛讀者の一人であるが、私の不注意のためか日刊報道寫眞新聞設立の提唱を遺憾ながら本誌上に一度も見ないのである。かつてアサヒ・グラフが日刊を以て出發して失敗したのに再び同じ轍を踏まんとするを躊躇せられるのであるか。アサヒ・グラフの失敗は日

刊なるが故でなく「報道寫眞」精神の稀薄と技術と組織の不足不備のためであつたのだ。

青年報道寫眞研究會の陣容今や漸くよし。勇氣あり、情熱あり、技術あり、しかも飽くなき思索と理論的究明を一日も怠らうとはしないのだ。私は最早報道寫眞家の人材にさしたる不足、不滿を認め得ないのみならず、かゝる報道機關の確立によつてのみ更に豐富に且つ敏速に養成され得ることを信じてゐる。

それでは資本に不足するといふのか？　新聞はいつの場合も人物が主であつて資金は從である。人的構成よろしきを得れば、新聞事業の資金を得るは寧ろさしたる難事では決してない。諸君がもしも日刊「報道寫眞新聞」設立のために眞劍に研究し、努力し、協力するならば資本は忽ちわれわれの計畫の上に集積されるであらう。否、既に私の手許にその資本の提供者さへ準備されてゐることを豫め御承知願つて置いてよいと私は思つてゐる。

（五）　報道機關の確立—寫眞新聞創刊こそ急務なり

諸君も報道寫眞の最早や單なる偶像にあらず、概念にあらざることを知り、その實踐に依つて「報道寫眞」の使命の達成されることを、即ち報道機關或は發表機關——ジヤーナリズム機關の機能と組

織と整備との完全な有機的な結合なくして「報道寫眞」の存立し得ない事實に對して、既に一應の理論的解決と結論とを得てゐるではないか。

頑迷不遜なる資本家の經營する新聞、あるひは戰時體制下に於けるジャーナリズムの現段階とその意義の認識に於て缺如せるもの、特にカメラ・ジャーナリズムに於てわれわれと遙に距離あり、且つ錯誤せるところの笑止千萬なる編輯幹部に對して、諸君等はなほいつまでも乞食の如く「報道寫眞」へのスペースの割愛を待ち續けまた門戸開放を叫んでゐるつもりであらうか！

少くとも私にはその忍耐はなく、隱忍もまた既に限度を越えてゐるのである。

かゝる叫びは、私自身の苦しい體驗より發せられたものとはいえ、こうした感情論は、今の場合一先づ奥へ引き込めておこう。しかし、日本のジャーナリズムが自ら積極的にしかも速かに寫眞の分野を豐富に提供するか、報道寫眞家自身がみづからの發表機關を確立し己が活動の分野を獲得しない限り、「報道寫眞」は自らの本質の故に——發表されることに依つて大衆を把握し組織することなくば「報道寫眞」の意義と使命は達成されぬ——一定の限界に徒らに足踏みし遠らずして遂に困難なる行き詰に遭遇するに至るは火を睹るよりも明らかなことで、この意味よりして「報道寫眞新聞」の一日も早き創刊——即ち報道寫眞の實踐こそカメラ・ジャーナリズムの發展に關心と責任を有するわれわれの

刻下に於ける最も重大なる任務であると信ずる。

（六）所謂「國策寫眞」とカメラ・ジャーナリストの教養について

わが敬愛する報道寫眞の理論家泉玲次郎氏は「アマチュア寫眞の新しい段階」（昭和十四年七月號本誌）なる所論に於て「寫眞の運命を決定するものは既にカメラ以前にあるのだ。そして無反省な追隨・模倣性や皮相な審美感覺に代る、强力な觀察眼・創意性・「幻想力」（常に現實を對象とする報道寫眞に於ても、その現實を眞に力强く觀象に傳達しようとすれば、これこそ眞に大切な條件なのだ）なしには、その運命を良き星の下に置くことは出來ないであらう。云々」……と云ひ仁木正一郎氏も亦「報道寫眞に於けるアマチュアの限界」（昭和十三年十月號本誌）なる論說に於て「第一に報道寫眞は一定の使命を持つてゐるので、常に觀者への影響力を考慮して寫される、そこに報道寫眞の社會的役割があり、アマチュアが如何に技術が優秀であつても、單に寫眞技術だけでは仕方がないので正當なる社會認識に基いた宣傳技術の頭惱を必要とする、第二に報道寫眞は偶發的な事柄は少なく多くの場合、豫め方針を定め、比較的時間に餘裕を持つて事柄を分析した後、寫すと云ふ極く愼重な態度

と手間をかけねばならぬ。故にアマチュアが報道寫眞に關與する事は全く暴擧に等しいと」兩氏ともいみじくもアマチュアの限界點を究明し、報道寫眞の社會性を强調され從つてまた「カメラ以前のもの」即ちカメラ・マン自身の一般的教養と鋭利なる社會的批判力養成こそ前提とすべきを先決條件とされてゐるが、勿論この言まことによし。

但し、私は餘りにも濫用されつゝある處の國策寫眞なるものには勿論、いふところの「國策の線に沿ふ」と自稱し且つ無批判的にこれを容認するところのものが、果して國策に眞に協力するものなるや否やを大いに吟味してみる必要ありと信ずる。從つて「カメラ以前」の教養と社會的認識について勿論一概には云ひ得ぬとしても、フオト・タイムスの理論家並に青年報道寫眞研究會諸君と私の間に多少の逕庭なきにしもあらざるを否め得ないと思ふ。

この問題は時局認識の出發點とも云ふべき極めて重大なる議題であつて、茲に簡單なる解答をなすべきにあらざるが故に、遺憾乍ら他日の機會に讓ると共に近刊の拙著「戰時體制下の新聞は如何にあるべきか」について御參照願ひたいのであるが、要するに諸君の活動の地より遙に離れたる草深い片田舍より想像し推察し得る處のものは、青年報道寫眞研究會のグループに錚々たる報道寫眞の理論家こそ多士濟々になるに拘らず、社會批評の理論と實踐に透徹したる意味に於るよき指導者の必ずしも

豐富ならざることを物語る一證左ではあるまいかと推斷し得るものである。

甚々潛越暴慢なる言辭ではあるが、嚴正なる自己批判を峻拒せられざる眞摯なる諸君は私のこの非禮なる忠告を恐らくこころよく甘受して頂けるものと信ずる。

（七） 青年報道寫眞家よ飽くまで前進せよ

私が毎月フォト・タイムス誌を通じて親しく面接しつゝある懐かしき報道寫眞研究家の方々よ！

私が諸君と言葉を交はすのは恐らく本稿に於て始めである人が多いと思はれるが、私は既に早くより諸君を知り「報道寫眞研究」の旗の下に生死を誓ふ眞劍なる諸君の覺悟と不撓不屈の努力を知つてゐる。私が敬愛する諸君と共に相見ゆる日のさして遠き將來ならざることを斷言し得ると共に、おくればせながらも諸君の陣營に參加し、かつまたその後塵を拜して奮鬪する覺悟も抱いてゐる。どうぞ、いつしか田舍者となれる、しかも新進なる報道寫眞家諸君の驥尾に附さんとして、なほ絶えざる渴望と理想を抱き、前進せんとする小生を惜しみなく鞭撻し指導し協力されんことを切望してやまない。

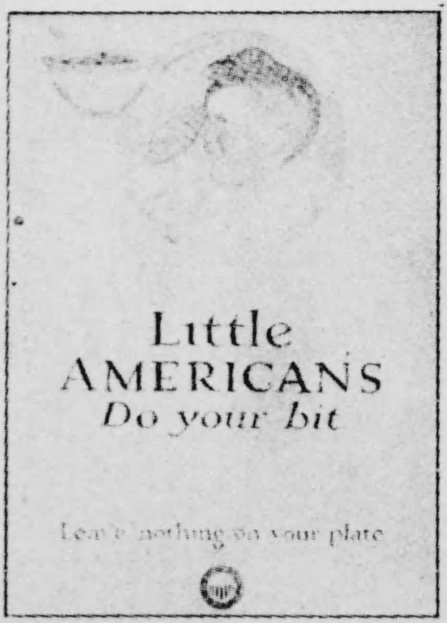
私の提案する「日刊報道寫眞新聞」の創刊は決して夢物語りでなく、既に着々準備されつゝあるがこの新なる課題についてフォト・タイムス誌上に大いに理論鬪爭と先輩諸氏の研究を展開されんこと

を切望して止まない、われわれ報道寫眞家の第一歩の理想と懸案は現實に近づきつゝあるのだ。自らのために、はたまたカメラ・ジャーナリズムの前進のために「報道寫眞」勝利の旗を飽くまで押し進めようではないか。

（昭和十四年十一月記）

北米合衆國食糧管理局の戰前大戰中の節約食糧傳宣ポスター

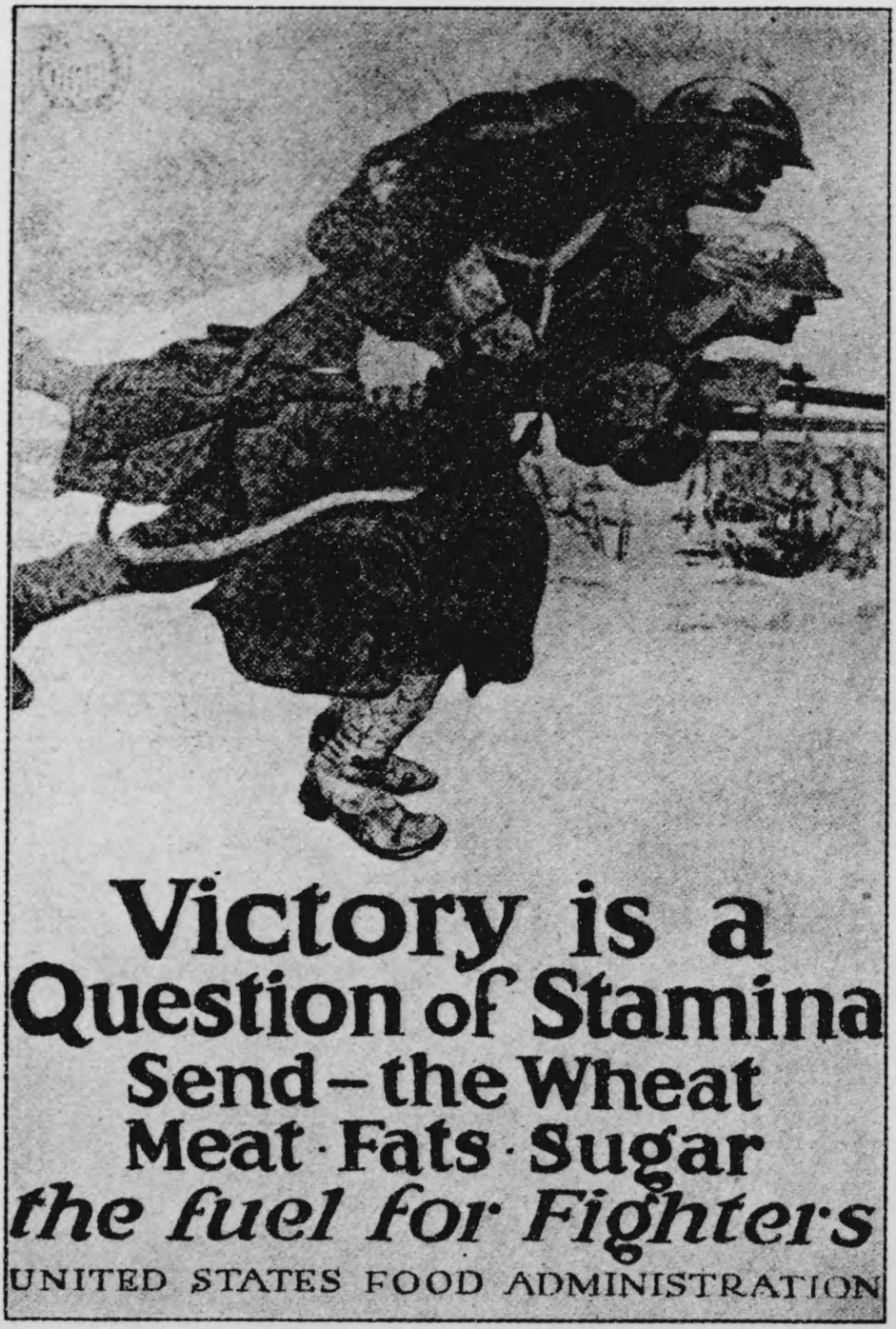
るゆらあるす敵に義主逸獨。す退擊を逸獨は旗の軍合聽
か物何。よせ食減を物食るす要が士戰。よせ持支を旗國
。れ勿るす費浪もを物何。よせ制自を



盡をし少の汝。よ民國カリメア小
。れ勿す殘もを物一に皿の汝。せ

。よせ約節をンパの塊一に週一
。よせ力助に捷戰てしくか

米國食糧管理局の節約宣傳ポスター（戰前）



勝利は精力にあり。戰士の燃料即ち小麥、肉類、脂肪、砂糖を送れ。

三、國策双曲線

——カメラで衝く時局との批判と抗議——

時局を語る「報道寫眞」——國策双曲線とは何か？——「麥と兵隊」や「土と兵隊」の軍事小說を以て一躍讀書界の寵兒となつた火野葦平軍曹が、內地歸還の第一印象として語るところに依れば「それは內地が如何にものんびりしてゐるといふことであり、それは一面腹立しいことでもあつたが、また嬉しいことでもあつた」といつてゐるが、この「のんびり」としてゐることを大國民の綽々たる餘裕として果してよろこんでばかりゐられるであらうか！　たしかに、銃後國民の生活態度は、歸還兵ならずとも、こころあるものを腹立たしめるものがない。

アメリカの畫の半分はルーズベルト（大統領）に依つて支配され、夜の半分はカポネ（ギヤングの親分）に依つて支配さる。と、云ふ皮肉な警句があるが、今の日本の畫の半分は忠良なる國民が支配し、夜の半分は錯倒せる時局認識を有する不憐なる國民に支配されてゐる、と評するも決して過言ならざるものがある。

「國策の線に沿ふもの」と「沿はざるもの」との國策双曲線は、吾々が日常、しかも隨時隨所に目擊し得るところである。この腹立たしき現象のよつて來るところのものは何か？　その原因は勿論數々あり、簡單には斷定し得ないが、その最も重要なる原因の一つは、銃後國民生活に對する嚴正峻烈なる批判の缺如でなり、ジヤーナリズムが己を本來の使命とするかゝる社會批判を積極的になさず、これを等閑に附してゐるためであり、更にまた誤れる新聞政策——言論取締に對する無方針の結果の齎らせる言論界の萎縮である。そして、それ故に、口に自肅自戒を云ひ、國民精神總動員を叫べども、結局に於て、國民の先覺分子といふべき知識階級の國策への眞の協力支持なくして、即ち、知識階級動員のための宣傳とある程度の建設的批判の自由を與へることなくして、これを成功的になし遂げ得ないと云ふ哀れむべき證左を現實に見せつけられたに過ぎない。

わが國の知識階級は、國策に對する協力者としての熱情をうちに抱きながら、確乎たる目標の具體的なる指示と組織が與えられぬが故に、本意ならずも一種のサボタージを演じつゝあるのだ。

吾々はカメラ・ジヤーナリスト、或は報道寫眞家として、又眞の國策への協力者として、今こそ立ち上らねばならぬ。吾々は「報道寫眞」がよく時局をその一枚をもつて語るのみならず、あるひは批判し、抗議し、主張さへもし得る威力を信ずるが故に、戰時下における重大なる使命を自覺して、こ

こに鋭敏嚴正なるカメラ・アイを以て、あへて國内時局の批判と無自覺なる國民への抗議にまで乘り出さんとする。即ち、現時局を語り、批判する「報道寫眞」をつくり、これを現代に贈らんとするものである。

吾々の意圖と決意を諒とせられ、親切なる識者の批判を仰ぐを得ば、幸ひこれに過ぐるものはない。

主題——その一

今日、日本の畫の半分は忠良なる國民によつて支配され、夜の半分は不良なる國民に依つて支配さる

寫眞構成——日の出と共に働く勤勞奉仕の大群集か、耕作する農民の群の上に、待合で遊興し或は闇取引の相談をしてゐる處をモンタージュする。或は壁の兩面——片方に闇取引の商談か遊興の場面他の方に手内職をやつてゐるそばで慰問袋を女の子がつくつてゐる場面を燒込みその對比に依つて强調す。

批判——勞働階級の搾取の上に社會は構成されてゐると、マルキシズムの公式の上に立つてものを云ふ共産主義は、いつの間にか時局の大波に流されてしまつた。が、今日の日本は國策に添ふものゝ搾取の上に、國策に添はざる者が生活し、忠良なる國民の決死的支援と勞働の搾取に依つて愉安と榮華とをむさぼつてゐる。闇取引や統制違反は味方の軍隊を背後より機關銃をもつて狙擊するに等しく

かゝる徒輩は軍規の裏切者と同様に銃殺に處すべきである。

主題——その二

大學生の眼は戰場につながるや？　殷賑産業の高給につながるや？

寫眞構成——大學校門の前に遙か彼方を見詰めてゐる大學生をクローズ・アップし、その視線の彼方、もしくは頭上に戰場の突擊の寫眞と煙突の林立する殷賑産業とを燒込むべし。

批判——北京の聖者といはる清水安三氏の近作實話「何時再見（ホウリッツアイチエン）」に、戰時下にいかに生くべきかを語る中國少年が「我が大學を卒業した年、まだこの戰爭が續いてゐたら、志願して戰場に出るつもりです」と、立派に答えてゐるが、わが日本の學生のより多くが職場よりも寧ろ殷賑産業の高い給料に心を奪はれてゐないとするならば、國家のためにこれほど慶ぶべきことはない。卒業する大學生の眼は、果していづこにつながるや？　學生を侮辱するものと激昂せず、愛すべき祖國のためにお互に冷靜に反省してみようではないか。

主題——その三

旗の波の感激は單なる感傷主義（センチメンタリズム）だ！　我等は欣然大陸に征く！

寫眞構成——宮城の前に應召の赤だすきをかけ、敬虔なる遙拜を捧ぐる兵士と、支那大陸に砂塵をあげて行軍する勇壯なるわが軍を二重燒をせよ。

批判—眞面目なる知識階級の歸還兵の語るところに依れば「所謂旗の波の感激といはゆる驛頭その他の見送りは有難迷惑でこの旗の波の感激なくしては、東亞新秩序の建設のための光榮ある聖戰に感激を以て働き得ないといふが如き、一種の感傷主義殺那主義は、悠久なる大陸經營の擔當を引受くべき東亞の盟主として最早や清算されなければならぬ。吾々は銃後の生產力を一寸でも割せないために又聖戰に從ひ得る光榮ある義務に自覺し、欣然として一切の見送や餞別を拜辭して出發すべきである」と。この歸還兵の鋭どい一言こそ、時局の重大性と大陸に於ける使命を强調する千金の價ある警世の批判であり反省である。

主題——その四

銃後の守りとは各自が各々その職場と本分とを守り盡すことである

寫眞構成——工場勞働者、汽船の運轉士の舵輪を握る處、事務所で働く女事務員、鑛山で働く炭坑勞働者、鐵道の踏切番等のモンタージュをせよ。

批判——バケツを持つて防空演習に走り廻ることや寄附金を集めることばかりが銃後の守りではない。一番肝心なことは、各自がその職場と本分とを徹底的に守り通すことであり、又爲政者は國民のすべてにその職場に安じせしむるために萬全の策を施すべきである。

主題——その五

小田原會議か、主婦の務めか？　家庭に還れの叫びは高い

寫眞構成——國防婦人會の小田原會議を中央に圓形に燒き込み、その周圍に家庭に於ける主婦としての仕事、料理、洗濯、子供の養育等を巧みにモンタージュせよ。

批判——主婦を街頭に引き出し團體的訓練や軍事知識を與へることも勿論必要なことではあるが、家庭を忘れたる長々しい小田原會議は、國防婦人會の健全なる發展のためにもとらざるところだ。ドイツ婦人はかつての大戰に際して、料理の廢物を集め利用して數萬頭の豚を飼つたといふ。國防婦人會は主婦が家庭や臺所や子供の養育を通じて國家に奉仕し得る最善の道を考案すべきである。家庭を通じて國家へ奉仕する萬全の策を見出すことは消極的の樣ではあるが、却つて堅忍不拔な持久戰ともいひ得る。何故なら、誰れでも自分の本來の務めを果すことが一番容易で長續きするものである。國

防婦人會が戰時下の婦人運動なら、やはり指導理論と行動綱領を確立すべきが本當の行き方で、ここにも知識階級の協力が必要であり、在鄕軍人にのみその指導を委ね置くべきではない。

主題——その六

銃後の娯樂や慰安はいかにすべきか？

寫眞構成——映畫館や劇場の前に開場を待つ長々しい人垣と水泳、相撲、乘馬、ハイキング等の如きスポーツとモンターヂュせよ。

批判——第一次大戰の長びくにつれ、デカタンになり刹那的享樂に走る國民の娯樂や慰安をいかなる程度に取締るべきかは重大なる國內政策の一つであつた。安價な娯樂や慰安に走らんとする國民を適當なる快樂の方向に指導し組織するためには水泳や相撲、乘馬やハイキングの如き健全にして廉價なるスポーツの奬勵を以てすべきであつて、市町村の如き公共團體が主催者となつて盛んにスポーツの團體的競技を行ふべきであらう。爲政者が時局下にこの種の問題に無關心なるは恐るべきである。

主題——その七

幼兒よ！　汝の皿の上に一物も殘すな！

寫眞構成——幼兒が皿の食物をみな頬張つてゐるところ。迫力あるものが欲しい。

批判——資源を、特に食糧を大切にすべきは戰時に於ける國民の道德であり、義務でもある。老若男女を問はず、全國民に食物の節約を呼びかけ、訴ふべきである。第一次大戰の終る頃、ドイツ國民へパンの配給は三分の一となつてしまつた。即ち、日本なら三合の米の配給が一合となることで、この事實を思ひ起すがよい。

主題——その八

戰士達の精力の原料たる獸肉、菓子、脂肪を送れ！　讀物と手紙を送れ！

寫眞構成——まさに突擊せんとする步兵の精力的な寫眞と戰車の前、或は塹壕の中で手紙を讀む兵士を燒込むべし。

批判——獸肉は節約して魚肉を食ひ、獸肉や脂肪は輸出に當るか、戰線に働く兵士達に送つて、たくましき精力の源泉たらしめよ。そして讀物や手紙や慰問袋も戰場にあつては豐富なる榮養素の一つであることを忘れるな。

（昭和十五年一月記）

附記——この寫眞構成は報道カメラ・マンに對する、プロデユースとして試みになしたるもので、寫眞を對照して讀まれてこそ、始めて興味と意義あるもので、本書の出版に間に合はなかつたのは甚だ殘念で、そのためアメリカの戰時宣傳ポスターを參考に供しておいた。御寬恕を乞ふ。

四、「報道寫眞新聞」論緒言

——寫眞新聞の經營は成立ち得るか——

（一）本論提議の理由

「報道寫眞」がみづからの發表機關を確立し、己が活動の分野を獲得しない限り「報道寫眞」は自らの本質の故に、一定の限界に徒らに足踏みし遂に困難なる行詰に遭遇するに至る。故に「報道寫眞」みづからの成長と前進のために又廣汎な對敵あるひは對內宣傳政策確立のために如何なる犧牲を拂つても、われわれは日刊「報道寫眞新聞」を持たねばならぬ。そして今日に於ては「報道寫眞新聞」の存在と經營は必ずしも不可能にあらず、とは、前章所載の拙論「青年報道寫眞研究會に捧ぐる一文」及び「報道寫眞の軍事的役割」の二つに於て、提唱したる日刊「報道寫眞新聞」創刊の理由であり、またその論旨の要約的な結論でもあるが、日刊「報道寫眞新聞」がたとへ組織的な機構としてなりたち得るとしても、その經營が、はたして可能なるや、あるひは日刊「アサヒ・グラフ」「時事寫眞新聞」の興亡常ならず發刊せる有樣を見て、わが國に於て日刊の「寫眞新聞」の創刊はいまだ時機至らず、尙早の感なきや等の疑問を抱かれるもの決して尠きとしない。客年の十二月四日不肖小生を中

心として開かれたる青年報道寫眞研究會の座談會に於ても、同會スタッフの中からも屢々この質問と疑惑は繰り返されて發せられた。勿論その時も私は「寫眞新聞」の日刊による組織と經營の可能を力說したのであるが、私の提唱せる日刊「報道寫眞新聞」の創刊は必ずしも單にわれわれ報道寫眞家のみの問題にあらず、ジヤーナリズム一般に關する問題であり、しかも報道寫眞研究會々員のみならずわが國ジヤーナリストの間にも、はなはだ著名な、しかも多くの人が日刊「報道寫眞新聞」の編輯と經營の可能を信ぜざる悲しむべき現狀に鑑み、ここに日刊「報道寫眞新聞」の經營ははたして成り立ち得るや？ の問題についての研究を、論述すべき必要を痛感する次第である。

（二）「寫眞新聞」の著名なる否定論

日本新聞界の元老にして、また大正十二年早くも日刊「アサヒ・グラフ」を創刊し、その編輯と經營に最高幹部として參劃したる杉村楚人冠氏は、「アサヒ・グラフ」廢刊の失敗にこりてか、クリーンタブロイドともいふべき寫眞新聞の經營の可能を否定せる著名なるジヤーナリストの一人である。

杉村氏は「新聞紙の內外」（昭和二年日本評論社版）と題する著書に於て「畫の新聞」（同書四一二頁）

なる一項目を掲げ「新聞紙の始まりは畫であつたが、最近の新聞紙はまた畫になつて來た」と說き起し「しかし寫眞と畫ばかりで新聞を作らうとしたつて、それは出來るものではない」と、早くもこれに否定してゐられる。同氏の寫眞もしくは畫による新聞の否定の理由はおよそ次の通りである。

「寫眞と畫ばかりの新聞が出來るものゝやうに思ふのは以ての外の謬見である。現にそんなものが世界中何處にもありはしない。强ひて求むれば、アメリカの新聞の畫附錄がそれであるが、これは獨立した新聞でない。ロンドンの「タイムス」週間が一時こんな畫附錄を大自慢でやつたことがあつたが、これすら間もなくやめて、記事の中に寫眞を挿むことに改めた。

何故に出來ないかといふと、そんな新聞紙は讀者の手に長く留つてゐる力がないからである。新聞紙といふものは、兎角さつと見てさつと棄てられてしまふものであるが、それを成るべく讀者の手に長く持つてゐて貰ふやうにするのが、すべての新聞紙が何より先に努むる所である。記事のない寫眞ばかりの新聞には、この抑留力が全然ない。折角人に見て貰ふつもりで作つたものなら、出來るだけゆつくり手に持つてゐて貰はなければ何にもならない。

夕刊に何處の社でも講談を掲ぐるのはこれが爲めである。その日その日の重要記事だけ入れたのでは、どんな人も一寸目を通したきりでそのまゝ棄てゝしまふ。講談がある爲にそれだけ讀者の手に留

る時間が長くなるのである。戰爭中英國政府から送つて來た宣傳用の戰時畫報は、寫眞もよく、印刷も立派であつたが、あれを受取つた者は大抵一寸見たきりで片づけてしまつた。「アサヒ・グラフ」が日刊であつた當時、ほとんど全部を寫眞にして記事をあるかなきかに少くせよとの注文が一部にあつたが、私はこの意味に於て極力反對を唱へた。

一切の讀物を省いて寫眞ばかりで新聞を作らうなどゝは、新聞紙の何たるかを知らざる者の空論に過ぎない。」（同書四一四頁より四一五頁）

わが新聞界の耆宿楚人冠杉村氏が、千軍萬馬の戰場の經驗とでもいふべき、又ジャーナリズムに於ける貴重な多年の蘊蓄を傾けて「一切の讀物を省いて寫眞ばかりで新聞を作らうなどとは、新聞紙の何たるかを知らざる机上の空論に過ぎない」と餘りにも明白に斷定したるところの「寫眞のみによる新聞」を私は作らうとしてゐるのである。しからば、私の提唱しつゝある日刊「報道寫眞新聞」は、はたして新聞紙の何たるかを知らざる痴人の夢であり、空論に過ぎぬであらうか？

（三）著名なる「寫眞新聞」可能論とダブロイド新聞變遷史の教訓

楚人冠杉村氏が日本新聞界の元老たることはあまねく人の知る處であるが、同氏はまた朝日新聞社にとつては寧ろ唯一の至寶的な存在として自他共に認められてゐる。しかも、皮肉なことには、その同じ朝日新聞社の今をときめく東京營業局長として現職にある新田宇一郎氏こそ、私が此處に著名なる「寫眞新聞」可能論者として、本誌讀者の前に紹介せんとしてゐる人である。

尤も、新田氏のクリーン・タブロイド新聞と私の提唱せる所謂「報道寫眞新聞」との間に、勿論幾何かの經庭があり、特に「寫眞」そのものに於ける理解と認識に於て相當の間隔のあるであらうことは止むる得ざることではあるが、新田氏こそ、わが國におけるタブロイド新聞の唯一無二の熱心なる研究家であり、またクリーン・タブロイド新聞の編輯と經營の可能を信ずる著名なるジヤーナリストと一人でもある。

新田氏は近刊の著書「新聞の現在及び將來」（昭和十四年十月第一書房版）中に「米國タブロイド新聞物語」なる興味ある題目を捉へて造詣深き一文を發表せられたのであるが、われわれは同氏のこの所論より多くの教訓を學ぶと同時に、吾々の今新に持たんとする「報道寫眞新聞」が、從來の所謂タブロイド新聞とその形式に於て、また內容に於て、全然面目を一新しなければならぬといふ確信を抱かせる切なるもののあることを茲に明言して置きたいのである。

勿論同氏も「凡そ一箇の新しき社會事實が發生する際には必ず反動勢力の壓力を受けなければならないので、必要以上の誇張を伴つて出現するのが例である。映畫の如きも然りで、その發生の當初には從つて既成藝術に對比して淺薄なりとか卑俗なりとかの非難が映畫に集中せられた。けれども社會が映畫に慣れて來るにつれてその嘲笑的態度は變じて、既成事實として之を受け容れるやうになり、自然映畫の方でもその態度を改めて一箇の新興藝術としての完成に努力を續けつゝある。これが丁度今日のタブロイド新聞に似て居るので、本論の當初に於て述べたる如く、全米に於て五十に近い三百五十萬部以上の發行部數を有するタブロイド新聞は、今日既にその實驗時代を過ぎてタブロイド新聞道の完成に進軍を續けつゝあるのである」（同書二〇八—九頁）に時代の變化と進展に伴ひ、將來のタブロイド新聞が相當の變化と共に更に一段の飛躍を遂げるであらうことは既に慧眼にも豫言されてゐる。

それてさておき、同氏はタブロイド新聞の出現當時の社會情勢を興味ある筆で描いてゐる。

「一九一九年の六月廿六日と云へば、世界大戰の終幕劇であるヴエルサイユ條約の調印せられる二日前が、世界はヴエルサイユ會議の興奮の渦卷の中にあつた時であつた。此の日にアメリカ合衆國の新聞史に特筆すべき新聞が、紐育市に於て創刊せられた。今日アメリカ新聞中最大の發行部數を有し

タブロイド新聞始祖としての榮譽を持つ、紐育イラストレイテッド・デーリー・ニュウがこれである。

創刊した人は、シカゴに於て最大の新聞シカゴ・トリビューンを、その從兄弟のロバート・マックコミクと共に經營する、ジョセフ・パタースンで、新聞の型は普通新聞の約半分縱十五吋の小型で、總頁數二十頁、第一面と終面及び中央の見開き面には派手な寫眞頁を持つ外、全紙到る處寫眞を入れた新聞と雜誌の雜種のやうなこの新聞が、紐育の新聞賣場に出現した時は、紐育の新聞街は冷淡な目を以て之を迎へたに過ぎなかつた。當時黃色新聞の創始者ピュリツツアーと角逐して、紐育新聞街に君臨するかの趣があつたハーストの如きも、最初は問題にして居なかつた。新聞界一般の觀察は、こんな混合種が永續するものではないと云ふ事に一致して居た中に、唯一人紐育タイムスのカール・ヴアン・アンダのみは、この新聞が他日二百萬の發行部數を獲得する日があることを豫言した。果然二年の後一九二一年にはデーリー・ニュスは紐育市隨一の發行部數を獲得、十九年後の昨年（一九三八年）に於ては、發行部數は普通百七十五萬部日曜には三百二十五萬部を算するに到つた。實に双方共アメリカ新聞紙上空前の數字である」（同書一二三〇—四頁）

だが、アメリカに於けるタブロイド新聞創始者としてのジョセフ・パタースンの影には、世界新聞

界の巨人ノースクリフ卿の隱れたる助力を無視することは出來ないバタースンが研究してデーリー・ニュースを創刊する際の範としたノースクリフ卿經營の倫敦デーリー・ミラーは、實に一九三〇年英國に方てノース.クリフ卿により創刊せられた世界タブロイド新聞の鼻祖とも云ふべきもので、タブロイドを論ずるに當つて逸すべからざるものであり、バタースンに「ニューヨーク」ならタブロイドが成立する。若しも誰もやらないなら自分がやる」とタブロイド創始の指針を與へたのは實にノースクリフ卿そのひとである。

ノースクリフ卿がいまだハームスオースと呼ばれた頃彼は大衆新聞デーリー・メールーの創始を以て滿足せず、更に一歩の前進を企てた。英國に於ける否世界に於ける最初のタブロイド新聞として一九〇三年に創刊せられたデーリー・ミラー紙が即ちそれである。

デーリー・ミラーは半片(ペンス)の廉價な新聞であつたけれど、創刊數週の後には、その發行部數は四萬部まで慘落するに到つた。が、寫眞を輪轉機によつて印刷することに成功するに及び、俄然面目は一新せられ、二年後には大陸版を合せて、發行部數は百萬部と云ふ英國新聞界には驚嘆に價するものとなつた。この寫眞新聞こそ世界最初のタブロイド新聞で、大衆は歡呼してこの新しい新聞に殺到したのである。

純然たるタブロイド新聞の形式と寫眞を唯一の賣物として出現した新聞は、デーリー・ミラー、紐育デーリー・ニュースの他米國のデーリー・グラフィック、ハーストが一九二四年に創刊した紐育デーリー・ミラー、ヴアンダビルトの一九二三年羅府に於て發行せるイラストレイテッド・デーリー・ニウスと桑港にて一九二三年發行せる桑港イラスト・レイテッド・デーリー・ニウス、サイラス・カーチスの一九二五年に發行せるフィラデルフィア・サン紙、紐育イヴニング・ポスト紙その他多數あるがこれが紹介と研究は本論がタブロイド新聞の研究が目的にあらざる　故に、他日の機會に讓るがエジター・アンド・パブリッシャー誌によれば、一九三七年アメリカ合衆國に於ける全タブロイド新聞數は四十九、總發行部數は普通三百五十二萬五千部、日曜日には約七百萬部を算するに到つたのである。デーリー・ニウスが一九二一年に呱々の聲を擧げてより僅かに十六年にして、タブロイド新聞の黃金時代を現出しようなどとは當時のアメリカ一般新聞界の夢想だにしなかつたことであつた。

新田氏はタブロイド研究の結論として「要するにタブロイドが新聞界に及ぼした影響は、一箇のニウスの集約的報道と刑事問題のセンセイショナリズム及びスポーツの劇化報道と寫眞及び讀物の潤澤なる供給の數語に盡きるのであるが、之は必らずしもタブロイド新聞に始まつたことではなかつた。ハーストやピュリツツアーの黃色新聞が既に用ひた手法を、タブロイドは現代化し普遍化したに過ぎ

なかつたのである。

次にタブロイドが如何にアメリカの現代世相を反映したかの問題を考へて見る。タブロイド新聞が寫眞を掲載して大衆を獲得したことは、見ることに對する信頼の增加を意味する。黄色新聞の罪ばかりでもないが、大衆は最早や新聞で讀むことに對する信頼の度を非常に薄くして居た。然し彼等の目に見える寫眞を供給すれば大衆は納得する。加之寫眞による報道は如何なる報道よりも明確である。現今に於ては米國の大衆が見ることによつてニウスを得て居ることは莫大なもので、毎月映畫を見る觀衆は大約二千萬人と稱せられるが、この二千萬人の大衆は必らず映畫ニウスでニウスを見る。單獨にニウス劇場を經營してゐる館があるから、この數字は更に增大することは確實であるが、こに以外に毎週數百萬部を發行する寫眞週報が多數あつて、目によつてニウスを供給する。新聞、映畫、寫眞週報いづれも見ることに對する大衆の信頼を裏書するものであるが、この傾向は更にテレヴィジョンの完成によつて拍車をかけられんとしつゝあるのが、アメリカに於ける見ることによる大衆のニウス獲得の現狀である」（同書二一五頁—六頁）タブロイド新聞の報道の簡單化は交通機關を始め萬般の現象がスピードを尊重する時勢のテンポの反映であり、盛澤山な讀物や漫畫に讀者を喜ばす方法は、複雜なる現代生活の大衆の慰安として之に代はる遊びの代償として、スポーツ記事等と共にタブロイド

新聞が提供せるものである」（同書二一七頁）

日本に於て創刊せられた唯一のタブロイド新聞たる日刊アサヒ・グラフは同時に日本に於ける唯一のグリーン・タブロイドであつた。日刊アサヒ・グラフの創刊は大正十二年（一九二三年）一月廿五日で、紐育デーリー・ニウスこそ既に創刊せられて居たが、ハーストの紐育デー・ミラーの創刊に先だつこと一年半であるから世界タブロイド新聞史にも特筆せらるべき事實である。……だが不幸にして創刊八ケ月、關東大震災の爲に發行不能となり、今日の週刊アサヒ・グラフとしてその名殘りを止めてゐるのは、天災による廢刊とは云へ殘念なことである。

「かくの如くクリーン・タブロイドはその興亡常ならず、廢刊せるもの相次いだ爲、タブロイド新聞として存在し得ざるものゝ如くに考へるものもあるが、實際に於て適當な經營方針の下に適材を以て經營せしむれば獨立して存在し得ることはボデーの羅府ニウスに見ても明白であるが、そのタブロイド新聞の利益と一流新聞の氣品とを兼備したクリーン・タブロイドは、今後に殘されたる問題であるかも知れない。

唯米國に於ても一般タブロイド新聞が、米國財界の不況以來漸次一流新聞に接近して眞面目な方向に進みつゝあるの事實は、クリーン・タブロイドの將來又決して悲觀すべきに非らざるを語るものと

云はねばならぬ」（同書一九九—二〇〇頁）

タブロイド新聞の眞摯なる研究家新田氏は「適當なる經營方針の下に適材を以て經營せば」獨立したるタブロイド新聞存在の可能を說かれ、且又タブロイド新聞の將來又決して悲觀すべきにあらざることを强調せられ、茲にはしなくも又皮肉にも楚人冠杉村氏と全く對蹠的なる結論と豫想とを相抱かれ、導き出されてゐるのである。しかし、私の提唱し且つ創刊せんと企圖しつゝある日刊「報道寫眞新聞」は、米國のタブロイドが寫眞を滿載したりと雖も、デーリー・ニウスに於て寫眞は全スペースの五分の一を占めており、殘りの五分の一が讀物、その三分の一が廣告といふ具合で、ニウス記事及び讀物に代る「寫眞」を以て唯一の生命としたとは云へ、寫眞の全スペース上に於ける地位はいまだ相當低位に於かれてあつたのである。

（四）東西ジヤーリストの「寫眞」に對する認識の差違

ハーストは「一枚の寫眞は一千語の記事に優る」と喝破したが、楚人冠杉村氏が「寫眞のみによる新聞」を作らんとするが如きは、新聞紙の何ものなるかを解せざる空論家に過ぎぬ。と寫眞新聞經營の可能を輕率にも亦勇敢に否定せられたのに對比すれば、東西兩ジヤーナリストの寫眞に對する認識

に於てまさに雲泥の差異ありと云はざるを得ない。

生産手段と科學の發達はかつて夢にも描き得ざりし飛行機の製作に成功した。現代の進歩せる寫眞工業と寫眞技術と、しかして、カメラ・マン自身のジャーナリスティック教養の向上が「寫眞のみによる日刊新聞」の編輯の營の問題を征服し得ない筈はない。しかも、われわれのいふ「報道寫眞」新聞は、楚人冠杉村氏は勿論、かのハ！ストでさへも夢想し得ざりし「寫眞」——即ち、一枚の寫眞が既に一箇の物語であり、批判であり主張であり更に報道的センスの豐富に盛り込まれる「寫眞」によつて滿たされて出現するであらう。

尤も、楚人冠杉村氏と雖も「寫眞」が既に大衆の心理を深刻に捕へつゝある事實を否定せられた譯でなく、記事や物語の全然ない「寫眞のみによる新聞」經營の不可能を斷言せられたるに過ぎないのであるが、同氏は當時（昭和二年頃）はたして社說でさへも「寫眞」に依つて主張し得るといふことを想像きれたであらうか？　また單に「讀む時代」より「見る時代」に移りつゝある多忙な、また浮氣な近代人の生活樣式の變遷といふよりも以上に、讀者大衆の「寫眞」に對する理解の急速なる進歩と、報道寫眞家自身の所謂「カメラ以前」の社會觀や教養並に人格の向上が、大衆の心を捉えて離さぬ「寫眞」の製作にまで既に突き進んで段階にある「今日の寫眞」を眞に理解し認識してゐられたで

あらうか？　講談や記事がなく「寫眞」のみによつては一見忽ち棄てられる樣な淺薄なる「寫眞」は即ち、一枚の寫眞になんらの批判も主張も報道さへもない樣な「寫眞」はいつの時代に於ても、よしまた如何なる記事を以て粉飾されようとも、寫眞自身に內容と迫力なきものは、必ず棄て去られるのである。

（六）新聞製作以前の問題解決——大衆を把握する優秀なる寫眞製作が緊要

だから、われわれが提唱しつゝある日刊「報道寫眞新聞」の編輯と經營の可能と不可能——成立と失敗との分岐點は決して、新聞製作技術の問題でも、また經營の經濟的に成り立ち得るや否やの問題が、先決問頃にあらずして、われわれの製作する一枚の「報道寫眞」が眞に大衆を永續的に捉え得る底の優秀なる作品が、はたして製作し得るや否やの問題にかゝつてゐるのである。この新聞を日刊を以て進むとせば、われわれは日夜相當なるスピードを以て、相當多量なる寫眞を、ニュース的角度より撮影し、しかも飽くまでスピーデイに印刷に附さねばならぬ。

だが、かくの如きは如何に優秀なまた精力的なカメラ・マンでも到底なし得るところではない。だ

から、われわれが希望し大衆が要求するところの「寫眞」を製作するためには、優秀なるカメラ・マンと同時に優秀なる企劃家即ちプロデューサーが、またレイアウト・マンがさらに所謂モンタージエストが多數養成され、どし〳〵活躍し成熟しなければならぬ。

「報道寫眞」にとつて所謂「カメラ以前」の社會的教養が不可缺な必要條件である如く、日刊「報道寫眞新聞」創刊のために、不可缺な問題は、寫眞新聞製作以前の、先づ第一に優秀なカメラ・マンこれと全く相關的關係にあるプロデューサー・レイアウト等の問題が征服され解決されねばならぬ。

しかも、報道寫眞研究會に於て又寫眞界一般に於ても、これらの問題に關する研究と實踐の展開がいまだ殆んど着手されずにゐるのである。

われわれは日刊「報道寫眞新聞」創刊、といふ輝やかしい現實的な目的達成のために、これら困難にして興味ある先決的な問題解決のために、不屈不撓の努力を以て、今こそ實踐的に突き進まねばならぬ。

この意味に於て私の全く試作的に製作せる「カメラで衝く時局の批判——國策双曲線」と題する寫眞の構成と製作には、青年報道寫眞研究會々員諸兄の是非とも御協力を願ひこれに成功しなければならぬと信じてゐる。

（昭和十五年一月記）

五、寫眞批評家に對する批評

——寫眞界當面の諸問題について——

（一）時評家多藝留氏に與ふ

「フオト・タイムス」誌に毎號寄稿される多藝留氏の「寫眞時評」を私も毎月面白く讀まされてゐる一人であるが、忌憚なく云へば、極めて寫眞界の表裏の事情に通ぜる、この匿名批評家の「寫眞時評」は、單に面白いだけで、その面白さも樂屋落ち的な批評の面白さであつて、殘念なことには折角のその批評が、批評をうけることに依つてその人格も高めなければ、知性も深められはしないことで、多藝留氏の言葉を借用すれば、それは「批評らしい批評」でなく實は多藝留氏自身もまた批評による精神の高揚から「逃げて」ゐるといはざるを得ない。

私も多藝留氏の端的にして、また卒直なる物の言ひ方に對して、その勇氣と正直さに敬意を表するに吝かならざるものであるが、こうしたシニカルな、そして極めて皮肉の多い批評が、はたして今日の寫眞界に、とくに報道寫眞家達に必要であらうか？

同氏が昭和十五年三月號のフオト・タイムス誌上にいみじくもとりあげられた「寫眞家の人格と知

性」とを、批評をうけることによつて飽くまで高揚させ深化せしめるような、そして溫い手をさしのべて指導し鞭撻するような、親切と溫情に滿ち溢れた批評こそ、必要にして有意義な仕事ではあるまいか、と私は信じてゐる。

多藝留氏の批評は「寫眞家の人格と知性」といふ、まことに適切なる問題を捉えながらも、却つて寫眞時評家たる多藝留氏そのひとの「人格と知性」を、疑はしめるやうな印象を與える結果となつてゐるのは、かえすゝも殘念である。これは一言にしていふなら誠意と溫情の不足である。

この際同氏がこの點について、即ち批評家としての誠意と溫情の不足といふ自己の態度について、更に一考を煩はされるならば、同氏の「寫眞時評」に、われわれは將來もつと多くを期待することが出來るであらうと思はれる。

(二) 二人の「私信」は何を語るか?

私は三月號の「フオト・タイムス」を一讀するやすぐ樣、畏友泉玲次郎君に『貴兄の「歐洲大戰と寫眞」を讀んで多藝留氏の「批評らしい批評をやらないで逃げてゐる」との非難が必ずしも不當でないのを殘念に思つてゐる。貴兄の歐洲大戰と寫眞」は單なる紹介屋の紹介に止まり、歐洲大戰と寫眞と

の關係を紹介することによつて、我が國の軍事宣傳寫眞にまで突き込んだ批評が積極的に展開されてゐない。我田引水的になるが現に私は「報道寫眞の軍事的役割」なる論文をもつて、對敵攪亂戰術としての寫眞の効用と偉力について語つてゐるのであるから、日本の寫眞界に始めて新に提唱された、私の「軍事宣傳寫眞」を批判されつゝこの問題——歐洲大戰と寫眞——を紹介されたなら、さらに有意義であり、また時局との關係に於いて、現實的な問題となり得たであらう」といふ樣な意味を、色々と述べた私信を送つたのであるが、この私の不躾なる批評と忠告に對して、折返し泉君の返事に接した。

曰く「小生の最近のフオト・タイムス紙上での仕事振りに關する御忠告は誠に御尤もで、實は小生自身も種々反省しつゝあつた問題です。特に昨年の夏以來健康を害して研究會の例會にも出席を怠る樣な事情だつた爲めに益々紹介屋的傾向に停頓するに至つた次第です。然し、多藝留氏の云ふ「熱がない」と云ふ表現に對しては小生自身必ずしも肯定出來ぬものがあります。それは勿論熱と云ふ言葉の解釋如何に依る事ですが……少くとも寫眞を愛する氣持、寫眞ジヤーナリズムの意義を高く評價し、日本に於けるその正當な發展を欲求する熱情に於ては小生も決して人後に落ちないつもりですが、それと同時に小生の性質として、所謂ハツタリがやれないこと、又過去に於て報道寫眞論を書き或は同志と論じあつた經驗からして、理論の空廻りを恐れる氣持が相當强く働いてゐることは否定出

來ません。これらの事情が重なり合つて結局「逃げてゐる」現象を生むことになつたのだと思ひます

要するに小生として今迄に展開して來た報道寫眞乃至それに關聯する理論が現在行き詰りの形にあることは認めざるを得ません。その打開の爲めに貴兄の如き新鋭な批評家の活潑な理論の展開が是非必要なのです。それが小生にとつて多藝留氏の所謂「ヴイタミンかカルシウム」の役割を努めてくれること疑ひないと思ひます。幸ひ氣候が良くなると共に健康の方も快方に向つてゐるので近く御期待に添ふ樣な實のある仕事を纏めることが出來ると思つてゐます。

それと同時に現在なんと云つても必要なのは理論的活動だけでなく、既成の又今後報道寫眞を志す實際家達が仕事の本據とすることの出來る刊行物の實現です。相憎く誠に時期の悪い現在ですが、然しこれなしには日本の寫眞ジヤーナリズムは恐らく永久に發展しないでせう。その意味に於て貴兄の寫眞新聞の提唱は大きな意義があると信じます。(中略)お互に頑張つて無氣力な日本のジヤーナリズムの爲に警鐘を鳴らさうではありませんか。

最後に三月號の拙稿「歐洲大戰と寫眞」に就いて——又申譯になるので恐縮ですが——實はあの原稿は新年號に載る豫定で、奈良原氏と打ち合せ、新年號向きに寫眞を多く使つた肩のこらぬものと云ふ注文で、當時手近の材料を集め十數枚分の寫眞と合せて締切に間に合せたのですが、製版の手違ひ

とかで新年號に載らず、組置きとなり、二月が例の大陸特輯だつたので遂に三月號迄延びて了ひ、更に寫眞も多數省略の餘儀なきに至つた譯です。豫定通り新年號に出で寫眞も澤山載ればいさゝかジャーナリスティックな意味があつたと思ひますが、三月號では何としても氣脫けの態で讀者に申譯なく小生自身も不滿に思つてゐる次第です。たとへ海外のものゝ紹介でも小生としては日本の現狀に對して何か意義あるものをと心懸け從來いつもその氣持ちでやつて來たのですが、今回は明らかに失敗でした。今後は更に愼重を期したいと考えます……(後略)」

私と泉君と、この二人の私信を、ここに公開したことは、多藝留氏が「寫眞で生活してゐる人間の中、自分の批評をされて、その批評を批判して少しでも自己の進步をたすけ樣と云ふ樣なきとくな考を持つ寫眞家が幾人ゐるであらうか？一萬人に一人位はゐるかも知れない。それもあやしいものだ」と云はれる、極めて悲觀的なる觀察に對する、ある意味に於ける抗議であり、また同氏に對する慰めの言葉でもあるのです。勿論われわれは寫眞家でなく、より多くカメラジャーナリストであるかも知れないが、批評家としても泉君の如きあり、又多數の常に自己の進步を心懸けつゝあるきとくな青年寫眞家のあるを私は知つてゐる。多藝留氏よ！　その點もつと安心して欲しい。

なほこゝでフォト・タイムス編輯責任者〇〇〇氏にも一言苦言を呈して置きたいのは、編輯上の手

違ひや發表の時期を逸することが、かくの如く良心的なジャーナリストにとつて、ある場合には、むしろ致命的な打撃や損失を與へさえするものであることを暮々も銘記され、手違ひを生じた場合、どんなに忙がしくとも、執筆者と十分連絡をとられ、その意向を尊重され、萬遺洩なく運ばれんことを切望して止まない。

(三) 泉君との誓約

泉君と私のこの手紙の往復がなされた後に、私は間もなく上京して、銀座のある茶房の一隅で、同君と對面した。それは春とはいへ寒さの嚴しい三月二十三日の夜であつたと記憶してゐるが、懐かしげに對談する二人の顏はいさゝかな昂奮に輝き、熱心にまた眞劍に寫眞界當面の諸問題についての激論が闘はされたのであつた。先に紹介した泉君の私信の中でもいふ樣に「ライフ」や「ジグナル」のやうな定期刊行物を持つことについての必要や、私の提唱する「寫眞新聞」が企業的に可能なるや否やについて、或や多藝留氏の批評、土門氏の仕事等が盛んに二人の話題を賑はせ時間のたつのもつひ忘れ勝で、最後に私は「寫眞ジャーナリズム講座」を發行することや、この講座を出版しつゝ新進のカメラ・マン養成のためにカメラ・ジャーナリズム夏期講習會のやうなものを開くこと、それから批評は

なるべく具體的に、理性と同時により多く感情にも訴えるやうに書き、お互に理論の空廻りに依る徒勞を少くするためにテーゼ‖アンチ・テーゼといふ樣に一問題の理論的發展の促進をはかるために大いに協力すること、批判の批判をお互に忘れずに實行すること等を約束して、同君と別れたのは、銀座の店々もすでに表戸をとざさんとする十一時近い頃で、カメラ・ジャーナリズムの前進のために互に健闘を誓つたこの夜の感激を、私は決して永久に忘れないであらうし、この誓約の實現のために大いに努力したいと思つてゐる。

（四）「カメラ」以前の知性

私はある日名譽の歸還勇士を迎えるために〇〇〇驛のプラットホームに立つてゐた。そこには私と同樣歸還勇士を歡迎する澤山な人々が手に〳〵日の丸の旗を持つてゐた。間もなく大陸の思ひ出と戰塵を乘せた列車がホームの中へすべり込んで來た。皆んなは萬歲々々と聲高らかに叫んで知人の勇士の顏を探し求めた。

その騷然たる驛頭の歡呼と感激の一隅に、私は國防婦人會のタスキを掛けた老婆が、一人の兵隊に赤くうれたリンゴを與えてゐるのを見た。しかし、その兵隊は嬉しさうに兩手に抱いたリンゴを、そ

のすぐそばに腰掛けがあるにも拘らず、ニコ〳〵しながらそれを眺めてゐる、老婆の足許のホームの土の上に風呂敷をひろげて、そのリンゴを兵隊は包んでゐた。

私はハツトして、この一場の光景——老婆とリンゴを土の上で包む兵隊——をカメラに收めようとしたが、相憎く私はその時カメラを持つて來なかつた。しかし、この場面の印象はその後久しく私の腦裡に燒きつけられて忘れることが出來なかつた。

もし、私がこの一場面の撮影に成功してゐたとしたら、恐らく、私はこれを「**大陸の習慣**」といふ題をつけ、そして「長い大陸での習慣は、兵隊を土に親しませ、土の上で食ひ寢ころび、物を包んだり仕事をすることを、何とも思はないようにした。だから、すぐそばにテーブルに代る腰掛けがあつても、兵隊は國防婦人會の老婆から貰つたリンゴを平氣でホームの土の上で包む」といふ説明を書いたであらう。

私は決して自己の觀察の鋭敏を誇らうとするものではないが、もしも報道寫眞家が驛頭の慌しい歡送迎のうちに、こんな場面を目擊したとしたら、カメラ・マンの幾人がはたしてシヤツターを切つたであらうか？　兵隊がリンゴを包む一場面の中に、兵隊達の長い大陸の習慣と勞苦を思ひ、その感激と感謝の燃燒によりシヤツターを切るシヤープな感受性と知性とを働かし得る報道寫眞家が幾人ゐる

であらうか？

われわれが日常隨時隨所に眺めうる、卑近な情景のワン・カットから、ヒューマン・ライフにおける無限の意味と情趣を汲みとりうるところの準備と教養こそ、泉君によつて提唱された「カメラ以前のもの」であり、寫眞家にとつて必要な人格と知性と情熱ではあるまいか！

この同じ問題について三月號の同誌に「カメラ以前のもの」に就いて、と題して、仙波巖氏が、また「報道寫眞の藝術的高化へ」と題して龜倉雄策氏が、それぞれ檢討を加へ、思索を深めてゐられるのは近頃にない愉快なことである。

「寫眞するといふことは寫眞機械のシャッタ！を押す以後に現れた結果である。であるから「寫眞作家」は實に寫眞機械を操作する以前に生命がありモラルがあるのである」

「作家」の優劣は實にシャッターを押すといふオートマテズムの運動よりも以前に「寫眞への創意性」が決定するのである「寫眞への創意性」のよさ惡さは「作家」の知性の高さ低さによること勿論だ」

「寫眞が文化的價値を持ち」社會的な位置を獲得したのは實に「寫眞作家」の深い思索によつたものだ。この思索は寫眞をしつかりした意味で「藝術」の分野に登場出來る樣にしたのである。それは

寫眞作家の思索がレンズといふ正確な現象性上のリアリズムを通じて、さらにそのリアリズムも或は嚴しきリアリズムもそこに批判があつて、初めて社會性（文化性）を持ち得るのである」（以上フォト・タイムス 昭和十五年三月號五六頁）

龜倉氏のこの論策は泉君の所謂「カメラ以前」のものに對する內容を、さらに的確に言ひあてゝおり、またその思索と精神とを豐富にし高揚せしめるに足る優秀な論文で、かゝる論議と思索こそ、報道寫眞家は勿論、多くのカメラ・マンの人格を高め知性を深めるよきパイロットとなるであらうことを私は信じて疑はぬもので、龜倉、仙波兩氏の御健闘と自重を切望してやまない。（昭和十五年四月記）

六、寫眞家よ武裝せよ

——寫眞界の新體制——

（一） ヒットラーの勇斷に學び在野の提案を採擇せよ！

私は既に「宣傳寫眞の軍事的役割」なる一文を發表し「宣傳の分野にあつて寫眞ほど有效適切なるものはない。しかも優秀なる技術と頭腦と教養と膽力とを持てる報道寫眞家が、寫眞界の王座を占むるとせば、軍事上に於けるこの種の役割を果し得るものは、萬能なる報道寫眞以外にその資格あるものは恐らくないであらう。報道寫眞の軍事上に於ける役割と使命また大なりといはざるを得ず、吾々は未踏のこの境地にも新なる勇氣を以て進まねばならぬ」といひ、さらに「寫眞政策の確立は勿論、あらゆる宣傳を含めての政策を支配する組織機關——宣傳省の如きを我國に於てもつくらねばならぬ」と結論したのである。

報道寫眞の宣傳的效用の優位性と、その軍事的役割の重大性を强調せるこの私の論文は、私の知る限りに於ては、不幸にしてこの種の問題に特別の關心を有する二、三の軍報道部員の個人的なる注目を惹いたのみで、廣汎な宣傳政策——特に寫眞の利用に依る——確立に對して、まことに不勉强なる

わが官邊の殆んど顧みる處とならなかつたが、ドイツは今次大戰に於てフオン・ヴエデル中佐が建議した——私の提唱せるものとその主旨に於て殆んど變らない——「報道中隊」の編成を、ヒツトラー總統は英斷にもゲツベルス宣傳相をして採用せしめ、戰局に於てのみならず宣傳の分野に於ても亦ドイツ軍の壓倒的勝利に歸せしめたのであつた。

（二）ドイツの報道中隊は如何に活躍しつゝあるか！

ドイツ軍の報道中隊（Piesse Kompanio）に關しては、すでに本書の他の論文に於て紹介されてゐるが、今少し詳細に、且つ、私の批判と主張を加へつゝ論述を進めよう。

この報道中隊の創案者はハンツ・フオン・ヴエデル中佐で、彼は今回中隊のベルリン司令官となつて活躍してゐる。このPK司令官の支配下には二百名の記者と四百名の寫眞、漫畫、映畫、戰爭美術ラヂオ解說の技術家が網羅されてゐる。

そして、ポーランド進攻に七名、ノールウエイ作戰には十六名の報道中隊員の戰死者を出してゐるノールウエイ作戰には五十名の記者と百名のカメラマンが配屬されたのであつたが、この十六名の戰死者といふ比較的多い數字から見て、銃劍をとりつゝ活躍するPK隊員がいかに勇敢であり危險な活

動をしてゐるかゞ解る。

ノールウエイ進攻に配屬され、軍艦ブリュツヘル艦上に、丁度ハーン大尉がカメラを動かしてゐた折も折、海岸砲臺の彈丸が命中して忽ちブリュツヘルは沈沒したので大尉はフイルムを濡らさぬように岸に泳ぎついたが、彼は直ぐにノールウエイ軍に捕えられたので、止むなく光線をフイルムに入れて敵手にこれを委ねることを避けたといふ一エピソードもある。

（三）犧牲的精神はカメラ戰士にとつても最高の道徳である

かくの如く、PK隊員は軍務と情報の二つの職能を持つており、ノールウエイを攻略する軍艦の上にも、セダン要塞に迫るタンクの中にも、英本土を襲ふ爆擊機の上に、はた又英艦を狙ふ潛水艦にも起居して、カメラや無線やペンを縱横に驅使しつゝ作戰と宣傳資料を蒐集記錄してゐるのである。

「事實は最上の宣傳なり」といはれてゐるが、PK隊員の戰況記事並に寫眞が、第一線の生々しい實感の溢れてゐるのも、またそのため英國側の老獪なる逆宣傳を餘すところなく封じ、さらに戰時宣傳組織の强力なる推進力となり得たのも、PK隊員のこの決死的奮戰の賜であつたのだ。

PK前線アパートに集められた報道は、一度ベルリンのPK司令部に送られ、宣傳省にて編輯され

て、國内國外のそれ〴〵の機關に配給されてゐるが、今私が、茲に、問題にせんとするのは、羨望に堪えないとはいへ、ドイツ軍の完備され、統制ある宣傳組織の優秀さではない。ヒツトラー總統が、宣傳分野に於ける報道中隊の編成といふ全く新らしい企劃を採用する先見の明と勇斷に對してであり宣傳省の各分野（通信、カメラ、ラヂオ、漫畫、美術）等に亙る技術者（エキスパート）が、この危險な、そして重要なる任務に勇躍從事したといふことである。

（四）新體制建設を自らの問題として解決せよ

しかし乍ら、報道中隊の編成といふ宣傳分野に於ける新なる計畫も、大戰前すでに宣傳省の統制ある組織下に、通信報道、映畫、美術、寫眞、ラヂオその他の部門に亙る文化戰線が、一定の指導理論によつて打ち貫かれ、不斷に訓練され準備されつゝあつたればこそ、ヴェデル中佐の進言を採用することも出來たのであり、また、これを具體化し所期の效果を擧げ得たのである。

だが、いまこゝに平時に於けるわが當局の怠慢や不見識を非難する暇を、幸か不幸か、私は持ち合せてゐないし、また、寫眞政策をも含む廣汎なる宣傳政策の確立の急務を、政府當局に要望し、或はこれに期待することに依つてこの問題——即ち寫眞政策の確立——は、決して實現されるものでも、

解決され得る性質のものでもない。否むしろ、寫眞政策の確立こそ寫眞界それ自身がみづからの問題として、新體制への積極的參加の再整備をなす以外に、即ち、己自身を總力戰——全體主義的機構——の一翼としての再編成を成就し、實現すべく努力する事以外に、これを解決する道はないのである

（五） 新體制への第一歩はイデオロギイの清算にある

しからば、わが寫眞界——特に報道寫眞——は、いかにし、新體制へ準備し、しかして、それ自身の新なる體制を成し遂げるべきであるか、といふに

第一にカメラマン自身の自由主義的イデオロギイの清算であり、從つて、全體主義的イデオロギイの把握である。

いかに苦しくあらうとも、公益をして私益に先んぜしめんとする愛國的犧牲精神があつてこそ、聖戰最後の目的が貫徹できるのであり、報道中隊の如き輝やかしき戰果が獲得できるのである。

カメラマン自身の自由主義——個人主義の清算こそ、カメラ以前——シヤツター以前の知性と教養を第一の前提條件とする報道寫眞家にとつて、何よりも最先に解決されなければならぬ、第一歩であらねばならぬ。

私の當面しつゝあるより大なる仕事の多忙さから、止むなく遠ざからんとした寫眞界へ時局の荒波は、容赦なく再び、私に「寫眞界の新體制」に就いてその活動を要求しつゝあることは、個人的な問題としてではなく、又單なる寫眞界の更生としての問題ではなく、實に國家のために同慶に堪えないところである。

（六）寫眞界新體制への當面の任務はこれだ！

更に寫眞界の新體制について、私の希望するところを率直簡明に申し述べておこう。

第二に、私の叫びたいのは、カメラ戰士の參戰義勇軍の編成志願である。

第三は、寫眞週報、編輯組織の改編であり、その陣營への積極的參加である。

第四は「寫眞週報」强化擴充のため他の不急不要なる寫眞雜誌の檢討に依る廢刊の要請であり「寫眞週報」への一元的合流をなすべきための要請の如きは、直ちに斷行すべきであり、カメラマン自身が主體となつて、その運動を起すべきである。

第五は、戰時中軍用寫眞、科學及び學術寫眞、內外宣傳寫眞、啓蒙・文化・教育寫眞・銃後强化その他情報局に於て必要と認める以外の寫眞の撮影を、フィルムその他資材確保のために禁止すべきで

あり、アマチュアは以上の寫眞撮影に協力する以外は自肅すべきである。

第六は、報道義勇隊或は軍報道部志願のカメラマン、報道記者、宣傳員等の指導と訓練のための組織的機關の設置である。

第七は、映畫、スチール寫眞の反時局的寫眞檢討排擊のための機關の自發的設立である。

第八は、アマチュア寫眞團體のかゝる意味に於ける再編成であり、又その適切なる指導である。

第九は、アマチュアの高級寫眞機の軍部又は報道義勇隊への獻納運動である。

第十は、アマチュア・カメラマンに依る宣傳と防諜運動への積極的參加とその指導である。

その他、色々あらうが、今思ひつく儘をなんの說明もなく提唱する事は、恐らく、不親切と輕率のそしりを享けるかも知れないが、以上提唱せる限りに於て大した間違ひを犯してゐないものと信じてゐる。

しかし、希くば「寫眞界の新體制」を單なるジヤナリスティックな興味の問題として迎合することなく、飽くまで眞面目なる寫眞界自身の死活を意味する再編成の問題として、採りあげ解決さるべきを、くれぐれも注意し、要求しておきたい。

（七） 戰時下にカメラマンは如何にすべきか

「祖國が生死の戰爭を行つてゐる時、作家は如何にすべきか！　そのペンが國家に仕へる唯一の武器であるとしても、作家は平時と全く同樣な創作活動に携つてゐるだけでよいか？……」と、いふ極めて嚴肅なる問題を最近イギリスの小說家フイリツプ・リンゼイが近刊の小說の序文の中で提出したのに對して、ある新聞がこれに答へて「かゝる時期にあつては、アカデミツクな考察にふけるべきでなく、作家はみなすべて現在の戰爭を勝利に導くに役立つものを書くべきで、さもなければ、何も書かぬがよい」と述べたのであるが、寫眞創作の仕事においても同樣、國民のすべてが敵機來襲に備へて空をみつめ、或は銃を持つて戰火の中を驅けめぐつてゐる、重大なる瞬間に、所謂「象牙の塔」にこもり過去の幻想にふけつてゐることが、われ〳〵に許されるであらうか？　戰爭のために殆んどなんの役にも立たない「窓の花」や「光の瓦」や「女の後姿」を撮してゐることが出來るであらうか斷じて否！國民のすべてが、最後の一人まで、まづ戰爭の勝利——わが聖戰目的家遂——のためにそして、所謂東亞共榮圈確立のために、思想し、活動し、準備しなければならぬ。

即ち、この總力戰の名譽ある協力者たらんとするカメラマンよ、今こそ、日頃鍛えた諸君の腕とカメラとを持つて、奮起すべき秋である。私が提案せるが如き寫眞界自身の新體制確立に協力、奉仕すべきではなからうか！

附錄

「宣傳研究」參考書

（左記參考書は小西鐵男氏調査のものに著者の增補せるものである）

一般的プロパガンダの研究書

Adler, G.: Die Bedeutung der Illusionen für Politik und snziales Leben, 1904.

Bauer, W.: Die öffentliche Meinung und ihre geschichtlichen Grunplagen, 1914.

Birn baum, A.: Das Wesen der Propaganda, 1920.

Eltzbacher,: Die Presse als Werkzeug der auswartigen Politik, 1918.

Gersdorf, K.: Ueber den Begriff und das Wesen der ôffentichen Meinung, 1846.

Hendrich, F. J.: Ueber den Geist des Zeitalters und die Gewalt der öffentlichen Meinung, 1797.

Holtzendorff, F.: Wesen und Wert der öffentlichen Meinung, 1880.

Kulke, E.: Zur Entwicklungsgeschichte der Meinungen, 1891.

Park, R. E.: Masse und Publikum, 1904.

Pieper, K.: Die Propaganda, 1922.

Plenge, J.: Deutsche Propaganda, Die Lehre von d. Propaganda als prakt, 1922.

Schultze-Pfaelzen, G.: Propaganda, Agitation, Reklame, 1923,

Sighele, S.: Psrychologie des Auflaufs und der Massenverbrechen, 1897.

Stern-Rubarth, E.: Die Propaganda als poritisches Instrument, 1921.

Szirtes, A.: Zur Psychologie der öffentlichen Meinung, 1921.

Tonnies, F.: Kritik der öffentlichen Minung, 1922.

Chassieriaud, R.: La formation de Popinion publique. 1914.

Deheame, G.: Les forces a'régler, 1919.

Moysset, H.: L'opinion publique, 1910.

Papon, J. P.: De paction de Popinion sur le gouvernement, 1788.

Rossi, P.: Le suggesteur et la foule, psychologie du meneur, 1904.

Tarde, G.: L'opinion et la fnule, 1901.

Angell, N.: The Public Mind, 1927.

Bernays, E. L.: Crystallizing Public Opinion, 1923.

Christensen, A.: Politics and Crowd-Morality, 1915.

Conway, M.: The Crowd in Peace and War, 1915.

Higham, C. F.: Looking Forward, 1920.

Kydd, S.: A Sketch of the Gronth of Public Opinion, 1888.

Le Bon: The Crowd. 1920.

Lee, I. L.: Publicity, 1925.

Lippman, W.: Public Opinion, 1922.

Lipsky, A.: Man tre Puppet, 1925.

Long, J, C.: Public Relation, 1924.

Lowell, A. L.: Public Opinion in War and Peace, 1923.

Mc Dougall, W.: The Group Mind, 1920.

Mc Dougsll, W.: An Introduchion to Social Psychology, 1908.

Mackinnon, W. A.: History of Civilization and Public Opinion, 1849.

Martin, E. D.: The Behavior of Crowds, 1920.

Quiett, G. C. and Casey, R.: Principles of Publicity, 1926.

Riis, R, W. and Bonner, C. W.: Publicity, 1926.

Ross, E. A.: Social Control, 1901.

Salmon, L. M.: The Newspaper and Authority, 1923.

Wallas, G.: Human Nature and Politics, 1908.

Weeks, A. D.: Control of the Social Mind, 1923.

Wilder, R. H. and Buell, K. L: Publicity, 1923.

Harwood Lawrence Childs. Propaganda And Dictatorship,,

Fritz Morstein Marx. Stat Propaganda in Germany,

Arnold F. Zurcher. Stat Propagandain Italy,

Bertram W. Maxwell. Stat Paopaganda in Soviet Russia,

Goebbels: Signale der neven Zeit (München)

Nordicus: Hitersm, the Fist in Germany

Heiden: History of national Sosialism (Methuen)

Handbuch für das Deutsche Reich: 1936—1939

Kluge-kruger: Verfassuug Verwaltvng in Dritten Reich.

The Spirit- and stroctnre German Fascism (Brady)

Joachim Reichenau: This man Goebbels.

Bernays, Edward L. Propaganda.

Biddle, William W. Propaganda and education.

Dodge, Raymnmd. The psychology of propaganda.

Dood, Leonard W. Propaganda.

Grabowsky, Adnlf. Bolschewismus.

Hadamovsky, Eugen. Propaganda und nationale Macht.

Lambert, R. S. Propaganda

Lasswell, Harold D. Propaganda technique in the world war.

Lumley, Frederick E. The propaganda menace.
Lumley, Frederick E. Means of social control.
Nikolai, W. Nachrichtendienst, Presse und Volksstimmung im Weltkrieg.
Plenge, Johann. Deutsche Propaganda.
Rogerson, S. Propaganda in the next war.
Schultze, Pfaelzer. Propaganda, Agitation und Reklame.
Stern, Robert, Edgar. Die Propaganda als politisches Instrument.
Stuart, Campbell. Secrets of Crewe House.
ラムリー著大松專一氏著「世界プロパガンダ戰」(實業之日本社)
小西鐵男氏著「プロパガンダ」(平凡社)
谷孫六氏著「宣傳時代相」(春秋社)
外務省調査部編「獨逸の宣傳組織と其の實際」(日本國際協會)
高梨菊次郎氏著「國家宣傳とジャーナリズム統制」(野田書房)
新田宇一郎氏著「新聞の現在及將來」(第一書房)

粟屋義純氏著「戰爭と宣傳」(時代社)
小松孝彰氏著「戰爭と思想宣傳戰」(春秋社)
小山榮三氏著「宣傳技術論」(高陽書院)
松本穎樹編「防諜科學」(モダン日本社)
フラー將軍著 澁川・救仁兩氏譯「全體主義戰爭論」(高山書院)
同盟通信社調査部編「國際宣傳戰」(高山書院)

大戰のプロパガンダ研究書

Baudrillart, M. A.: Notre. Propaganda, 1916.
Baschwitz, K.: Der Massenwhn, 1924.
Haas, A.: Die Propaganda im Ausland, 1916.
Hartmann, P.: Franzosische Kulturarbeit am Rhein, 1921.
Kerkhof, K.: Der Krieg gegen die deutsche Wissenschaft, 1922.
Ludendorff: Meine Erinnerungen, 1919.

Mühsam, K.: Wie wir belogen, wurden, 1920.

Ruhlmann, P. M.: Kultnrprodagaupa, 1919.

Schöuemann, F.: Die Kunst der Massoubenbeeinflussnng in den Vereiuigten Staaten von America,1924.

Stuelpnagal, O.: Die Nachkriegs-Propaganda der Alliierten gegeu Deutschland, 1922.

Wiehler.: Deutsche Wirtsch aftspropaganda im Weltkrieg, 1922.

Raudrillart, M. A.: Une campagne francaise, 1917.

Drouilly, J.: Les chefs-d'oeuvre de la propaganda allemande, 1919.

Granx L.: Les fausses nouvelles de la grande guerre, 1919.

Hallays, A.: L'opinion allemande pendeut la guerre, 1914-18, 1919,

Hansi et E, Tonnelet.: A travers les lignes ennemies, 1922.

Prézzolini, G.: Dopo caporetto, 1919.

Bernstorff, C.: My Three Years in America, 1920.

Blankenhorn, H.: Adventures in Propaganda, 1919.

Brownrigg, D.: Indiscretion of the Naval Cancor, 1920.

Busch, M.: Bismark, 1898.

Cook, E. T.: The Press in War-time, with some account of the Official Press Bureau, 1920.

Creel, G.: How We Advertised America, 1920.

Creel, G.: The War, the World and Wilson, 1920.

Lasswell. H. D.: The Status of Research on Interuational Propagauda and Opiniuu, 1926.

Lasswell, H. D.: Propaganda Technipue in the World War, 1927.

Steed, H. W.: Through Thirty Years, 1924.

Stuart, C.: Secrets of Crewe House, 1920.

Whitehouae, V. B.: A Year as a Government Agent, 1920.

清澤洌氏著「第二次歐洲大戰の研究」(東洋經濟社)

獨逸軍部プロパガンダ研究其他

Ziehen. A.: Die Psychologie grosser Heerführer, 1916.

Campeano, M.: Essai de psychloogie militaire individuelle et collective, 1902.

Gavet, A.: L'Art de commander, 1921.

Goddard, H. C.: Morale, 1918.

Hall, G. S.: Morale, 1920.

Mayer, L.: La psychologie du commaudement, 1923.

Rohau, H.: Le parfait capitaine, 1744.

Andrews, L. C.: Leadership, Military Training, 1918.

Audrews, L. C.: Military Manpower, 1920.

Gallishaw, J. and Lynch, W.: The Man in the Ranks, 1917.

Guliek, L. H.: Morals and Morale, 1919.

Hocking, W. E.: Morale and its Enemies, 1918.

House, F. N.: Industisal Morale, 1924.

Maxwell, W. N.: A Psychological Retrospect of the Great War, 1923.

Miller, A, H.: Leadership, 1920.

Munson, E, L.: The Management of Men, 1921.

Peterson. J.: Psychology of Handling Men in the Army, 1919.

ナポレオンの國家宣傳政策

Ebbinghaus, T.: Napoleon, England und die Presse, 1800-1803, 1914.

Périvier, A.: NapoléonJournaliste, 1918.

Angell, N,: Patriolism under Three Flags, 1903.

Martin, B, K.: The Triumph of Lord Palmerston, 1924.

Price, M. T.: Christian Missions and Oriental Civiligation, 1924.

H. C. Peterson.: Propaganda For war.

昭和十五年十一月三日　印刷
昭和十五年十一月十日　發行

新定價　壹圓八拾錢

著者　水野正次
發行兼印刷人　渡邊登喜雄
印刷所　名古屋印刷株式會社
名古屋市中區南久屋町三ノ四
發行所　名古屋新聞社
名古屋市中區西川端町一ノ五
振替名古屋一〇番
發賣所　東京市京橋區銀座四丁目（教文館ビル内）
名古屋新聞東京支社
同　大阪市東區北濱町三丁目
名古屋新聞大阪支社

著者
版權
所有

788
204

日獨伊三國同盟記念